



公益財団法人鹿児島県文化振興財団

埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (49)

一般国道 220 号古江バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (Ⅲ)

い し ば ち だ に
石鉢谷 A 遺跡

(鹿屋市古里町)

2022年3月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター



南東から桜島方面を望む

序 文

この報告書は、一般国道 220 号古江バイパス建設に伴い平成 30・令和元年度に実施した鹿屋市古里町に所在する石鉢谷 A 遺跡の発掘調査の記録です。

石鉢谷 A 遺跡では、旧石器時代の黒曜石剥片、縄文時代早期の集石 4 基や土器・石器、古墳時代の土器などが出土しました。

このように、本報告書は高隈山系南西麓における旧石器時代・縄文時代・古墳時代の遺構・遺物が確認されるなど南九州の先人の足跡を明らかにする貴重な手がかりを提供するものと考えます。

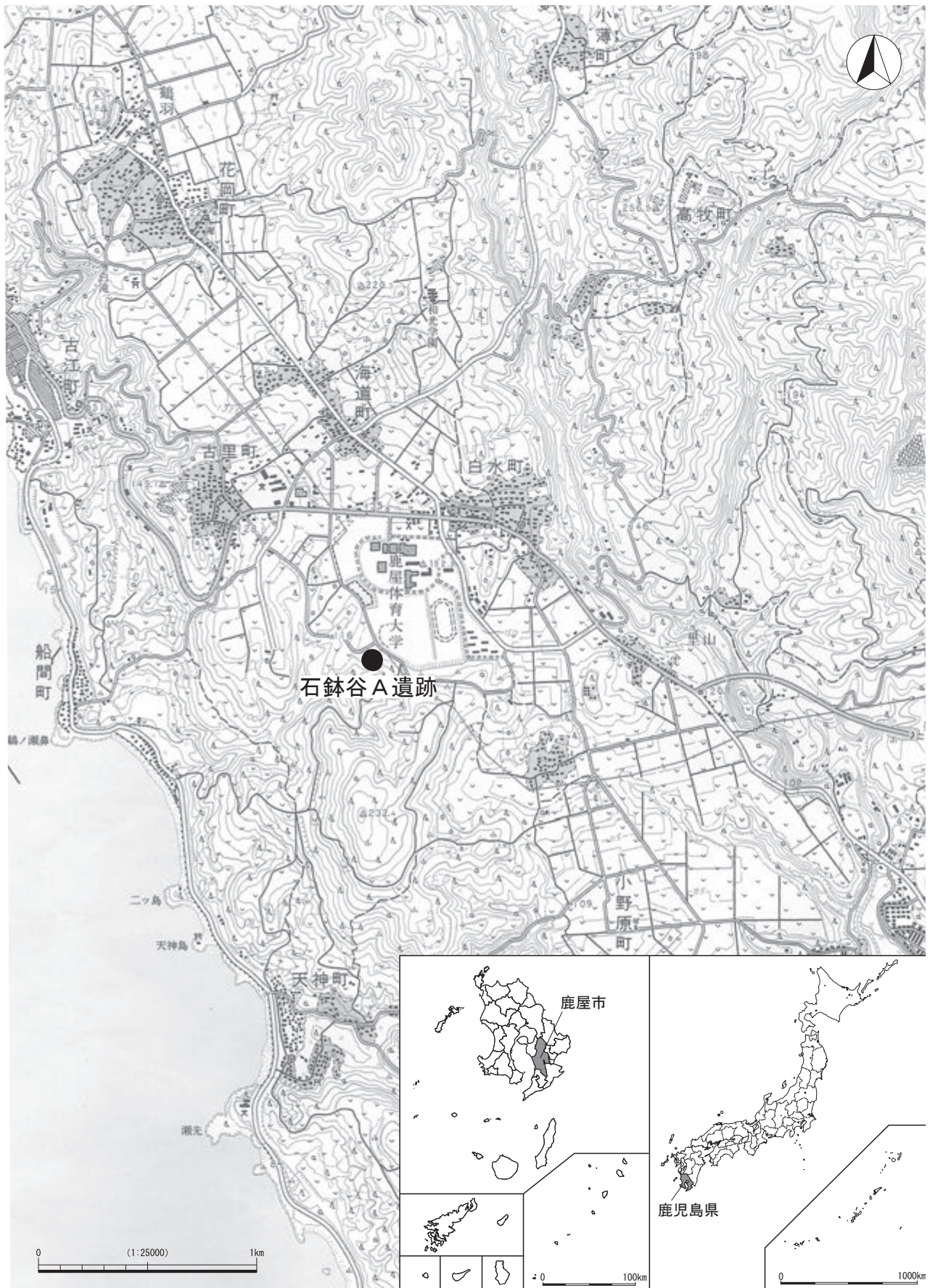
国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所をはじめ多くの関係者のご理解とご協力によりここに刊行できますことを深く感謝いたしますとともに、本報告書が今後の研究に資することを期待しております。

令和 4 年 3 月

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋 蔵 文 化 財 調 査 セ ン タ ー
センター長 中 村 和 美

報告書抄録

ふ り が な	いしばちだにえーいせき							
書 名	石鉢谷 A 遺跡							
副 書 名	一般国道 220 号古江バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (Ⅲ)							
シ リ ー ズ 名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書							
シ リ ー ズ 番 号	第 49 集							
編 集 者 名	藤崎光洋							
編 集 機 関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター							
所 在 地	〒 899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森 2 番 1 号 TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576							
発 行 年 月	西暦 2022 年 3 月							
ふ り が な 所 収 遺 跡 名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
いしばちだにえーいせき 石鉢谷 A 遺跡	かごしまけん 鹿児島県 かのやし 鹿屋市 ふるさとちよう 古里町	46203	203-142	31° 23″ 27′	130° 47″ 9′	本調査 2018.11.01 ～ 2019.03.08 2019.11.01 ～ 2020.01.28	4,298 3,110	一般国道 220 号古江バイパ ス建設に伴う 記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
石鉢谷 A 遺跡	散布地	旧石器時代		—		黒曜石剥片		
		縄文時代早期		集石 4 基		塞ノ神 Aa 式土器, 打製石鏃, 石匙, 剥片石器, 石核, 水晶 剥片, 打製石斧, 礫器, 磨石, 敲石, 台石, 石皿		
		縄文時代晩期		—		粗製土器 組織痕土器		
		古墳時代		—		成川式土器		
		その他		—		古代; 土師器, 黒色土器, 須 恵器 近世; 陶磁器		
遺跡の概要		石鉢谷 A 遺跡は, 標高差約 10m の傾斜地に形成された, 旧石器時代から古墳時代までの複合遺跡である。 旧石器時代においては, 黒曜石の剥片が出土した。縄文時代早期は, 集石 4 基が検出され, 塞ノ神 Aa 式土器を主 体とする土器や石器が出土した。縄文時代晩期は, 土器が出土している。古墳時代は, 成川式土器が多く出土してい る。						



石鉢谷A遺跡位置図 (1:25,000)

例 言

- 1 本編は、一般国道 220 号古江バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書「石鉢谷 A 遺跡」である。
- 2 石鉢谷 A 遺跡は、鹿児島県鹿屋市古里町に所在する。
- 3 石鉢谷 A 遺跡は、平成 3 年度に鹿児島県教育委員会が実施した埋蔵文化財分布調査で確認された遺跡で、鹿児島県教育委員会が平成 29 年度に試掘調査を実施している。
- 4 平成 30・令和元年度の発掘調査及び令和 3 年度の報告書作成作業は、国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所から鹿児島県教育委員会が受託し、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 5 掲載遺物番号は、遺跡ごとの通し番号であり、本文・挿図・表・図版の遺物番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高である。
- 8 遺物注記等で用いた遺跡記号は、「石ハチ A」である。
- 9 本書で用いた方位は、全て磁北である。

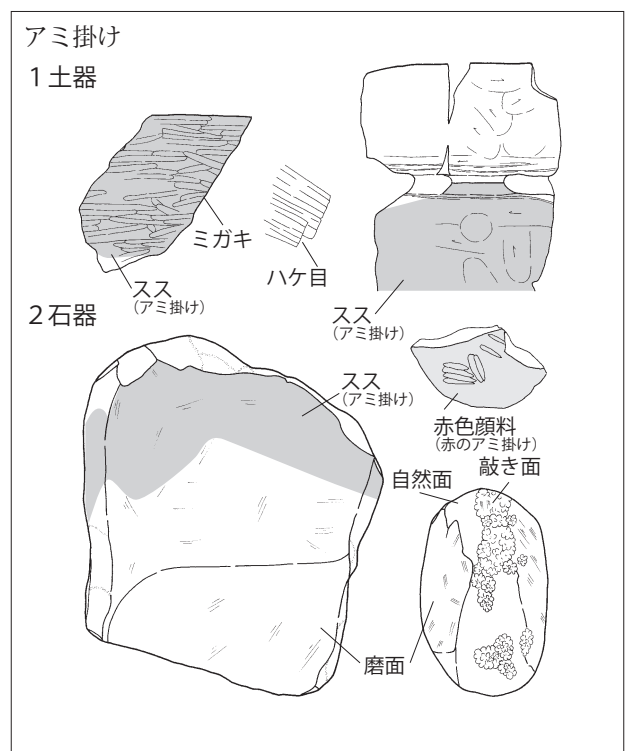
- 10 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、調査担当者が行った。
- 11 遺跡の空中写真については、平成 30 年度に「株式会社ふじた」に委託した。
- 12 出土遺物の実測・トレースは報告書作成担当者が整理作業員の協力を得て行った。
- 13 出土遺物の写真撮影は、福永修一と西園勝彦が行った。
- 14 本書の編集は藤崎が担当し、各章の執筆分担は次の通りである。

第 I 章	藤崎
第 II 章	百枝
第 III 章	藤崎
第 IV 章	藤崎
第 V 章	藤崎

- 15 出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用を図る予定である。

凡 例

- 1 本書掲載の遺構配置図・遺物出土状況図は、1 グリッド（1 マス）が 10 m 四方であり、各図に縮尺を示してある。
- 2 本書掲載の遺構の縮尺は、基本的に以下のとおりである。ただし、遺構の大きさによってはこの限りではない。
 - (1) 遺構図は、集石遺構が 1/20 である。
 - (2) 遺構図の断面図については、平面図と同縮尺である。
- 3 掲載遺物の縮尺は、土器・石器が 1/3 を基本としたが、遺物の大きさによって変更したものもある。各図に縮尺を提示してある。
- 4 観察表の「胎土」における記号の表現は、確実に含まれていると判断した項目に○を付している。
- 5 土器や石器の図中の表現は、右図のとおりである。



本文目次

巻頭カラー
序文
報告書抄録
遺跡位置図
例言

目次

第Ⅰ章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 事前調査	1
第3節 本調査	2
第4節 整理・報告書作成作業	3
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第Ⅲ章 調査の方法と層序	8
第1節 調査の方法	8
第2節 層序	10
第Ⅳ章 調査の成果	13
第1節 調査の概要	13
第2節 旧石器時代の調査	13
第3節 縄文時代早期の調査	15
第4節 縄文時代晩期の調査	26
第5節 古墳時代の調査	28
第6節 古代以降の調査	38
第Ⅴ章 総括	41
写真図版	43

挿図目次

第1図 周辺遺跡位置図	6
第2図 トレンチ・グリッド配置図	9
第3図 調査範囲図	9
第4図 旧石器時代調査範囲図	9
第5図 土層断面位置図	10
第6図 土層断面図(1)	10
第7図 基本層序	11
第8図 土層断面図(2)	11
第9図 土層断面図(3)	12
第10図 旧石器時代の遺物	13
第11図 旧石器時代の遺物出土状況図及び地形図	14
第12図 縄文時代早期遺構配置図及び遺物出土状況図	14
第13図 集石1号	16
第14図 集石1号出土遺物	17
第15図 集石2号及び2号出土遺物	18
第16図 集石3号及び3号出土遺物	19
第17図 集石4号	20
第18図 縄文時代早期の土器・石器(1)	21
第19図 縄文時代早期の石器(2)	22
第20図 縄文時代早期の石器(3)	23
第21図 縄文時代早期の石器(4)	24
第22図 縄文時代晩期の遺物出土状況図及び地形図	26
第23図 縄文時代晩期の土器・石器	27

第24図 古墳時代の遺物出土状況図及び地形図	29
第25図 古墳時代の土器(1)	30
第26図 古墳時代の土器(2)	31
第27図 古墳時代の土器(3)	32
第28図 古墳時代の土器(4)	33
第29図 古墳時代の土器(5)	34
第30図 古墳時代の土器(6)	35
第31図 古代以降の土器	39
第32図 中世・近世の遺物	40

表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	7
第2表 旧石器時代石器観察表	13
第3表 縄文時代早期遺構内石器観察表	20
第4表 縄文時代早期集石一覧表	20
第5表 縄文時代早期土器観察表	25
第6表 縄文時代早期石器観察表	25
第7表 縄文時代早期石器組成表(V・Ⅵ層出土)	25
第8表 縄文時代晩期土器観察表	27
第9表 縄文時代晩期以降石器観察表	27
第10表 縄文時代晩期以降石器組成表(Ⅲ層出土)	27
第11表 古墳時代土器観察表(1)	36
第12表 古墳時代土器観察表(2)	37
第13表 古代以降の土器観察表	38
第14表 中世・近世の遺物観察表	38
第15表 土器剥落状況観察表	42

図版目次

図版1 ①遺跡全景(西から肝属山系方面を望む)	43
図版2 ①遺跡全景(南から高隈山方面を望む) …	44
②遺跡全景(北から開間岳方面を望む) …	44
図版3 ①調査風景(I-8区Ⅴ層) …	45
②地形測量と造成による地形改変状況 …	45
③谷状の地形(F・G-5区Ⅸ・Ⅹ層上面) …	45
④谷状の地形(E~G-3区Ⅶ層上面) …	45
⑤東西土層断面(G・H-4区南壁) …	45
図版4 ①南北土層断面(H・I-5~7区東壁) …	46
②集石1号検出状況(B・C-1区) …	46
③集石2号の埋土と検出状況(C-5区) …	46
④集石2号検出状況 …	46
図版5 ①集石3号検出と石皿出土状況(H-8区) …	47
②集石4号検出状況(H-8区) …	47
③集石3・4号周辺の調査状況 …	47
④流れ込みと判断した礫集中部分 …	47
図版6 ①磨石出土状況 …	48
②剥片石器出土状況 …	48
③凹石皿出土状況 …	48
④土器出土状況 …	48
⑤土器出土状況 …	48
⑥遺物出土状況 …	48
⑦遺物出土状況 …	48
図版7 旧石器時代の遺物 …	49
縄文時代早期の遺構内出土石器 …	49

図版 8	縄文時代早期の土器	50
	縄文時代早期の石器 (1)	50
図版 9	縄文時代早期の石器 (2)	51
図版 10	縄文時代晩期の土器・石器	52
図版 11	古墳時代の土器 (1)	53

図版 12	古墳時代の土器 (2)	54
図版 13	古墳時代の土器 (3)	55
図版 14	古墳時代の土器 (4)	56
図版 15	古墳時代の土器 (5)	57
図版 16	古代以降の遺物	58



H31 調査開始前



H31 調査風景



R2 調査風景



R3 整理作業（土器の分類・接合）



R3 整理作業（土器の拓本）



R3 遺物写真撮影

第Ⅰ章発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

平成3年、当時の建設省九州建設局大隅工事事務所（以下、「大隅工事事務所」）は、一般国道220号古江バイパスの施工計画に基づき、事業区内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（以下、「県文化課」）に照会した。

これを受けて県文化課は、平成3年6月18日に鹿屋・垂水間の埋蔵文化財分布調査を実施し、事業地内に白水A遺跡等11か所の所在を確認した。

この埋蔵文化財分布調査の結果を受けて、大隅工事事務所と県文化課で遺跡の取り扱いについて協議を行い、埋蔵文化財の保護と事業の推進を図るために鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、「埋文センター」）が白水A遺跡・白水B遺跡・萩ヶ峰A遺跡・萩ヶ峰B遺跡の確認調査と一部本調査を実施することとなった。

平成5年度は、白水A遺跡と他3遺跡の確認調査及び白水B遺跡の一部発掘調査が7月から行われた。平成6年度は、白水B遺跡の調査を実施した。調査の未了部分は、次年度以降に実施することとなった。その後、26工区内で発見された遺跡の発掘調査を優先することとなり、白水A遺跡他3遺跡の調査を一時中断することとなった。

その後、25工区の工事の再開に伴い、平成25年度に国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所（以下、「大隅河川国道事務所」）と鹿児島県教育庁文化財課（以下、「県文化財課」）との協議を経て、発掘調査が再開された。発掘調査及び報告書作成作業は、県から委託を受け、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下、「埋文調査センター」）が実施した。

「埋文調査センター」は、平成29年度までに白水A遺跡・白水B遺跡・萩ヶ峰A遺跡・萩ヶ峰A遺跡拡張区・山ノ上B遺跡の発掘調査を実施した。また、文化財課が平成29年1月に、石鉢谷A遺跡と石鉢谷B遺跡の試掘調査を実施した。この試掘調査結果を受け、遺跡の範囲及び性格を把握するために文化財課及び埋文センターが、平成30年6月に確認調査を実施した。

この結果を受けて、大隅河川国道事務所と県文化財課で協議を行い、埋蔵文化財の保護と事業推進の調整を図るため、事業着手前に発掘調査（本調査）を実施することとなった。

石鉢谷A遺跡の調査対象面積は、表面積3,380㎡・延面積7,408㎡である。そのうち、平成30年度に、表面積2,150㎡・延面積4,298㎡の調査を終了した。令和元年度は、残りの表面積1,230㎡・延面積3,110㎡の調査

を行うこととなった。

発掘調査は、県文化財課が埋文調査センターに事業を委託し、令和元年11月1日～令和2年1月28日（実働48日）まで実施した。

整理・報告書作成作業は、令和3年度に実施した。

なお、国道220号バイパス建設に伴う発掘調査等の経緯については、第Ⅱ章末尾に「参考」として示してある。

第2節 事前調査

1 試掘調査

石鉢谷A遺跡は、平成29年1月に県文化財課が試掘調査を実施した。

（1）試掘調査体制（平成28年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査担当	鹿児島県教育庁文化財課

文化財主事	黒川 忠 広
立 会 者	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所 調査課
専 門 職	桑 本 真一郎
協 力 者	鹿屋市教育委員会生涯学習課

	稲 村 博 文
〃 文化財調査員	上 蘭 進 二

（2）試掘調査の経過（試掘調査）

平成29年1月に試掘調査を実施した。調査は、トレンチを2本設定し、重機による掘り下げを進めた結果、1トレンチにおいて遺構が検出された。

2 確認調査の経過

石鉢谷A遺跡の確認調査は、隣接する石鉢谷B遺跡とともに平成30年6月4日から6月27日にかけて埋文センターが実施した。調査体制及び調査経過については、以下のとおりである。

（1）確認調査体制（平成30年度）

事業主体	鹿児島県教育委員会
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター

	所 長	堂 込 秀 人
調査企画	〃 次長兼調査課長	

		大久保 浩 二
〃 総 務 課 長		高 田 浩
〃 第二調査係長		宗 岡 克 英
調査担当	〃 文化財主事	倉 元 良 文
	〃 文化財研究員	松 山 初 音
事務担当	〃 主 査	新 穂 秀 貴

(2) 確認調査の経過

確認調査は、調査対象区域内にトレンチを9か所設定し、掘り進めた結果、1トレンチと6トレンチ内から縄文時代晩期と古墳時代の遺物が出土した。

第3節 本調査

石鉢谷A遺跡の本調査は、平成30・令和元年度に実施した。以下、調査体制・調査経過について述べる。

1 調査体制

【平成30年度】

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査総括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター
	センター長 前 迫 亮 一
調査企画	// 総務課長兼係長 中 村 伸一郎
	// 調 査 課 長 中 原 一 成
	// 調 査 第三係長 三 垣 恵 一
調査担当	// 文化財専門員 辻 明 啓
	// 文化財専門員 立 神 倫 史
事務担当	// 事業推進員 塩 屋 奈 諸 美

発掘調査を平成30年11月1日～平成31年3月8日（実働86日）まで実施した。

【令和元年度】

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査総括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター
	センター長 中 原 一 成
調査企画	// 総務課長兼係長 中 島 治
	// 調 査 課 長 寺 原 徹
	// 調 査 第三係長 横 手 浩 二 郎
調査担当	// 文化財専門員 浦 博 司
	// 文化財調査員 福 地 祥 平
事務担当	// 主 査 有 川 剛 弘

発掘調査を令和元年10月28日～令和2年1月29日（実働46日）まで実施した。

2 調査経過

調査の経過については、以下のとおり日誌抄を集約して記載した。

【平成30年度】

11月 調査区および営繕用地環境整備

1日、本調査開始。B・C-1～6区表土剥ぎ。

包含層検出作業、Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ層（古墳時代・縄文晩期・早期該当）B・C-1・2区Ⅴ・Ⅵ層調査。C-1区集石1号検出、写真撮影、実測。旧石器先行トレンチ設定、掘り下げ。B・C-3～5区Ⅲ層調査。E～G-3・4区表土剥ぎ、包含層検出作業。

国交省との現地打ち合わせ。

12月 B・C-1～3区旧石器先行トレンチ完掘、写真撮影。B-1区集石1号掘り込み実測、埋土内礫検出状況および完掘状況写真撮影。B・C-3～5区Ⅲ層調査終了、完掘状況写真撮影、Ⅴ・Ⅵ層調査。旧石器先行トレンチ調査。B・C-1・2区Ⅶ層上面地形測量。B・C-3～5区Ⅳ・Ⅶ層上面地形測量。Ⅴ層調査、集石2号検出、出土遺物取り上げ。E～G-3・4区Ⅲ層調査。出土遺物取り上げ。環境整備（場外搬出用スロープ設置作業）E～G-1・2区表土剥ぎ。E～G-1～4区Ⅲ層調査、出土遺物取り上げ。F-4区SK01検出状況写真撮影。B・C-1～5区排土搬出路設置準備および埋め戻し。三垣係長現地確認。安全パトロール。

1月 C・D-5・6区表土剥ぎ、写真撮影、Ⅲ層完掘、Ⅴ・Ⅵ層調査、完掘状況写真撮影、集石2号調査、完掘状況写真撮影、Ⅷ層上面地形測量、調査終了。D-1～3区表土剥ぎ。E・F-1～4区Ⅲ層調査、SK01調査、出土遺物取り上げ。E・F-1・2区Ⅳ層（アカホヤ火山灰）剥ぎ取り。E・F-3・4区Ⅲ層遺物取り上げ、Ⅳ層上面地形測量。E～G-1・2区Ⅲ層遺構精査、Ⅲ層完掘状況写真、Ⅳ層上面地形測量、Ⅴ層検出状況写真撮影、Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層調査終了、完掘状況写真撮影。E～G-3・4区Ⅲ層完掘、写真撮影、Ⅴ・Ⅵ層調査、完掘状況写真撮影、Ⅶ層正面地形測量。三垣係長現地調査。

2月 C・D-3・4区Ⅴ・Ⅵ層調査終了、完掘状況写真撮影、Ⅶ層上面地形測量。C-2区Ⅷ層調査。D-4区Ⅷ層調査終了、完掘状況写真撮影。E-4区Ⅷ層調査、SK01調査、実測、断ち割り状況写真撮影。SK01は、自然の落ち込みと判断。F・G-4区Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層調査終了。C-2区Ⅷ層調査終了、完掘状況写真撮影。E-4区Ⅷ層調査終了、完掘状況写真撮影。E～H-4区東西土層断面写真撮影。土層断面実測。空中写真撮影（株式会社ふじた）。前迫センター長現地視察。中原課長現地指導。三垣係長現地調査。現場撤収作業。

3月 現場撤収業務。8日、作業終了。

【令和元年度】

- 10月 28日, 本調査開始。表土剥ぎ, 環境整備。
- 11月 1日, 寺原課長現場開始挨拶。E～G-5・6区Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ層掘り下げ, 遺物取り上げ, Ⅳ層上面完掘状況写真撮影, 地形測量, 先行トレンチ調査, 石皿検出状況写真撮影。H-5～7区環境整備, Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。H・I-8・9区表土剥ぎ。中原センター長現地視察。安全衛生パトロール。
- 12月 E～G-5・6区Ⅴ・Ⅵ層掘り下げ, 磨石検出状況写真撮影, 遺物取り上げ, Ⅵ層(サツマ)上面完掘状況写真撮影, Ⅵ層上面地形測量。H・I-5～8区Ⅲ～Ⅷ層掘り下げ。石皿・集石3・4号検出状況写真撮影, 実測, 遺物出土状況写真撮影, 遺物取り上げ, Ⅵ層上面完掘状況写真撮影, 土層断面実測。Ⅳ層上面地形測量。
- 1月 H・I-5～7区Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ層掘り下げ, Ⅵ層上面完掘状況写真撮影, Ⅵ層上面地形測量, 東壁土層断面写真撮影・実測, 遺物取り上げ。E～G-5・6区Ⅶ・Ⅷ層掘り下げ, 遺物取り上げ。エリア図作成。先行トレンチ旧石器完掘状況写真撮影, 安全衛生パトロール。産業医職場訪問。中原センター長現地視察, 寺原課長現地指導, 横手係長現地調査。国交省との引き渡し協議。環境整備, 荷出し。29日, 作業終了。

第4節 整理・報告書作成作業

石鉢谷A遺跡の整理・報告書作成作業は令和3年度に実施した。調査体制・整理事業の経過については以下のとおりである。

1 作成体制

【令和3年度】

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査総括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター		
	センター長	中村和美	
調査企画	// 総務課長兼係長	中島治	
	// 調査課長	福永修一	
	// 調査第三係長	黒川忠広	
調査担当	// 文化財専門員	藤崎光洋	
事務担当	// 主事	上園慶子	

2 整理事業の経過

整理事業の経過については, 日誌抄の集約による。

なお, 遺物の水洗い・注記については, 遺物総数が比較的少なかったこともあり, 発掘作業期間中に終えるこ

とができた。

【令和3年度】

- 4月 データ整理・現場実測図等整理
遺物選別・土器接合・復元
- 5月 データ整理・現場写真選別及びレイアウト
土器接合・復元・実測・写真整理・原稿執筆
- 6月 土器接合・復元・実測・原稿執筆
遺物実測図チェック及び修正・拓本
- 7月 土器実測・石器実測・拓本・トレース・接合
・復元・遺物実測図チェック及び修正・トレース・
原稿執筆
- 8月 遺物等トレース図チェック及び修正・原稿執筆
- 9月 遺構配置図作成・遺物写真撮影・原稿執筆
- 10月 土器及び石器レイアウト・原稿執筆・遺物写真
レイアウト
- 11月 挿図等の最終チェック・原稿執筆・入札準備
- 12月 原稿執筆・入稿データ集約
- 1月 原稿校正・遺物等収納準備
- 2月 原稿校正・遺物等収納(埋文センター収蔵庫へ)
- 3月 原稿校正・報告書納品

なお, 報告書作成指導委員会等の期日等は, 以下のとおりである。

報告書作成指導委員会

令和3年 6月 2日(水) 福永課長ほか6名

報告書作成進捗確認及び指導

令和3年 7月 16日(金) 中村センター長ほか4名

報告書作成検討委員会

令和3年 8月 6日(金) 中村センター長ほか5名

報告書作成検討委員会

令和3年 10月 5日(火) 中村センター長ほか5名

報告書作成検討委員会

令和3年 11月 4日(木) 中村センター長ほか5名

報告書作成検討委員会

令和3年 11月 24日(水) 中村センター長ほか5名

報告書作成検討委員会

令和3年 11月 26日(金) 中村センター長ほか5名



平成30年度の発掘調査作業員

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

石鉢谷A遺跡は鹿児島県鹿屋市古里町に所在する。鹿屋市は大隅半島の中央部に位置し、面積は448.33km²、市域は東西20km、南北41kmに及ぶ。人口規模では鹿児島市、霧島市に次ぐ県内3番目の約10万人（令和3年4月現在）を数え、大隅地方の交通・産業・経済等の中心都市となっている。東は大崎町・東串良町・肝属町、西は垂水市及び鹿児島湾、南は錦江町、北は曾於市・霧島市と境を接している。大正元年に鹿屋村が鹿屋町となり、昭和16年に鹿屋町・大始良村・花岡村の合併により市政を施行し、昭和30年代の高隈村等の編入を経て、平成18年に鹿屋市・輝北町・串良町・吾平町が合併し、新鹿屋市が発足した。

市の北西部は砂質岩・泥質岩・花崗岩からなる1,000m級の、大簗柄山、横岳、御岳が並ぶ高隈山系が、南東部には安山岩・溶結凝灰岩よりなる700～800m級の肝属山系が連なる。この山系の間には笠野原台地などのシラス台地と市の中心部を流れる高隈山系を源とする肝属川の沖積地を中心とする肝属平野が広がる。市の西側は肝属川と同じく高隈山系を源とする高須川がほぼ南流しながら最後は鹿児島湾へと注いでいる。一般的にシラス台地は生産性が低いが、昭和42年に高隈ダムの完成によりシラス台地への給水が開始され畑地としての開発が進んだ。現在でも農業・畜産が盛んで、黒豚・ブロイラー・落花生・サツマイモなどが特産品である。また、鹿屋体育大学や海上自衛隊鹿屋航空基地があることでも全国的にその名が知られている。

石鉢谷A遺跡がある古里町は鹿屋市の西部にあり、北側は高隈山系に連なり、鹿屋原台地を浸食しながら東南の方向へ流れる高須川の右岸に位置する。高須川を臨む台地の東側縁部には平成2年度に発掘調査を実施した西丸尾遺跡があり、そこから西へ約700mの距離に両遺跡がある。両遺跡は標高約140～170m程度の小高い丘のなだらかな南側斜面上にあり、目の前には田園風景が広がる。西側には、両遺跡のある小高い丘と同じような丘が浅い谷を隔てて連なり、その北側には鹿屋体育大学の広い敷地が広がる。なお、石鉢谷A遺跡の東側には、宇都平遺跡・山ノ上B遺跡・山ノ上A遺跡へと続き、西側には、石鉢谷B遺跡・古里A遺跡・古里B遺跡・古里遺跡へと続く。

第2節 歴史的環境

国道220号バイパス建設に伴い、これまで多くの発掘調査が実施されてきた。昭和55～59年度にかけて

王子遺跡、昭和60年度～平成元年度にかけて中ノ原遺跡・中ノ丸遺跡・榎田下遺跡・川ノ上遺跡・前畑遺跡・中原山野遺跡・白水A遺跡の所在する白水地区の近隣でも昭和63年度～平成4年度にかけて榎崎A遺跡・榎崎B遺跡・飯盛ヶ岡遺跡・西丸尾遺跡・西丸尾B遺跡、平成9～22年度にかけて花岡町及び古里町に所在する中野西遺跡他11遺跡や平成26年度から白水B遺跡他5遺跡の発掘調査が実施され、多くの調査結果を残している。

旧石器時代

この時期を代表する遺跡としては西丸尾遺跡があげられる。発掘調査の結果、ナイフ形石器文化期の礫群5基や細石器文化期の礫群4基の他、縄文時代草創期の礫群2基と配石遺構1基、縄文時代早期の集石17基が検出されている。また、ナイフ形石器・剥片尖頭器・三稜尖頭器・細石刃核等が出土している。榎崎B遺跡ではナイフ形石器・細石刃が出土し、細石刃文化期のピット群と礫群が検出され、相互に関連した生活遺構として捉えられている。白水B遺跡ではナイフ形石器・細石刃が出土している。榎崎A遺跡では細石刃が出土している。鷲ヶ迫遺跡では薩摩火山灰の下層で12基の落とし穴が検出され、旧石器時代から縄文時代草創期のものと考えられている。

縄文時代

飯盛ヶ岡遺跡では、縄文時代早期の吉田式土器・石坂式土器・苦浜式土器・平椀式土器等多くの土器が出土している。前畑遺跡では多くの集石遺構と共に平椀式土器が多く出土し、その中には壺形土器も見られる。白水B遺跡では、下剥峯式土器が出土した。縄文時代前期では、榎田下遺跡から轟式土器、中ノ丸遺跡から轟式・曾畑式土器が出土している。縄文時代中期の春日式土器が中野西遺跡で多く出土し、榎田下遺跡・前畑遺跡・中ノ原遺跡でもわずかに確認されている。縄文時代後期では中ノ原遺跡から指宿式土器や市来式土器とともに西北九州系の納曽式・西平式土器がまとまって出土している。また、中ノ丸遺跡からは縄文時代晩期の入佐式土器が出土している。白水B遺跡からは縄文時代晩期の榎原式文様土器が出土している。

弥生時代

弥生時代では、白水A遺跡から東へ約4kmに所在する王子遺跡が特筆される。昭和56年度から始まった調査で弥生時代中期末から後期初頭にかけての竪穴建物跡27軒、掘立柱建物跡14棟を含む大規模な集落跡が確認された。なかでも、花卉状住居跡や棟持ち柱付の

掘立柱建物及び土坑を伴う住居跡の検出は特筆すべき調査成果である。また、在地の山ノ口式土器をはじめ北九州系及び瀬戸内系等の土器や鉄製の鉋や刀子も出土している。中ノ丸遺跡では中期末から後期初頭にかけての竪穴建物跡や円形周溝墓が検出され、中ノ原遺跡・前畑遺跡からも同時期の遺構・遺物が確認されている。

古墳時代

領家西遺跡は古墳時代が主体をなし、竪穴建物跡 65 軒、鉄鏃や短剣が副葬された土坑 2 基等を検出している。白水 B 遺跡では、土坑 10 基、ピット 196 基、古道が検出している。榎崎 A 遺跡では古墳時代の溝 1 条が検出され、榎崎 B 遺跡からは遺構は検出されなかったが、いずれの遺跡からも成川式土器が出土している。

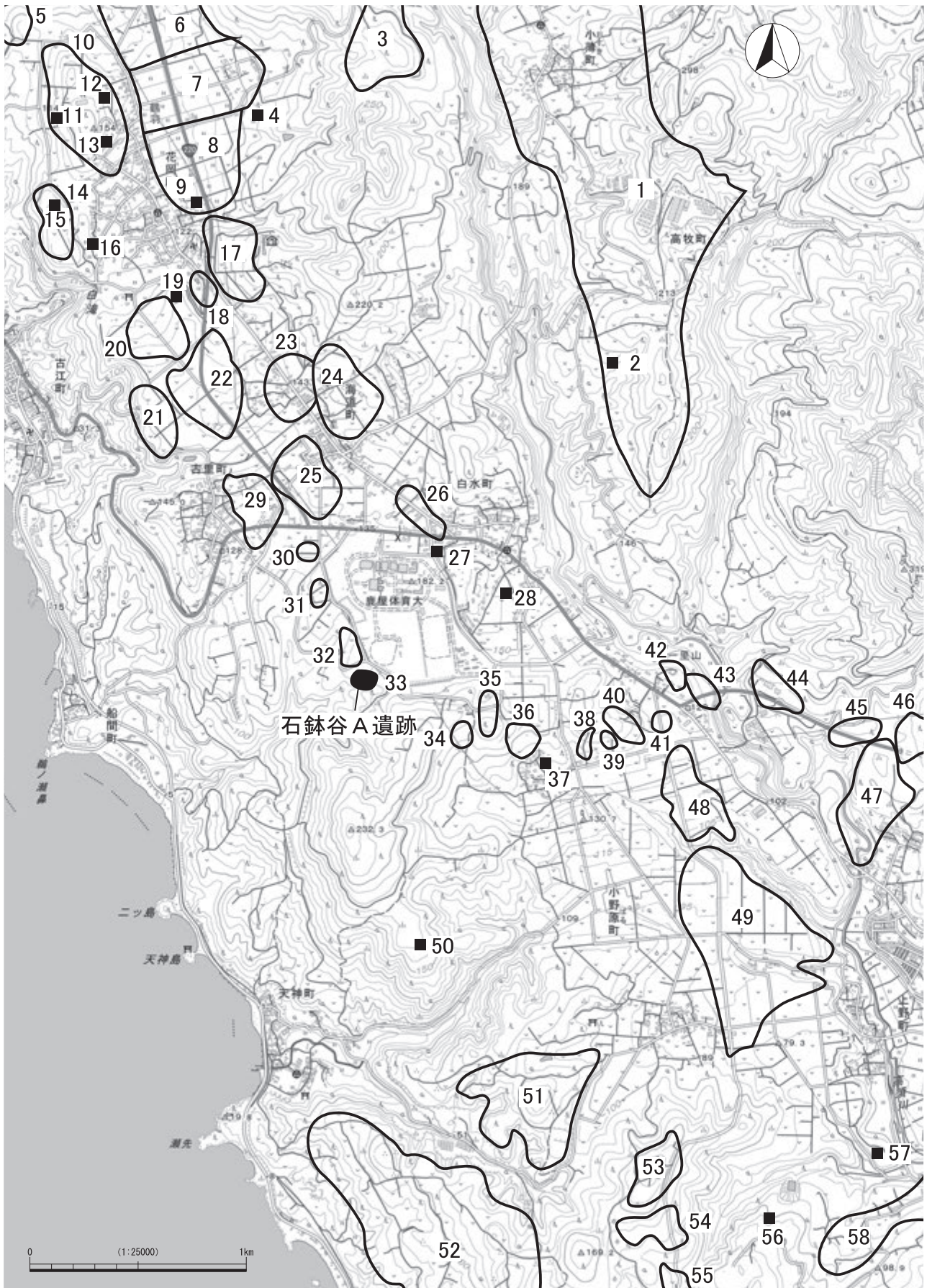
古代～中・近世

平安時代の遺構・遺物を検出した遺跡としては、榎崎 A・B 遺跡があげられる。榎崎 A 遺跡では時期差を

判断できる周溝墓 5 基、榎崎 B 遺跡では「箇」の異体字「个」が墨書された土師器が数点見られる。

平安時代の『和名類聚抄』には、始羅郡の郷として「鹿屋」が見られ、地名としての「鹿屋」はこれが初出である。中世には鹿屋院と称され、建久 8 年の「大隅国図田帳」には「鹿屋院八十五丁九段」と記されている。近世に入ると薩摩藩は外城制を敷き、新鹿屋市域では鹿屋・大始良・花岡・高隈・串良・始良・百引・市成の 8 郷が置かれた。第二次世界大戦中には、3 つの旧海軍飛行場が存在し、日本で最も多くの特攻隊員が出撃した。当時の遺構として市指定文化財に登録された笠野原基地跡の川東掩体壕や串良基地跡の地下第一電信室などの戦争遺跡が現在も残り、鹿屋市は平和学習を推進している。

—参考—		国道 220 号バイパス建設に係るこれまでの確認調査・発掘調査等の経緯
昭和 53 年		国道220号バイパス建設計画，一部着工
昭和 56 年 1 月～ 56 年 2 月		王子遺跡の確認調査
昭和 56 年10 月～ 59 年 3 月		王子遺跡の発掘調査
昭和 60 年 4 月～ 60 年 5 月		中ノ原遺跡・中ノ丸遺跡等の確認調査
昭和60 年 10 月～ 61 年 3 月		中ノ原遺跡・中ノ丸遺跡の発掘調査
昭和 61 年 4 月～ 62 年 3 月		榎田下遺跡・中ノ丸遺跡・川ノ上遺跡・中ノ原遺跡の発掘調査
昭和 62 年 4 月～ 63 年 1 月		前畑遺跡・中原山野遺跡の発掘調査
昭和 62 年 9 月～ 62 年 10 月		白水地区の確認調査
昭和 63 年 4 月～ 63 年 8 月		前畑遺跡・中原山野遺跡の発掘調査
昭和 63 年 5 月～ 平成元年 9 月		榎崎 A 遺跡・飯盛ヶ岡遺跡の発掘調査
昭和 63 年 9 月～ 平成元年 9 月		榎田下遺跡・中ノ丸遺跡・川ノ上遺跡・中ノ原遺跡・前畑遺跡・中原山野遺跡の発掘調査
平成 元年 4 月～ 2 年 3 月		飯盛ヶ岡遺跡・榎崎 B 遺跡の発掘調査
平成 2 年 4 月～ 3 年 3 月		榎崎 B 遺跡・西丸尾遺跡発掘調査
平成 3 年 4 月～ 3 年 6 月		榎崎 B 遺跡の発掘調査
平成 4 年 6 月～ 5 年 3 月		西丸尾 B 遺跡の発掘調査
平成 5 年 7 月～ 5 年 11 月		白水 A 遺跡・白水 B 遺跡・萩ヶ峰 A 遺跡・萩ヶ峰 A 遺跡（拡張）遺跡の確認調査
平成 5 年12 月～ 6 年 3 月		白水 B 遺跡の発掘調査
平成 9 年10 月～ 18 年 10 月		中野西遺跡・松山田西遺跡・鷲ヶ迫遺跡・北原中遺跡・領家西遺跡・天神平溝下遺跡・中ノ原遺跡・中ノ丸遺跡の発掘調査
平成 20 年 4 月～ 22 年 3 月		宇都上遺跡・早山遺跡・稲荷山遺跡・鎮守山遺跡の発掘調査
平成 26 年 5 月～ 27 年 2 月		白水 B 遺跡の発掘調査
平成 27 年 5 月～ 28 年 2 月		萩ヶ峰 A 遺跡の発掘調査
平成 27 年11 月・ 28 年 1 月		山ノ上 B 遺跡の試掘調査
平成 28 年 5 月～ 28 年 7 月		白水 A 遺跡の発掘調査
平成 28 年 5 月～ 28 年 9 月		萩ヶ峰 A 遺跡の発掘調査
平成 28 年 8 月～ 29 年 2 月		萩ヶ峰 A 遺跡の発掘調査
平成 29 年10 月～ 30 年 3 月		萩ヶ峰 A 遺跡の発掘調査
平成 29 年 1 月		石鉢谷 A・B 遺跡の試掘調査
平成 30 年 6 月		石鉢谷 A・B 遺跡の確認調査
平成 31 年11 月～ 31 年 3 月		石鉢谷 A 遺跡の発掘調査
令和 元年11 月～ 2 年 1 月		石鉢谷 A 遺跡の発掘調査



第1図 周辺遺跡位置図

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	時代						備考
				旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	
1	小薄町遺跡群	鹿屋市小薄町・有武町・高牧町	散布地		○		○			
2	小薄神社跡	鹿屋市小薄町	社寺跡							
3	柴立	鹿屋市花岡町柴立	散布地		○		○			
4	日枝神社跡	鹿屋市花岡町	社寺跡							
5	城ヶ崎	鹿屋市花岡町城ヶ崎	散布地		○		○			
6	鷲ヶ迫	鹿屋市花岡町	集落跡	○	○		○			県埋セ報告書 132
7	北原中	鹿屋市花岡町	集落跡		○		○	○	○	
8	領家西	鹿屋市花岡町	集落跡		○	○	○	○	○	県埋セ報告書 141, 近世
9	大剋院跡	鹿屋市花岡町	社寺跡							近世
10	鶴羽城跡	鹿屋市花岡町鶴羽	城館跡		○		○	○	○	近世
11	木谷城跡	鹿屋市花岡町	城館跡						○	
12	稻荷神社跡	鹿屋市上谷町	社寺跡							
13	菅原神社跡	鹿屋市花岡町	社寺跡							
14	下堂ノ尾	鹿屋市花岡町	散布地				○			
15	恵海山光明院禅定寺跡	鹿屋市古江町木谷	社寺跡							
16	稻荷神社跡	鹿屋市花岡町	社寺跡							
17	天神平溝下	鹿屋市花岡町	集落跡		○		○		○	県埋セ報告書 141, 近世
18	宇都上	鹿屋市花岡町	散布地		○		○		○	県埋セ報告書 132,177
19	円覚山真如院法界寺跡	鹿屋市古江町木谷	社寺跡							近世
20	早山	鹿屋市花岡町早山・宮ノ脇	集落跡		○	○	○	○	○	県埋セ報告書 177, 近世
21	枯木ヶ尾	鹿屋市古里町枯木ヶ尾	散布地			○	○			
22	稻荷山	鹿屋市花岡町	集落跡		○	○	○	○	○	県埋セ報告書 177
23	本戸口	鹿屋市海道町本戸口	散布地							
24	俣刈	鹿屋市海道町俣刈迫	散布地		○		○			
25	鎮守山	鹿屋市古里町	集落跡		○		○	○		県埋セ報告書 177
26	千場	鹿屋市白水町	散布地		○	○				
27	竜池山明王院山島寺跡	鹿屋市古里町	社寺跡						○	
28	鎮守神社跡	鹿屋市白水町	社寺跡							
29	古里	鹿屋市古里町	散布地		○	○	○			
30	古里B	鹿屋市古里町	散布地				○	○	○	近世
31	古里A	鹿屋市古里町	散布地				○	○	○	近世
32	石鉢谷B	鹿屋市古里町	散布地		○		○	○	○	近世
33	石鉢谷A	鹿屋市古里町	散布地	○	○		○	○	○	本報告書
34	宇戸平	鹿屋市小野原町	散布地		○					
35	山ノ上B	鹿屋市小野原町	散布地	○	○		○			埋調セ報告書 41
36	山ノ上A	鹿屋市小野原町	散布地				○	○	○	近世
37	鎮守神社跡	鹿屋市白水町	社寺跡							
38	白水B	鹿屋市白水町	散布地	○	○		○		○	埋調セ報告書 9, 近世
39	萩ヶ峰B	鹿屋市白水町	散布地				○	○	○	近世
40	萩ヶ峰A	鹿屋市白水町	散布地				○	○	○	H 26～28 本調査, 近世
41	白水A	鹿屋市白水町	散布地		○		○			埋調セ報告書 41
42	西丸尾B	鹿屋市白水町西丸尾	散布地	○	○		○	○		県埋セ報告書 9
43	西丸尾	鹿屋市白水町西丸尾	散布地	○	○		○	○	○	県埋文報告書 64, 近世
44	榎崎B	鹿屋市郷之原町榎崎	散布地	○	○		○	○		県埋セ報告書 4
45	榎崎A	鹿屋市郷之原町榎崎	散布地	○	○	○	○	○		県埋文報告書 63
46	飯盛ヶ岡	鹿屋市上野町飯盛ヶ岡	散布地		○	○	○	○		県埋セ報告書 3
47	高橋	鹿屋市上野町	散布地			○	○			
48	小野原B	鹿屋市小野原町	散布地				○	○	○	近世
49	小野原A	鹿屋市小野原町	集落跡		○	○	○	○	○	近世
50	荒平城跡	鹿屋市天神町	城館跡						○	
51	丸岡	鹿屋市小野原町	散布地				○	○		
52	天神	鹿屋市天神町	散布地							
53	松尾	鹿屋市小野原町	散布地		○	○	○			
54	山之頭迫	鹿屋市小野原町	散布地		○	○	○			
55	大橋田平	鹿屋市小野原町	散布地				○			
56	大畑平	鹿屋市野里町	散布地		○	○	○			
57	野里城跡	鹿屋市野里町	城館跡						○	
58	大津	鹿屋市野里町	散布地			○	○			

注 県埋文報告書（鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書）
 県埋セ報告書（鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書）
 埋調セ報告書（公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター）

第Ⅲ章 調査の方法と層序

第1節 調査の方法

1 発掘調査の方法

平成29年1月に県文化財課が実施した試掘調査と平成30年6月に埋文センターが実施した確認調査の結果を受け、本調査を平成30年11月1日～平成31年3月8日と、令和元年10月28日～令和2年1月29日の2か年にわたって実施した。

本遺跡の調査は、道路センターライン上の「NO.82」と「NO.83」を結んだ直線を南北軸とし、これに直交する軸を東西軸とした。この軸を基準にして調査範囲を覆う10m間隔の方形グリッドを設定した。北から南へ1, 2, 3…、西から東へA, B, C…と調査区割りを設定した。

平成30年度の調査は、まず調査区外へ排土を持ち出す搬出路を設置するため、B・C-1～4区の約500㎡（表面積）を対象に行った。終了後に残りの1,650㎡（表面積）の調査を実施した。また、縄文時代早期までは面調査を、旧石器時代はトレンチ調査と一部面調査を行った。

調査方法は、はじめに重機（バックホウ）によって表土を除去した後、人力による掘り下げを行った。遺物包含層のうち古代～古墳時代に該当するⅡ層は、削平を受けている部分が多く残存状況がよくなかった。3区に東から西へ傾斜する浅い谷が形成されており、その谷に流れ込むような形でⅢ層の縄文時代晩期～古墳時代の遺物が多く見つかった。縄文時代に該当するⅤ・Ⅵ層は良好に堆積していたが、部分的な遺構検出と少量の遺物出土であった。旧石器に該当するⅦ・Ⅷ層も残存していたが、遺構・遺物ともに確認はできなかった。

遺物は、小破片や攪乱部分にからむものは先に設定した調査区ごとに一括して取上げを行い、その他の遺物は、遺物出土状況の写真撮影を行った後、光波測距儀による遺物取上げを行った。

遺構は、検出状況の写真撮影を行った後、平面プランの実測、半掘、出土遺物の写真撮影、実測、遺物取上げ、半掘状況写真撮影、断面実測、埋土の記録、完掘、完掘状況写真撮影、完掘状況実測を行った。

平成30年度の調査終了部分については、埋め戻しや立入禁止柵などの安全対策を施した。また、排土置き場の崩落防止などの安全対策も実施した。

令和元年度の調査も、縄文時代までは面調査を実施した。まず、D～G-5・6区及びG-7区（下段）の約700㎡（表面積）を先に実施した。次に、H-5区及びH・I-6～9区（上段）の約500㎡（表面積）の調

査を実施した。最後に、下段と上段に旧石器時代の先行トレンチを設定して調査を行った。

調査方法は、前年度と同様である。なお、人力掘削と並行して、樹木・樹痕の伐採・抜根作業も行った。遺物包含層のうち古代～古墳時代に該当するⅡ層は、削平を多く受けていて残存状況がよくなかった。縄文時代晩期～古墳時代に該当するⅢ層では、平地の部分に古墳時代の遺物が多く出土した。縄文時代に該当するⅤ・Ⅵ層は良好に堆積していたが、遺構が数基と遺物は土器と石器が少量出土したのみであった。旧石器時代に該当するⅦ・Ⅷ層も残存していたが、遺構はなく遺物も数点のみであった。遺構や遺物については、前年度と同様に扱った。

令和元年度の調査終了部分には、大隅河川国道事務所と事前に協議の上、大型土嚢での壁面崩落防止・埋め戻しや柵による転落防止などの安全対策、沈砂池による流末対策を行った。

2 整理・報告書作成方法及び内容

はじめに、発掘調査成果品の整理を行った。図面整理は遺構実測図・遺物出土分布図・土層断面図・地形図等に仕分けし、台帳や遺物との照合を行った。

遺物の水洗いは、遺物に付着している重要な情報を除去することがないように留意して実施した。

注記は遺物の水洗いを終了後、順次行った。注記を行う際は、薬品を使用するため換気に留意しながら手作業で進めた。

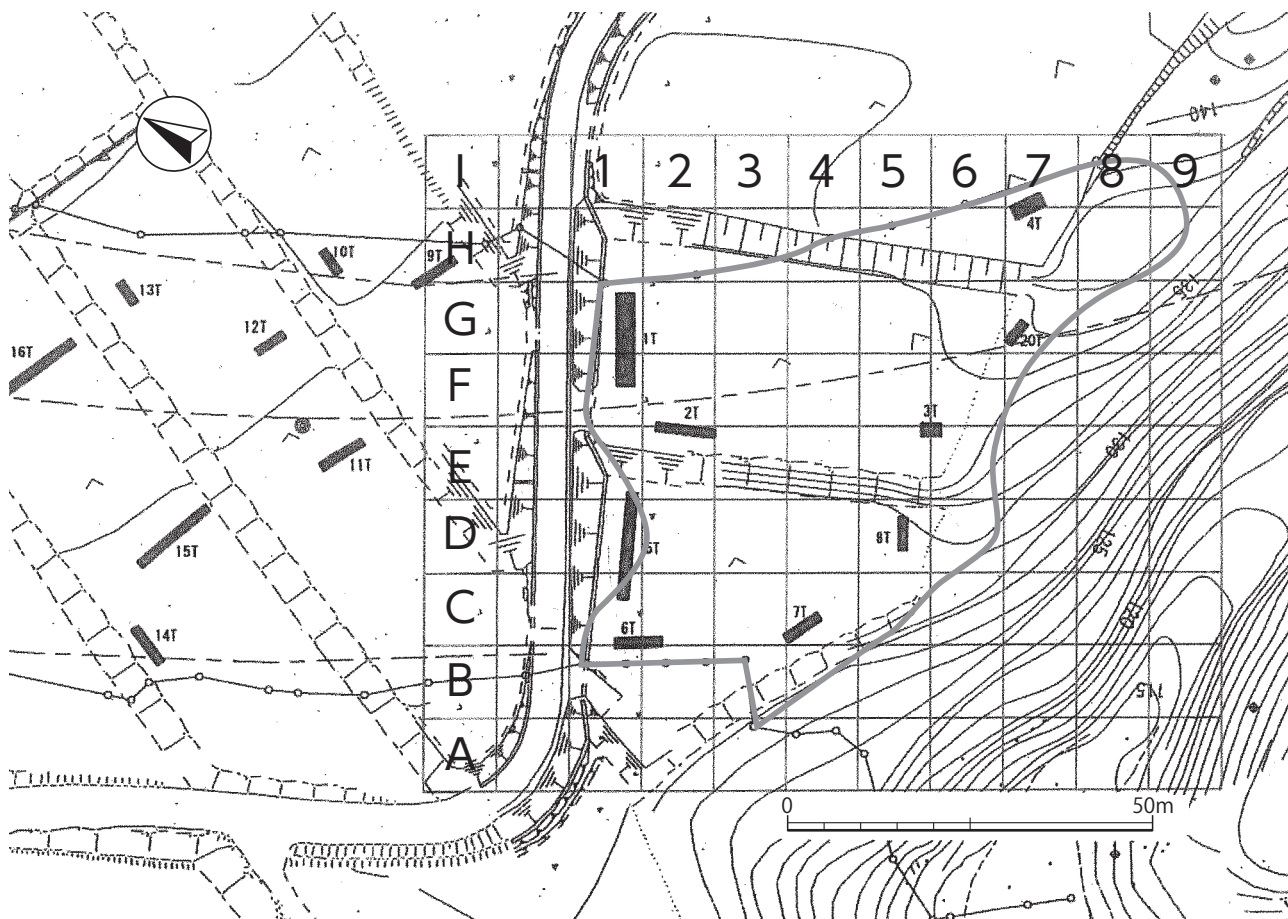
これまで刊行された遺跡の記号と重複しないようにデータを管理している埋文センター南の縄文調査室に確認し、石鉢谷A遺跡を表す記号を「石ハチA」とした。

遺構の認定・分類は基本的に発掘調査時に行っているが、整理・報告書作成作業時に再度実測図や写真等を用いて担当職員が検討を行い、確定させた。

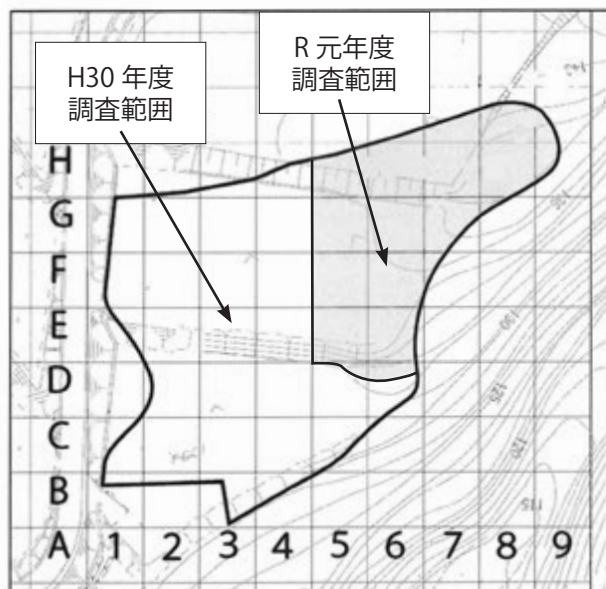
光波測距儀で記録した遺物分布状況等の情報は、パソコンに取り込みデータ化し、図化ソフトを使用して報告書掲載用の図面を作成した。

遺物の分類・接合は遺構内出土遺物と包含層出土遺物に分けた後、接合を行った。分類については、土器の形状・文様・胎土等を総合的に判断しながら行った。石器については、剥片石器と礫石器に分けた後、器種毎に分類した。その後、土器・石器ともに報告書掲載遺物を選別し、実測・拓本・トレース・レイアウトを行った。

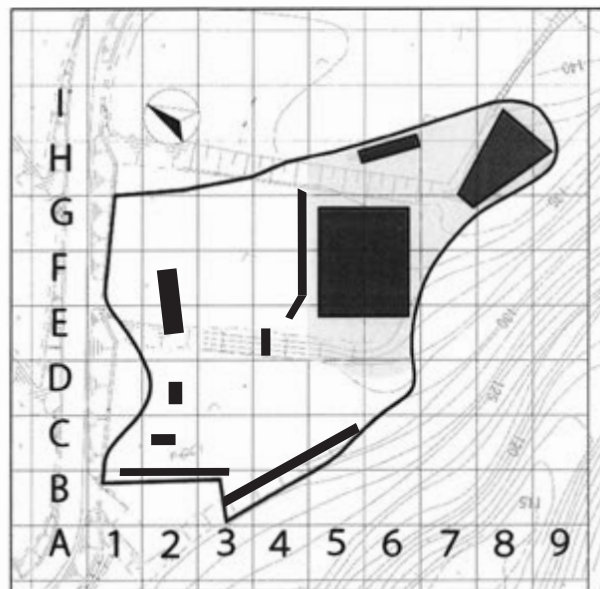
遺物観察表作成・遺物写真撮影とともに文章を執筆し、印刷・製本を経て刊行した。



第2図 トレンチ・グリッド配置図



第3図 調査範囲図



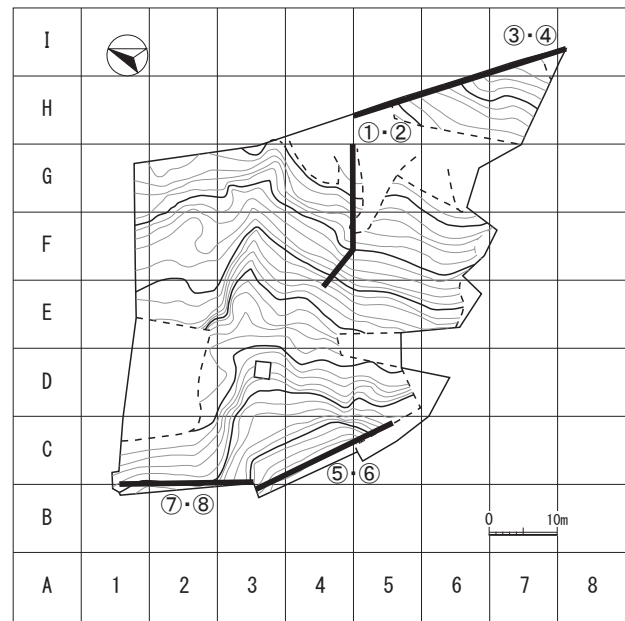
第4図 旧石器時代調査範囲図

第2節 層序

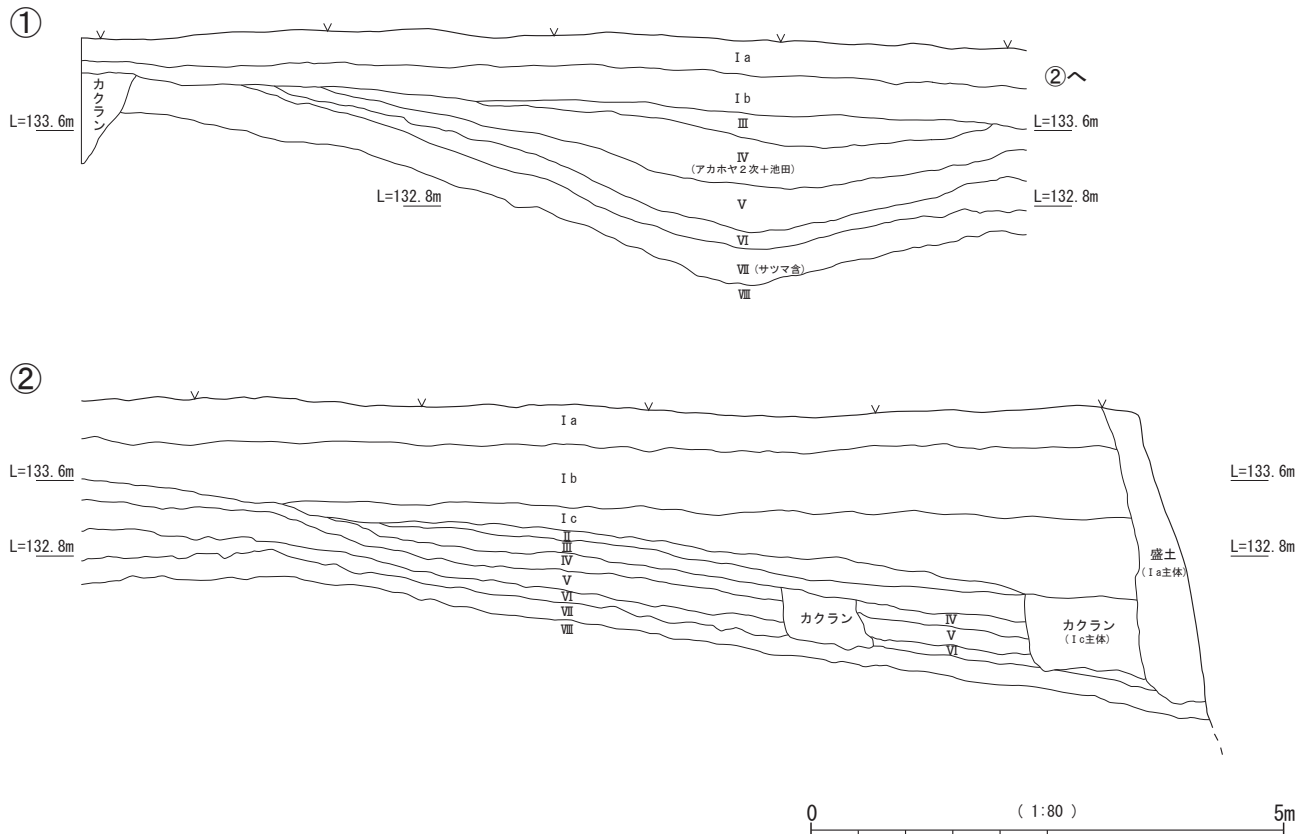
石鉢谷A遺跡の基本土層・遺物包含層は、第5図に示したとおりである。発掘調査区全域が急傾斜地にあたるため、地層の堆積状況も一様でなかったが、基本的な層序は以下のとおりである。

- I層 表土（耕作土）である。
- II層 黒色土。削平のため限られた一部しか残存しない。古墳時代・古代の遺物包含層である。
- III層 暗茶褐色土。柔らかく粘性はない。古墳時代・縄文時代晩期の遺物包含層である。下部に池田降下軽石が点在する。
- IV層 黄茶褐色土。約7,300年前のアカホヤ火山灰に比定される。
- V層 乳白色土。縄文時代早期の遺物包含層である。
- VI層 黒褐色土。下部に薩摩火山灰が点在する。縄文時代早期の遺物包含層である。
- VII層 暗茶褐色粘質土。旧石器時代の遺物包含層である。
- VIII層 黄褐色粘質土。旧石器時代の遺物包含層である。
- IX層 黄褐色土。ヌレシラス。
- X層 黄褐色軽石混土。礫層・粘土層・砂礫層で構成され、大隅降下軽石に比定される。

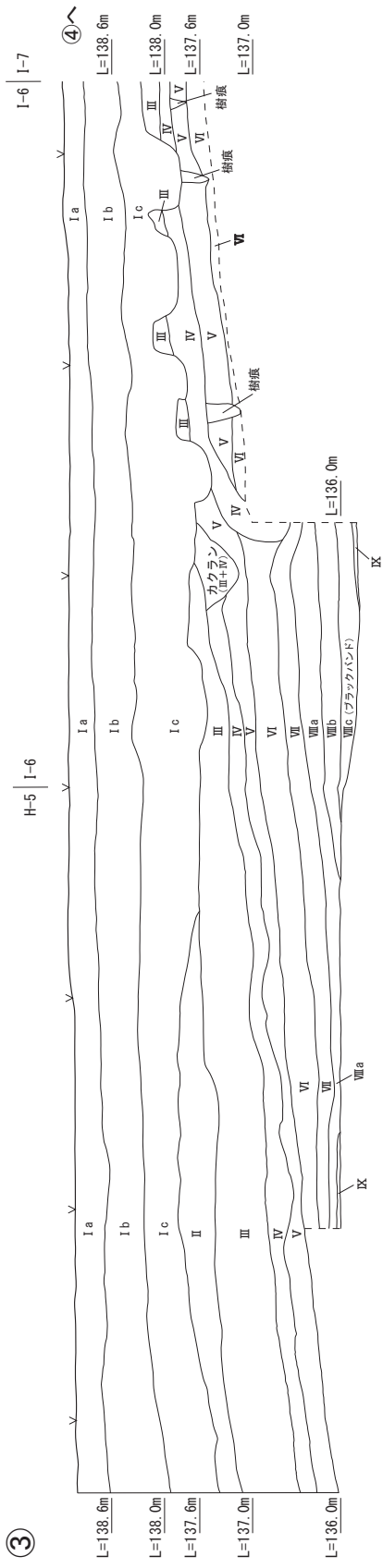
なお、層序の模式図は第7図に、調査区内の土層断面図については、第6・8・9図に示した。



第5図 土層断面位置図

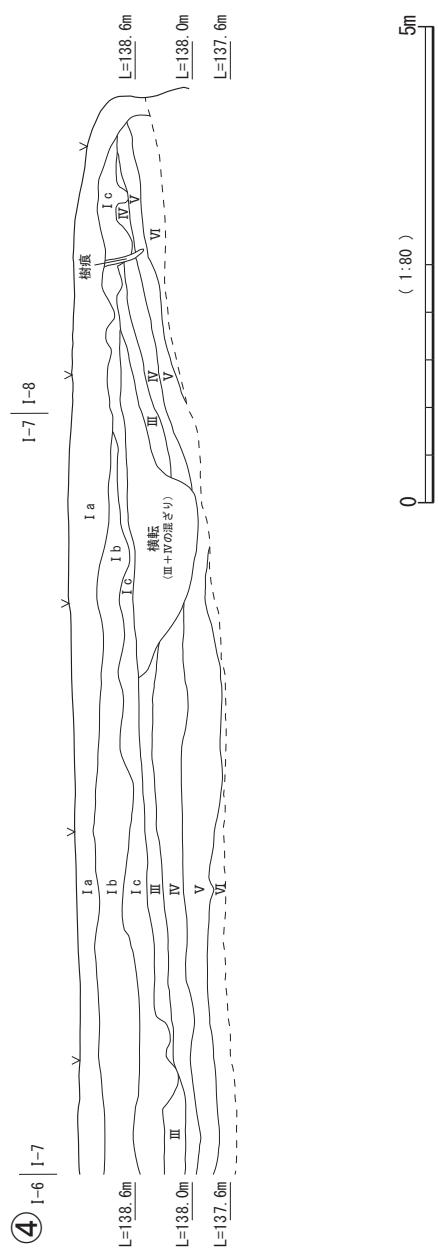


第6図 土層断面図(1)

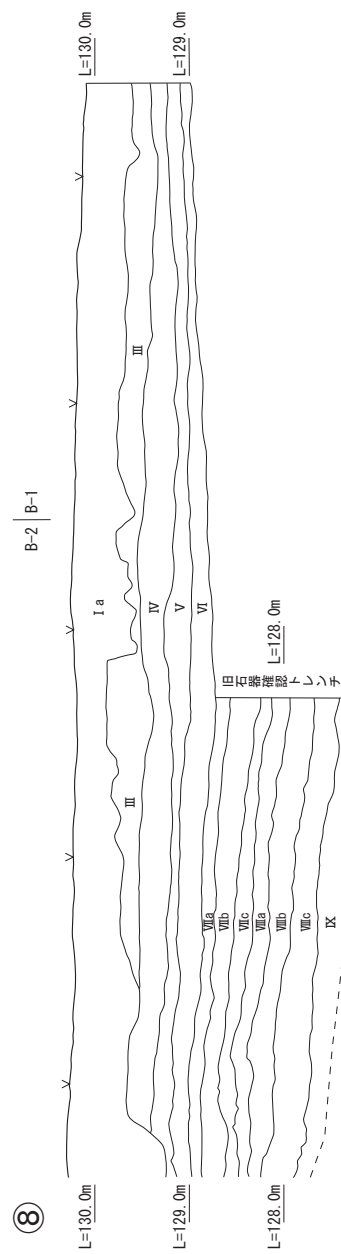
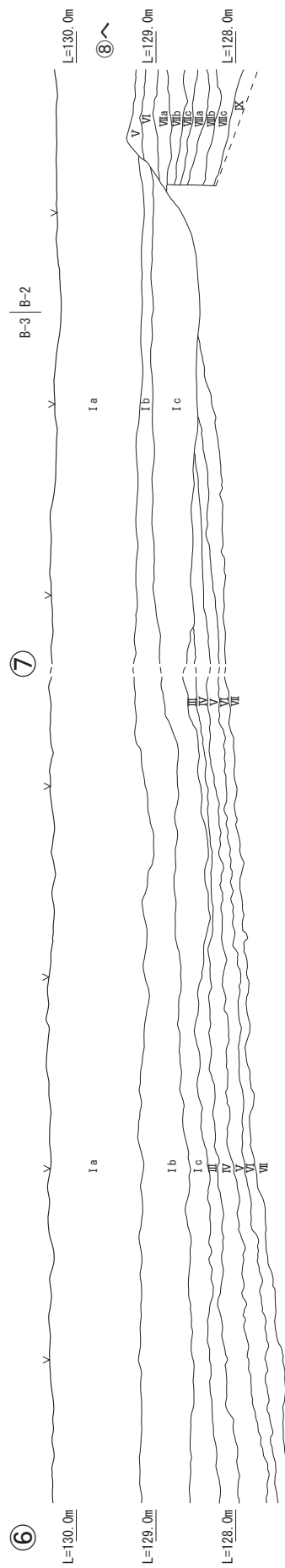
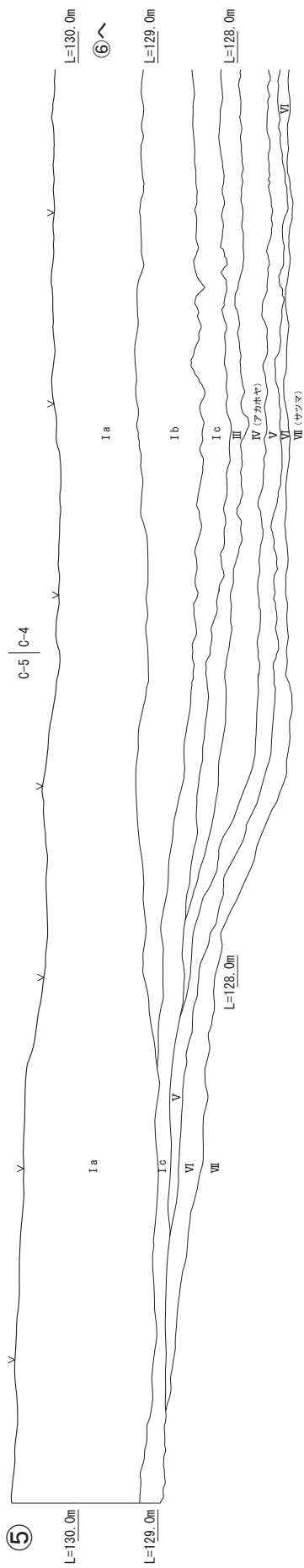


I	I 層 表土 (耕作土)
II	II 層 黒色土 (古墳時代・古代遺物包含層)
III	III 層 暗茶褐色土 (古墳時代・縄文晩期遺物包含層)
IV	IV 層 黄茶褐色土 (アカホヤや火山灰)
V	V 層 乳白色土 (縄文時代早期遺物包含層)
VI	VI 層 黒褐色土 (縄文時代早期遺物包含層)
VII	VII 層 暗茶褐色粘質土 (旧石器時代遺物包含層)
VIII	VIII 層 黄褐色粘質土 (旧石器時代遺物包含層)
IX	IX 層 黄褐色土 (スレシラス)
X	X 層 黄褐色軽石混土 (大降降下軽石層)

第7図 基本層序



第8図 土層断面図(2)



第9章 土层断面图(3)



第Ⅳ章 調査の成果

第1節 調査の概要

本遺跡は、ほぼ西側への傾斜面で、標高約 130 ～ 140 m に立地する。傾斜地であることから地層の堆積状況は部分的に不安定ではあるが、Ⅱ層・Ⅲ層・Ⅴ層・Ⅵ層・Ⅶ層・Ⅷ層から遺物が出土した。土器は細片が多く、大半は型式や器種等の判断が困難であった。

Ⅱ層は、古墳時代・古代の遺物包含層である。一部残存しているのみで、遺構は確認されなかった。古代の遺物は土師器・須恵器等である。

Ⅲ層は、古墳時代・縄文時代晩期の遺物包含層である。古墳時代および縄文時代晩期の遺構は確認されなかった。古墳時代の出土遺物は、成川式土器で、全時代を通じて最も多く出土している。縄文時代晩期の出土土器は、織物の組織痕土器と、型式は不明であるが粗製と精製の土器がある。石器は磨石・石皿等が確認された。

Ⅴ・Ⅵ層は、縄文時代早期の包含層である。遺構は集石 4 基が検出された。土器は塞ノ神 A a 式土器・塞ノ神 A b 式土器・貝殻条痕のある土器が出土した。石器は石匙・石核・石斧・磨石・石皿等が確認された。

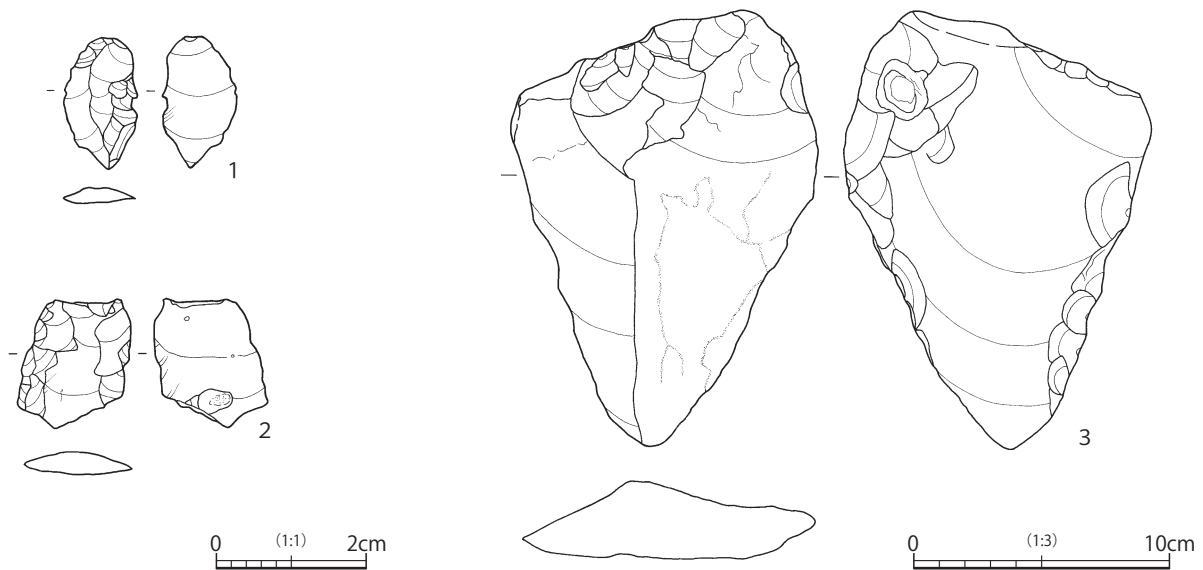
Ⅶ層・Ⅷ層は、旧石器時代の遺物包含層である。遺構は確認されなかった。遺物は 4 点と僅かで、黒曜石と凝灰岩の剥片である。

なお、グリッド配置図及び周辺地形図は第 2 図に、年度別の調査範囲図は第 3 図に示した。

以下、時代毎に調査の成果を記述する。

第2節 旧石器時代の調査

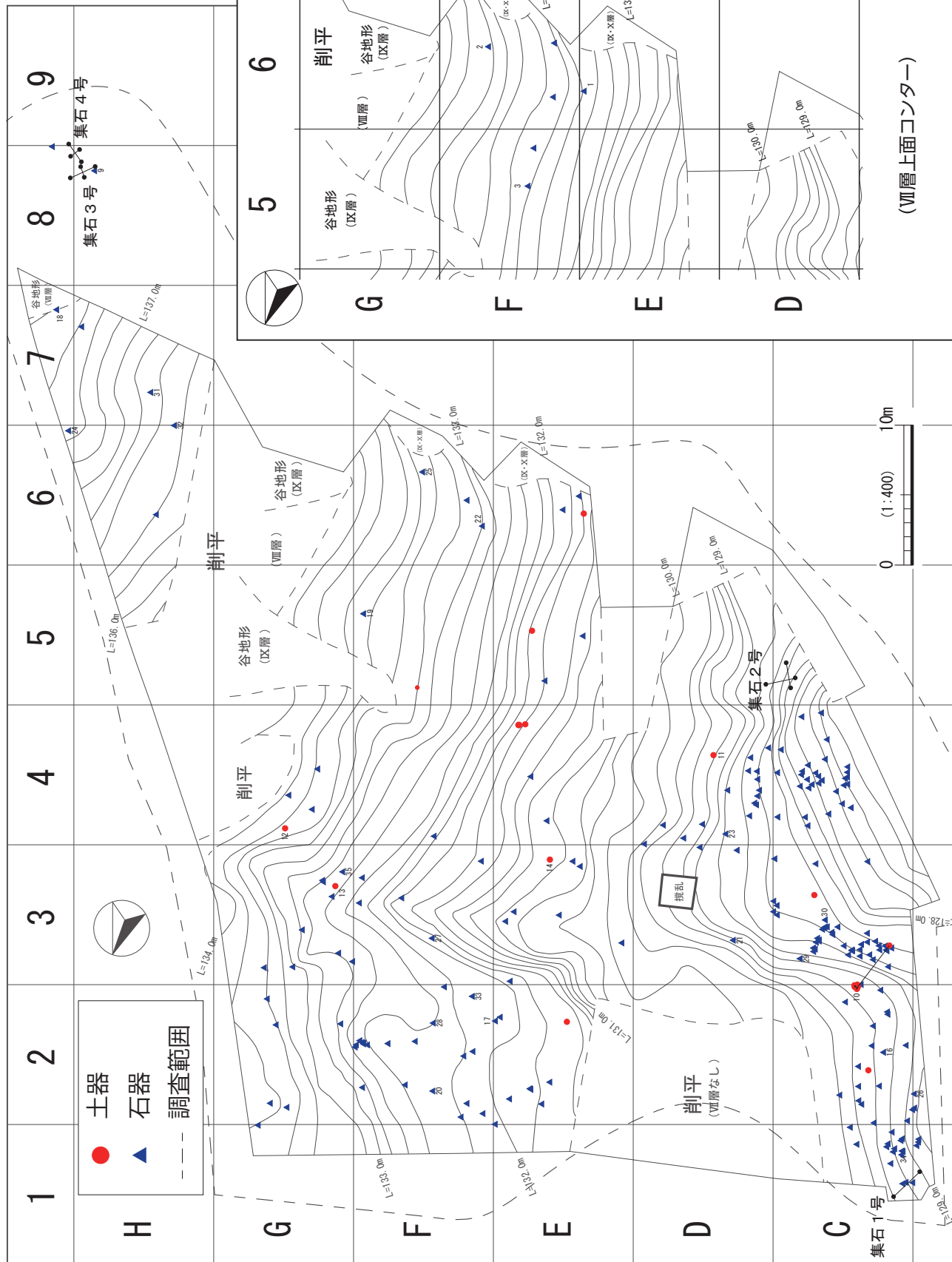
旧石器時代の包含層であるⅦ層・Ⅷ層から出土した遺物は 4 点で、うち石器 3 点を図化した。黒曜石の剥片は、1 が腰岳産、2 が三船産と見られる。いずれも石器制作中に生じたものである。出土量が僅かなため詳細は不明である。3 は、凝灰岩の剥片石器である。平面が三角形に近いやや薄手の剥片を縁に沿って打ち欠いている。一部が摩耗しているが、用途は不明である。その他、図化していないが、上牛鼻産と思われる黒曜石のチップが出土している。



第 10 図 旧石器時代の遺物

第 2 表 旧石器時代石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	出土区	層	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
10	1	E-6	Ⅶ	剥片	黒曜石	1.7	1	0.2	0.3	腰岳産
	2	F-6	Ⅶ	剥片	黒曜石	1.7	1.5	0.3	0.8	三船産
	3	F-5	Ⅶ	剥片石器	凝灰岩	17.1	12.1	3.1	500	



第12図 縄文時代早期遺構配置図及び遺物出土状況図

第11図 旧石器時代の遺物出土状況図及び地形図

第3節 縄文時代早期の調査

縄文時代早期の包含層であるV・VI層から検出した遺構は、集石が4基である。また、出土した遺物は土器11点と石器66点である。その中から、土器5点と石器20点、及び表採品の土器1点の計26点を図化した。

1 遺構

(1) 集石(第13～17図)

4基の集石がV層で検出された。全ての集石で被熱の痕跡が確認されている。構成礫等の状況については本文中に記載している。

なお、集石実測図中の断面図に示してあるラインはすべて検出面である。以下、それぞれの特徴を記述する。

集石1号(第13・14図)

B・C-1区,V層で検出した。集石の本体部分が高く、地形は西側へ傾斜している。西側の礫は、掻き出した礫とも考えられるが、礫の大きさを考えると、掘り込みを持たない別個体の集石の可能性もある。安山岩85個と凝灰岩1個で構成され、全体に大ぶりの礫が多く、重さ1000gを超えるものが25個あり、最大のもは3040gもある。一個あたりの重量は、819.42gである。多くの礫が赤化及びヒビが見られ、被熱していると考えられるが、破碎して散らばっているという状況ではなく、原型を保った状態の礫が主である。なお、この中から3点を遺物と確認した。また、微細な炭化物も確認された。中央付近に浅い掘り込み部を持ち、礫をはめ込むための最小限の掘りで止めている印象を受けた。時期は、周辺の同一層から、塞ノ神A a式土器が出土していることと、他の型式の土器は確認できなかったことから、縄文時代早期後葉と考えられる。

4は、安山岩を素材とする石皿で、重さは2200gである。風化が進んではいるが、両面に磨面、一辺に敲打痕が観察できる。

5は、安山岩を素材とする石皿で、重さは2600gである。これも風化が進んではいるが、両面に磨面が観察できる。また、明確な丸い凹みがあり、台石としても使われた可能性がある。

6は、安山岩を素材とする有溝砥石で、重さは3000gである。表面に磨面があり、作業面である溝が2か所観察できる。

集石2号(第15図)

C-5区,V層で検出した。V層上面のアカホヤ層の下位より5～10cm上付近で検出した。全体の地形は北西側に傾斜しており、平坦面と傾斜の始まる付近に構築されている。礫の大きさや石材は集石1号に類似しており、多くの礫が赤化及びヒビが見られ、被熱している。安山岩30個と凝灰岩1個で構成される。全体

に大ぶりの礫が多く、重さ1000gを超えるものが9個あり、最大のもは4590gもある。一個あたりの重量は、907.03gであり、この中では、2点を遺物と確認した。掘り込みはないが、検出面でシミ状の広がりを確認した。周囲と比べ、ややくすんでおり、炭化物の粒を僅かに含む。集石1号付近で塞ノ神A a式土器が出土したことから、時期は縄文時代早期後葉と考えられる。

7は、安山岩を素材とする石皿で、重さは4500gである。両面に磨面が観察できる。被熱し、ひび割れが生じており、表面に墨が流れ落ちたような炭化物が付着しているのが確認でき、一部コゲが残る。検出面で確認されたシミ状の広がりの中にあるため、加熱調理された食材から流れ出たものである可能性がある。

8は、安山岩を素材とする石皿で、重さは2200gである。断面は三角形で、これも風化が進んではいるが、両面に磨面が観察される。

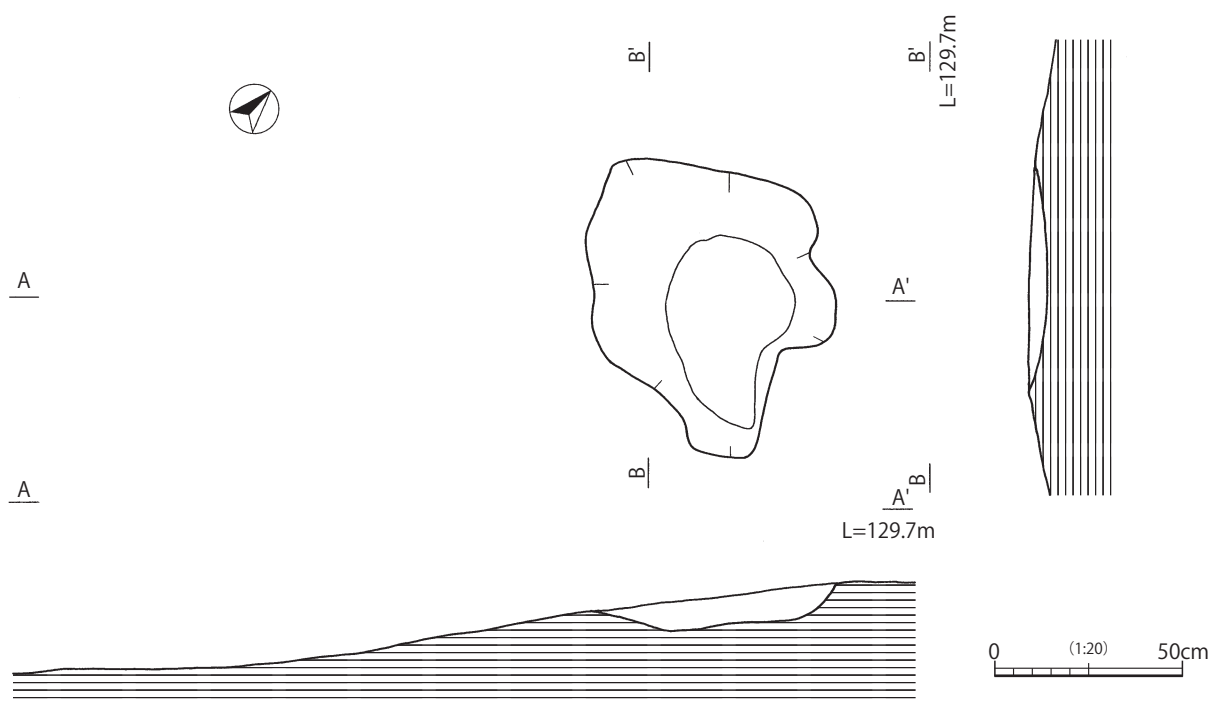
集石3号(第16図)

H-8区,V層で検出した。検出地点は平坦面部分で、傾斜に沿っており、集石4号と隣接する。礫の数は4基中最も多いが、掘り込みは確認できなかった。礫の分布は、北東から南西にかけて傾斜している。安山岩128個と砂岩4個で構成されている。明確に被熱している礫は約1割である。集石1・2号よりも小ぶりの礫が多く、重さ1000gを超えるものは5個にすぎない。ただし、最大のもは4590gもある。一個あたりの重量は、273.26gであり、集石1・2号の3割以下である。この中では1点を遺物と確認した。時期は、集石1・2号と同一層であることから、縄文時代早期後葉と思われるが、若干の時期差があると思われる。

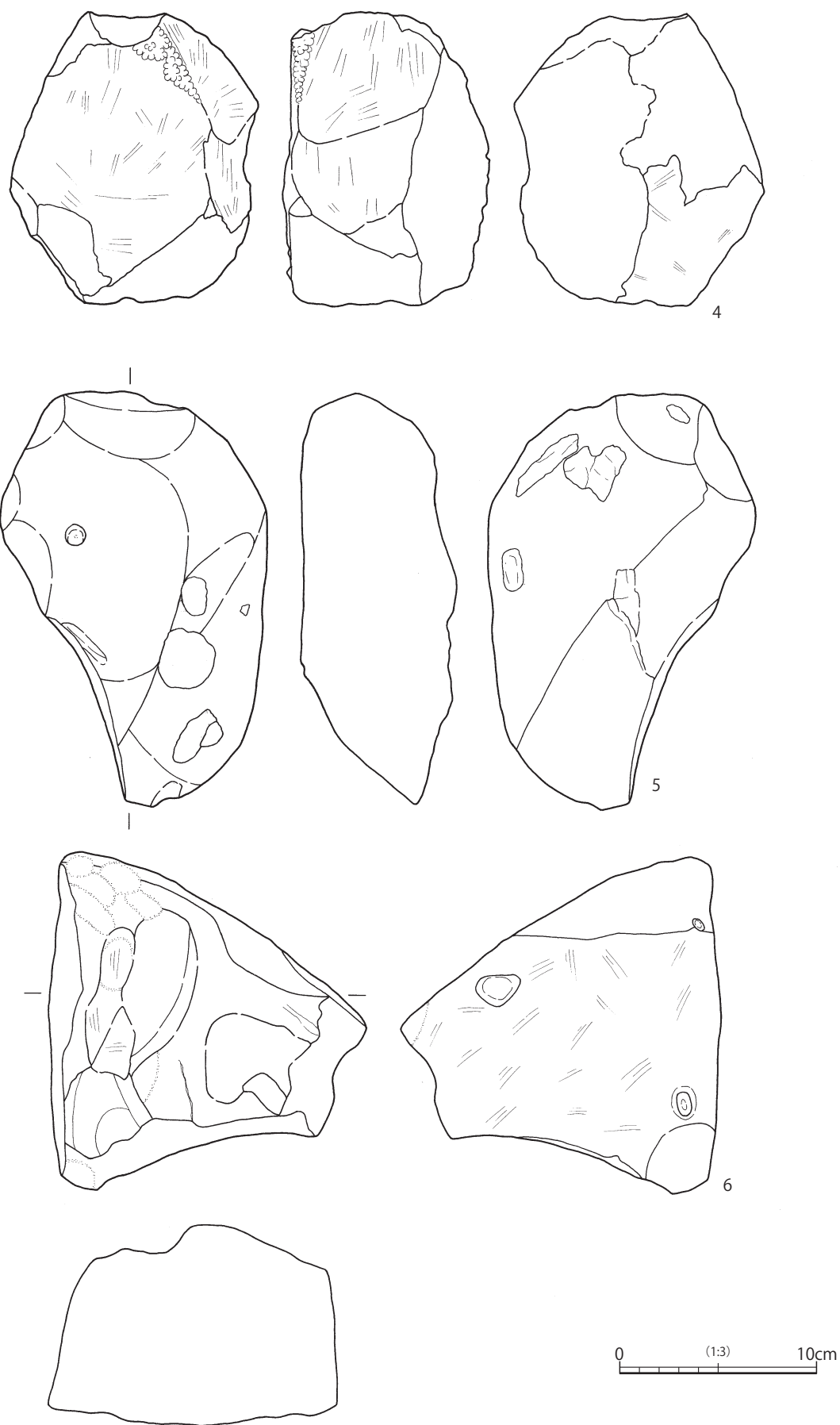
9は、安山岩を素材とする石皿で、重さは4250gである。これも風化が進んではいるが、表面のほぼ全面にわたって磨面が観察できる。表面の右辺部にわずかな敲打痕が確認できる。表面中央付近に明確な丸い凹みがあり、通常石皿としての使用以外に台石的な使用をしていた可能性が考えられる。

集石4号(第17図)

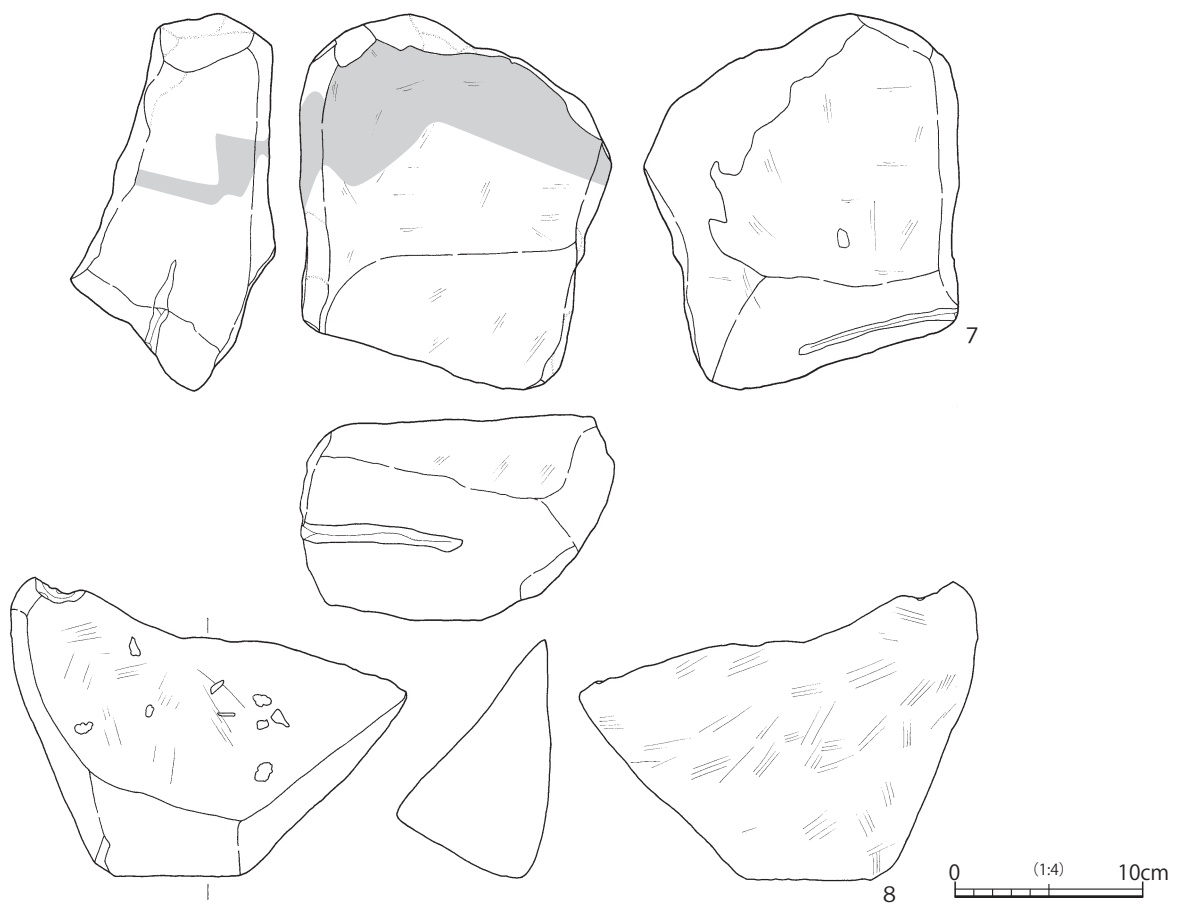
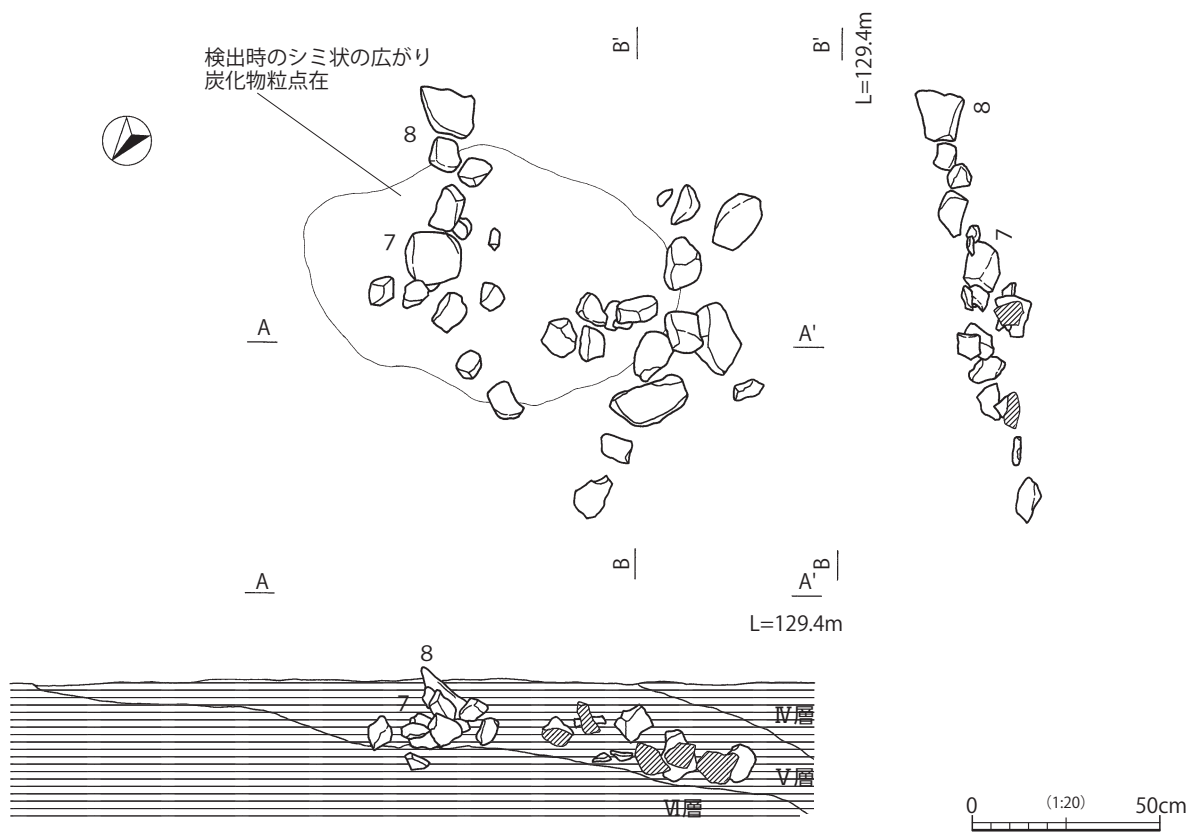
H-8区,V層で検出した。検出地点は平坦面部分で、傾斜に沿っており、集石3号の東側に隣接するため、3号集石から掻き出されたものである可能性がある。安山岩22個と砂岩6個で構成され、およそ3対1の割合である。明確に被熱している礫は3個にすぎないが、被熱・破碎が激しい礫がある。集石3号と同様に小ぶりの礫が多く、重さ1000gを超えるものは、2340gのもの1個しかない。一個あたりの重量は222.5gで、集石3号と同様、1・2号集石の3割以下である。時期は、集石3号と同様、縄文時代早期後葉と考えられる。



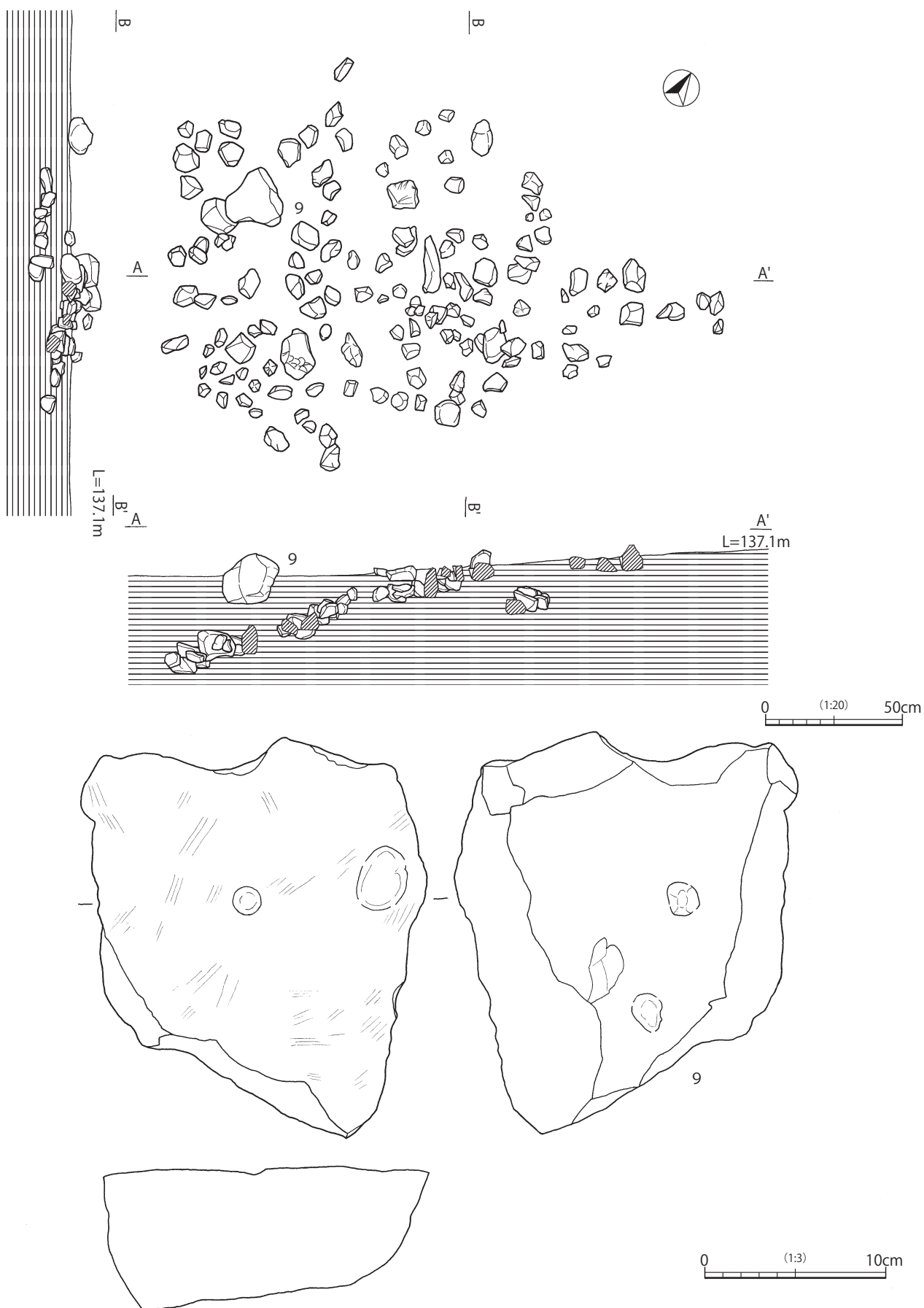
第 13 図 集石 1 号



第 14 図 集石 1 号出土遺物



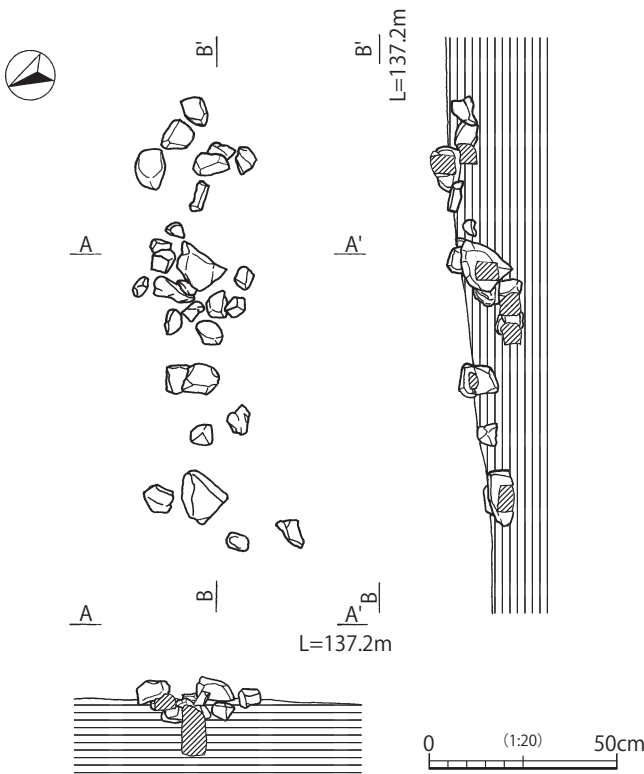
第 15 図 集石 2 号及び 2 号出土遺物



第 16 図 集石 3 号及び 3 号出土遺物

第3表 縄文時代早期遺構内石器観察表

挿図番号	掲載番号	出土遺構	出土区	層	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
14	4	集石1号	B-1	V	石皿	安山岩	14.9	12.6	10.5	2200	
	5	集石1号	C-1	V	石皿	安山岩	21.1	13.5	7.8	2600	丸い凹み
	6	集石1号	B-1	V	有溝砥石	安山岩	17.1	16.2	10.2	3000	作業面の溝2か所
15	7	集石2号	C-5	V	石皿	安山岩	20.2	17	11.1	4500	炭化物付着
	8	集石2号	C-5	V	石皿	安山岩	16	21.4	8.3	2200	
16	9	集石3号	H-8	V	石皿	安山岩	22.3	19.1	0.8	4250	丸い凹み, 敲打痕



第17図 集石4号

2 遺物

V層及びVI層は、縄文時代早期の遺物包含層である。ここでは包含層出土の遺物を取り扱う。遺物の出土状況については、第12図に示した。

(1) 土器

縄文時代早期の土器は11点が出土し、6点を図化した。ほとんどが小片であり、器種等の判断は難しいが、それぞれの特徴を記述する。

10は、深鉢である。口縁部は確認できなかった。やや丸みをもって立ち上がる形状の胴部に、網目捺糸文を間隔をおいて縦位に施した後、沈線を横位に3段施している。底部は、中央にかけてやや上げ底となる。塞ノ神A a式土器に該当するとみられる。11は、深鉢の胴部である。縄文で回転押し施文した後、沈線による区画を施し、その枠外を消している。塞ノ神A b式土器に該当するとみられる。12は、深鉢の口縁部である。表面はナデおよび一部に貝殻条痕があるが風化が著しい。

第4表 縄文時代早期集石一覧表

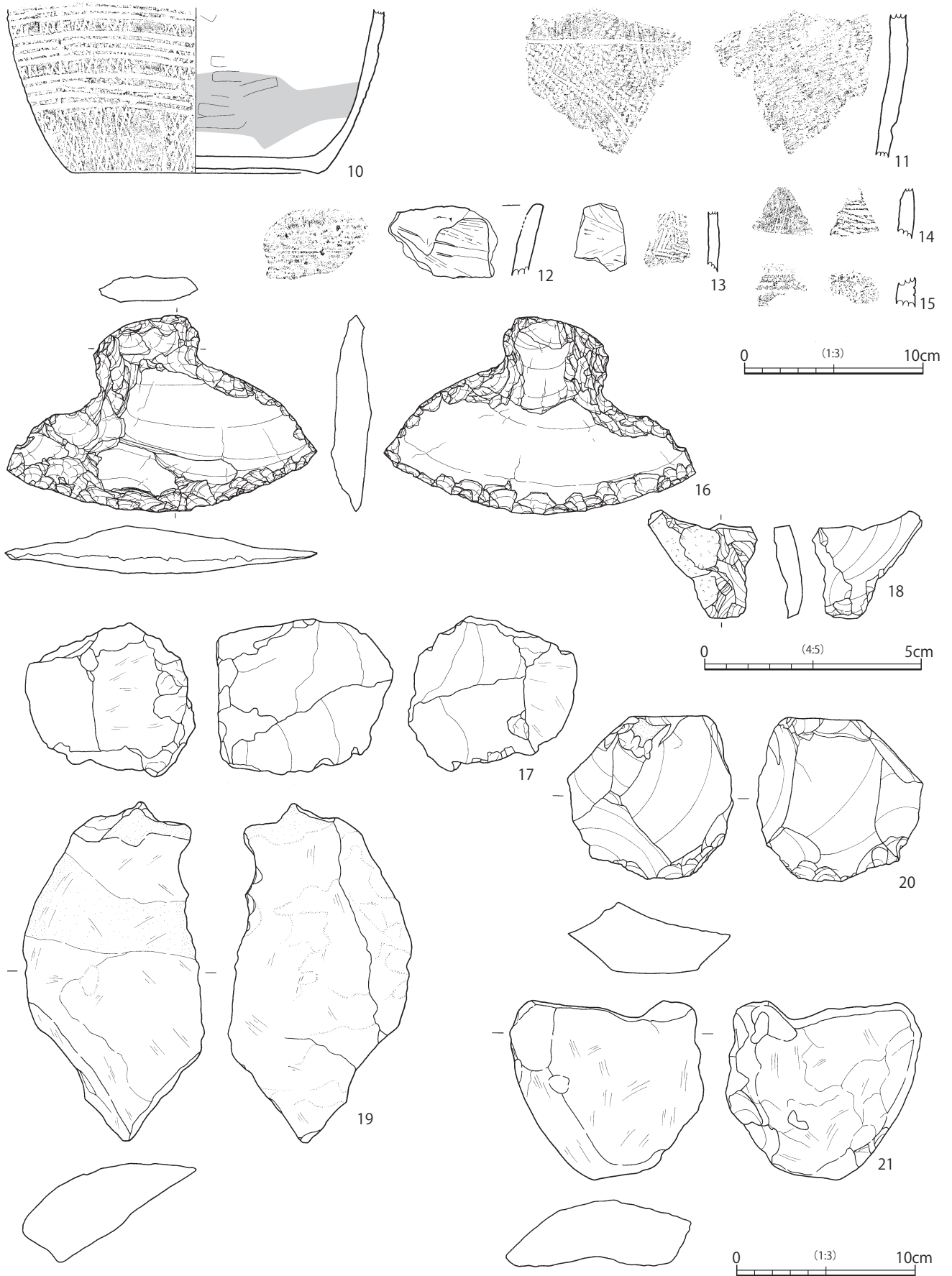
挿図番号	遺構名	検出区	検出層	長軸 (m)	短軸 (m)	掘込	構成礫の内容数 (個)					一個あたりの重量 (g)	備考 遺構内遺物
							総数	安山岩	砂岩	花崗岩	凝灰岩		
13	集石1号	B・C-1	V	2.1	1.6	有	86	85	0	0	1	819.42	石皿、有溝砥石
15	集石2号	C-5	V	1.18	1.06	無	31	30	0	0	1	907.03	石皿
16	集石3号	H-8	V	2.1	1.53	無	132	128	4	0	0	273.26	石皿
17	集石4号	H-8	V	1.22	0.46	無	28	22	6	0	0	222.5	

13・14は、貝殻条痕が施されるが、器種は不明である。15は、厚みの薄い帯に細い沈線を施している。小片のため詳細は不明である。表採品であるが、本遺跡では他に類例がないため、ここに掲載した。

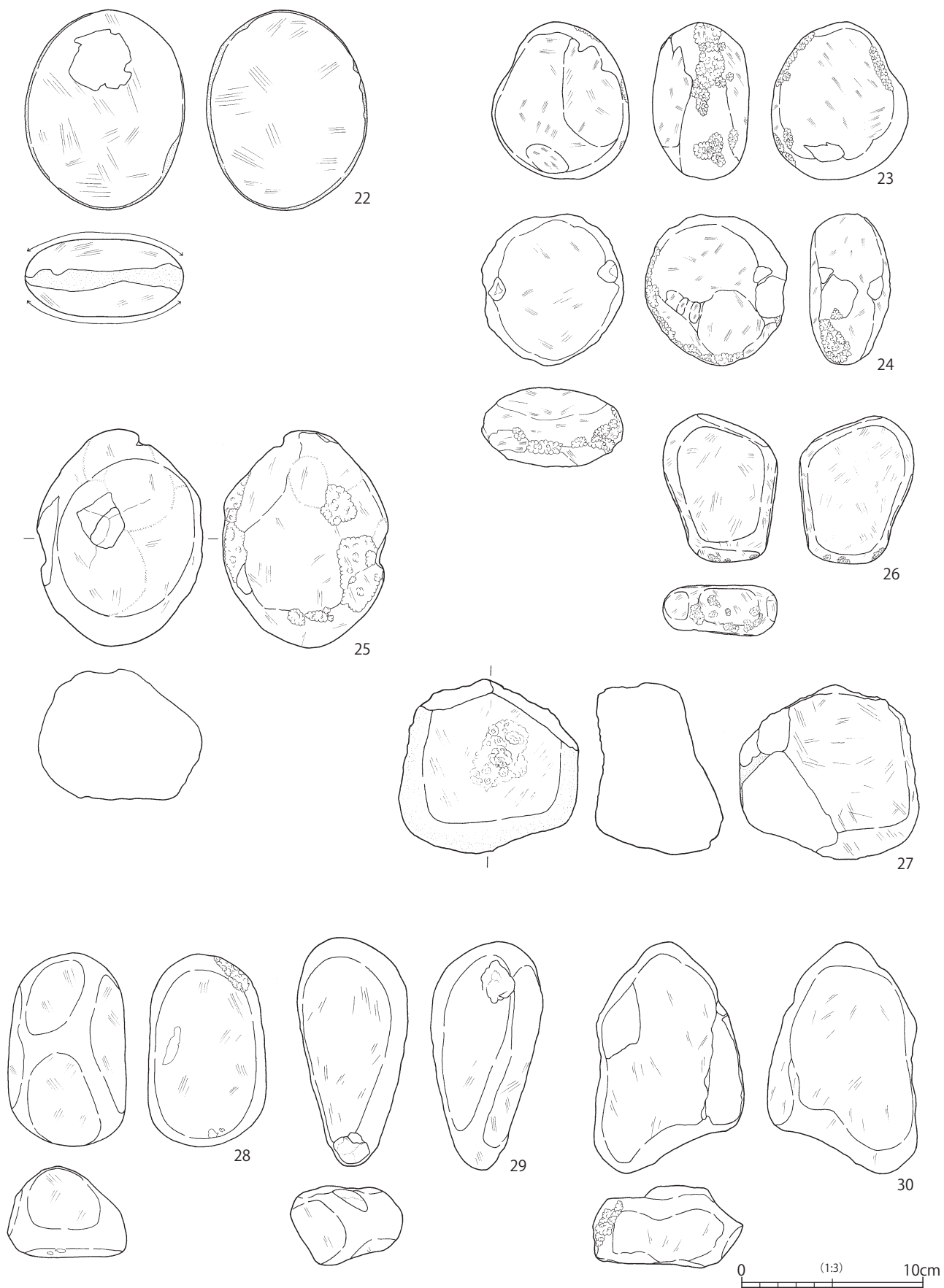
(2) 石器

縄文時代早期の石器は66点が出土し20点を図化し掲載した。それぞれの特徴を記述する。

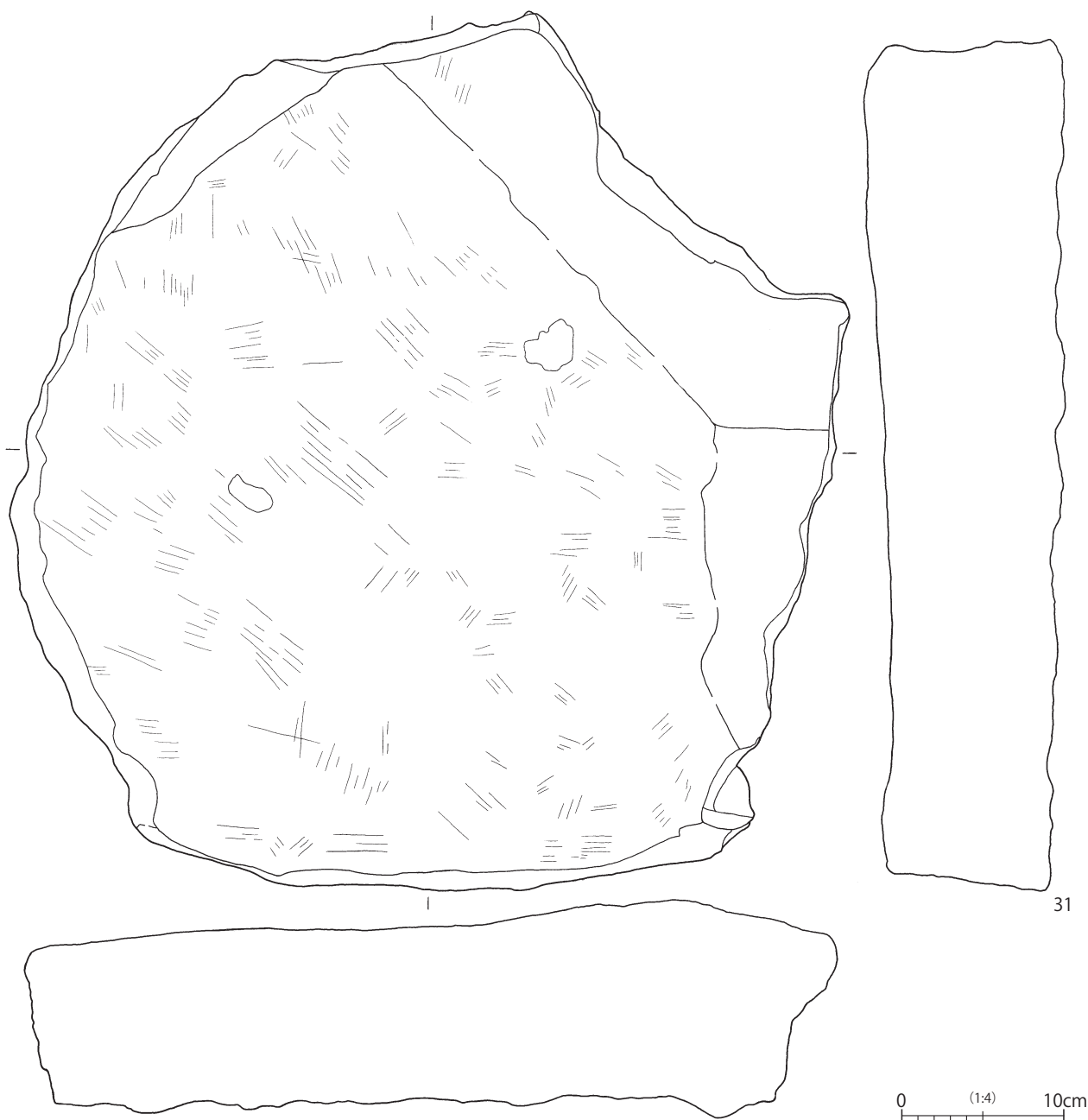
16は、頁岩を素材とする横型の石匙である。略二等辺三角形を呈する頂点部に摘み部を作出している。薄手の不定形剥片を素材としており、摘み部の頂点付近を除き、整形剥離を表裏両面から施している。17は、細粒の凝灰岩を素材とする石核である。少なくとも2面の大きな剥離痕が認められる。18は、水晶を素材とする剥片である。調整剥離はなく、石器制作の際に生じたものと思われる。19は、安山岩を素材とする剥片石器である。母岩から自然剥離したものと思われるが、両面に磨面があり、また、1片が刃部のようにっており使用時の痕跡と思われる剥離がある。20は、ホルンフェルス素材とする剥片石器である。表面に二次加工の剥離面構成をもつ。下辺に使用時の痕跡と思われる剥離が多数認められる。21は、ホルンフェルス素材とする剥片石器である。半円形に近いやや扁平な自然礫の片側に打撃による剥離が認められる。22は、砂岩を素材とする磨石である。断面楕円形の扁平な円礫を素材とする。両面に磨面をもつ。23は、花崗岩を素材とする磨石である。歪な楕円形を呈し、両面に磨面があり、一辺に敲打痕が認められる。24は、安山



第 18 図 縄文時代早期の土器・石器 (1)



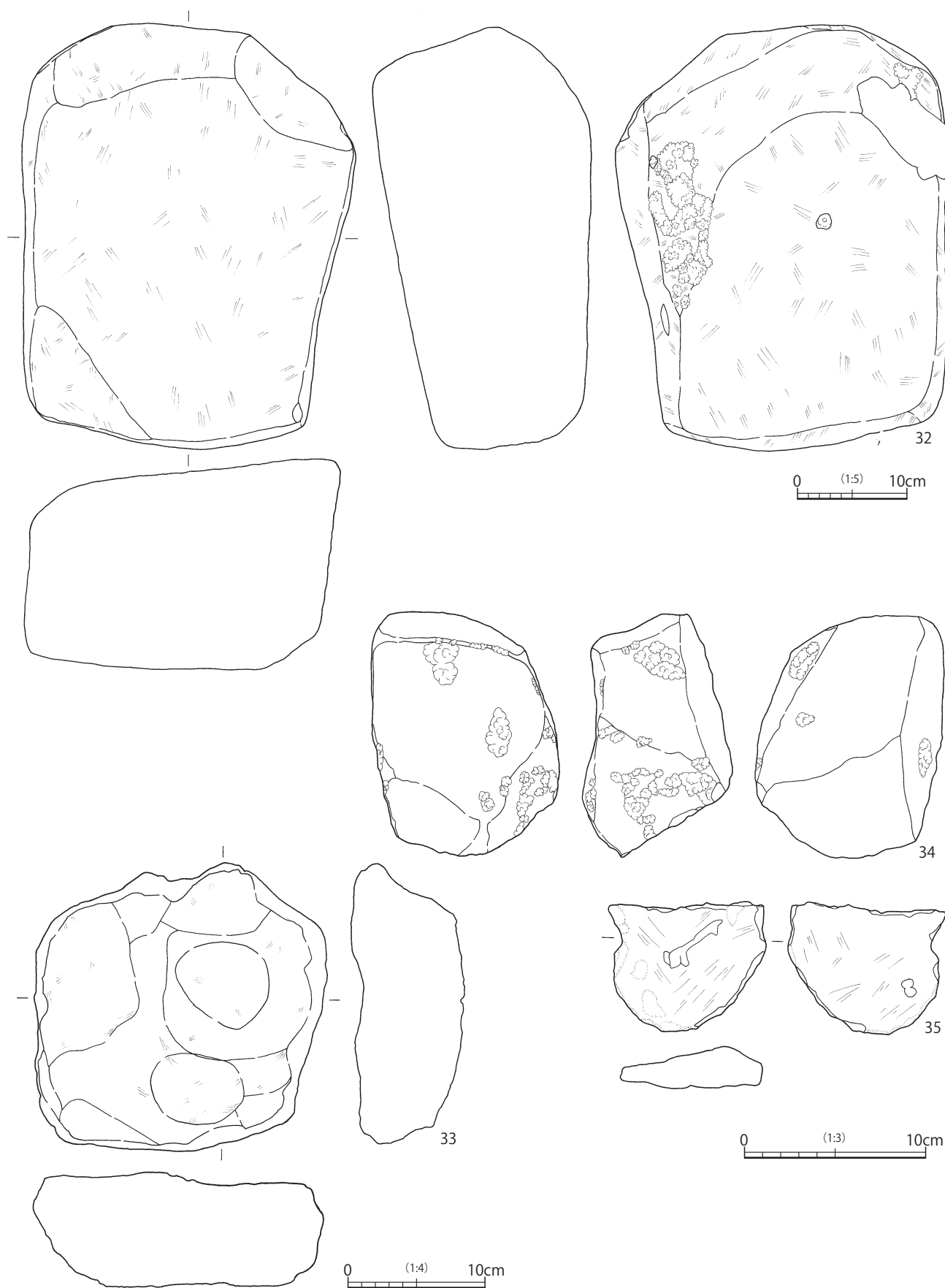
第 19 図 縄文時代早期の石器 (2)



第 20 図 縄文時代早期の石器 (3)

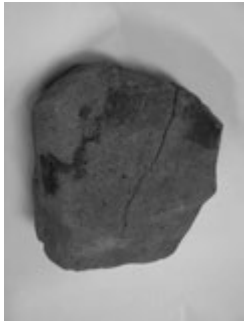
岩を素材とする磨敲石である。ほぼ楕円形を呈し両面に磨面があり、一辺に敲打痕が認められる。25 は、安山岩を素材とする磨敲石である。破損が著しいが両面に磨面があり、一部に敲打痕が認められる。26 は、砂岩を素材とする磨敲石である。両面に磨面があり、一辺に敲打痕が認められる。27 は、安山岩を素材とする磨・凹石である。歪な楕円形を呈し、表面中央部に浅いくぼみがみられる。両面に磨面が認められる。28 は、片麻岩を素材とする磨敲石である。29 は、片麻岩を素材とする敲石である。先細りの楕円形を呈する自然礫の先端が欠けており、裏面上部にも敲打痕が認められ

る。30 は、片麻岩を素材とする敲石である。やや扁平な自然礫の一端に、敲打痕が認められる。31 は、安山岩を素材とする石皿である。平面が五角形に近い板状であるが、重量は 52600g と本遺跡では最大重量である。磨面は 1 面だけで自然面も残り、あまり使い込まれていない。32 は、安山岩を素材とする石皿・台石である。重量は 38400g である。ほぼ立方体を呈するが、両面だけでなく側面にも磨面が認められる。また、裏面には敲打痕もある。33 は、多孔質安山岩を素材とする台石である。表面の所々に使用痕とみられる凹みが認められる。34 は、安山岩を素材とする台石である。各所



第 21 図 縄文時代早期の石器 (4)

に敲打痕が観察できる。また、表面の所々に赤褐色の付着物が観察できる。35は、安山岩を素材とする使用痕のある石器である。使用痕とみられる溝が観察できる。



7 炭化物付着状況



34 付着物の状況



33 上面の状況

第5表 縄文時代早期土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	器種	部位	分類	法量 (cm)			調整		文様	色調		胎土				備考
							口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面	石英	長石	角閃石	他	
18	10	C-2・3	V	深鉢	胴～底部	塞ノ神 Aa	—	13.8	—	ナデ	ケズリ, ナデ	沈線・網目燃糸文	明黄褐	明黄褐	○	○	○	白粒	内面下部側面にコゲ
	11	D-4	VI	深鉢	胴部	塞ノ神 Ab	—	—	—	ナデ	ケズリ, ナデ	沈線・縄文	明褐	褐	○	○			
	12	G-4	V	深鉢	口縁部	—	—	—	—	ケズリ, ナデ	ケズリ, ナデ	貝殻条痕	にぶい赤褐	灰褐	○	○		赤粒	
	13	G-3	V	—	胴部	—	—	—	—	ケズリ	ケズリ	貝殻条痕	橙	明黄褐	○		○	石粒	
	14	E-3	V	—	胴部	—	—	—	—	ナデ, ミガキ	ケズリ	貝殻条痕	黒褐	にぶい黄橙	○	○	○	赤粒	
	15	一括	表土	—	胴部	深浦?	—	—	—	ナデ	ナデ	沈線	明赤褐	橙	○	○		白粒	1～2mm 大の石が目立つ

第6表 縄文時代早期石器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
18	16	C-2	V	石匙	頁岩	4.6	7.2	1.1	23.1	
	17	E-2	V	石核	凝灰岩	8.6	9.3	9.7	745	
	18	I-7	V	剥片	水晶	2.5	2.6	0.75	3.1	
	19	F-5	V	剥片石器	安山岩	18.8	10.2	5.2	850	
	20	F-2	V	剥片石器	ホルンフェルス	9.5	9.2	3.9	350	
	21	D-3	V	剥片石器	ホルンフェルス	9.9	10.8	3.8	500	
19	22	F-6	VI	磨石	砂岩	10.9	8.8	4.3	600	
	23	D-4	V	磨敲石	花崗岩	8.7	7.5	5.5	400	
	24	I-6	V	磨敲石	安山岩	8.2	7.7	4.8	250	
	25	F-6	V	磨敲石	安山岩	12	9.2	7.2	900	
	26	B-2	V	磨敲石	砂岩	8.15	6.3	2.75	200	
	27	F-3	V	磨凹石	安山岩	9.6	10	7	780	
	28	F-2	V	磨敲石	片麻岩	10.6	6.6	5	450	
	29	C-3	V	敲石	片麻岩	12.5	6.3	4.35	395	
	30	C-3	V	敲石	片麻岩	12.75	8.3	4.5	550	
	31	H-8	VI	石皿	安山岩	53	50.4	13	52600	
21	32	H-6	V	石皿・台石	安山岩	39.1	30.3	20	38400	
	33	F-2	V	台石	多孔質安山岩	20.3	20.02	8.3	3400	
	34	C-1	V	台石	安山岩	13.3	10.2	8.2	1350	赤褐色の付着物
	35	G-3	V	使用痕のある石	安山岩	7.1	8.6	2.3	150	使用痕の溝

第7表 縄文時代早期石器組成表 (V・VI層出土)

番号	器種	石材									合計	
		黒曜石	玄武岩	安山岩	凝灰岩	花崗岩	砂岩	ホルンフェルス	頁岩	片麻岩		水晶
1	石匙							1			1	
2	石核				1						1	
3	剥片						2			1	3	
4	チップ	1									1	
5	剥片石器			1				1			2	
6	磨石					1	1				2	
7	磨敲石			3			1				5	
8	磨凹石			2							2	
9	凹石			1							1	
10	敲石			5					4		9	
11	石皿			12		1					13	
12	台石			2							2	
13	使用痕のある石			3				1			4	
14	磨面のある石		1	15	4				1		20	
	合計	1	1	44	5	2	2	2	3	5	1	66

第4節 縄文時代晩期の調査

縄文時代晩期から古墳時代の包含層であるⅢ層では、遺構は確認できなかった。しかし、出土した遺物のうち、縄文時代晩期に該当する土器9点、石器12点から、土器3点と石器4点、及び表採品の土器1点の計8点を図化した。なお、石器は古墳時代のものが含まれている可能性があるが、判断が困難であるため、一括して扱っている。遺物の出土状況については、第22図に示した。

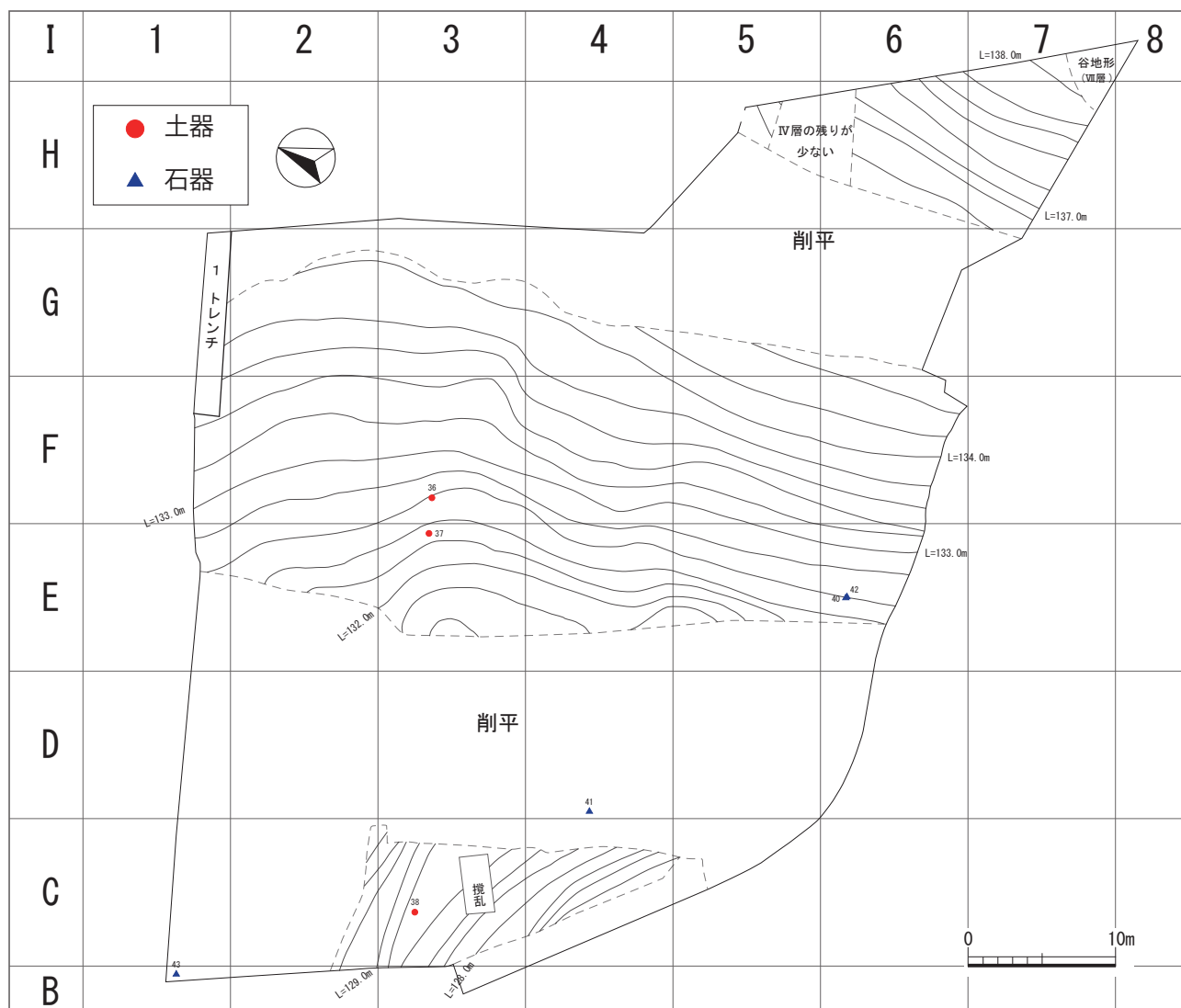
(1) 土器

36は、粗製土器の口縁部である。外面は荒いケズリだが内面と口唇部は丁寧にナデ調整されている。37は、粗製土器の口縁部である。口唇部に粘土帯を重ね厚みを持たせている。38は、組織痕土器である。表面にアンギン編みの圧痕がある。39は、表採品であるが、精製土器の頸部である。小片のため器種等は不明であるが、

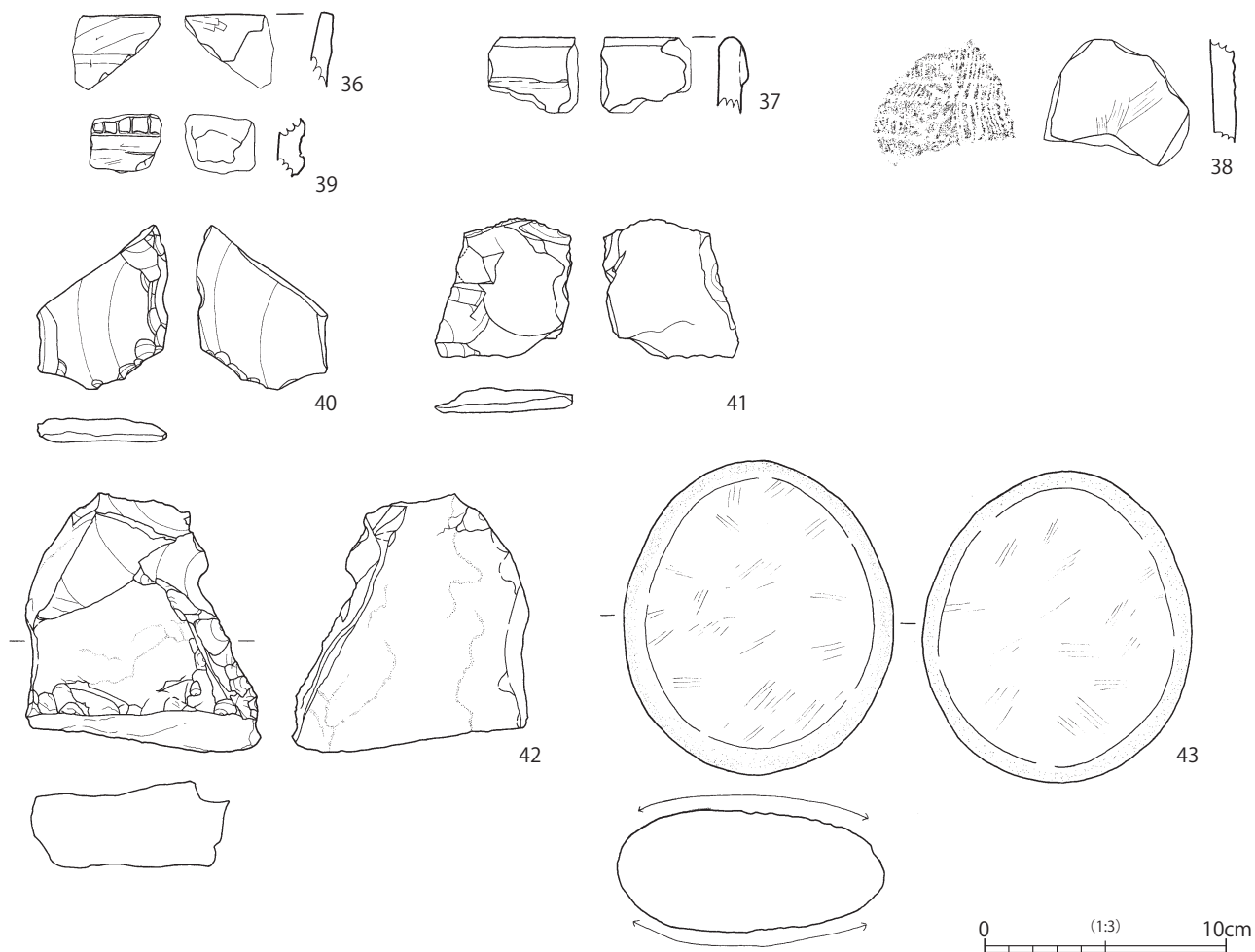
太い沈線と連続した刻み目で施文している。

(2) 石器

40は、ホルンフェルス素材とする基部を欠損した打製石斧の刃部片である。周縁から荒い剥離調整で整形された後、細かい剥離調整で仕上げられている。41は、ホルンフェルス素材とする剥片石器である。薄い平行四辺形に近い剥片であるが、剥離の際にできた辺は鋭利である。42は、ホルンフェルス素材とする剥片石器である。やや厚手の剥片の片側に刃部を作り出している。下辺が直線的なのは製作中に折れてしまったものと思われる。43は、安山岩素材とする磨石である。断面楕円形の扁平な円礫を素材とする。両面に磨面をもつ。その他、表採品で図化していないが、破損した頁岩製の石鏃が1点出土している。



第22図 縄文時代晩期の遺物出土状況図及び地形図（Ⅳ層上面コンター）



第 23 図 縄文時代晩期の土器・石器

第 8 表 縄文時代晩期土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	器種	部位	分類	法量 (cm)			調整		文様	色調		胎土				備考
							口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面	石英	長石	角閃石	他	
23	36	F-3	Ⅲ	深鉢	口縁部	粗製土器	—	—	—	ケズリ, ナデ	ナデ	—	灰褐	褐灰		○		白粒小石 (茶)	
	37	E-3	Ⅲ	—	口縁部	粗製土器	—	—	—	ナデ	ナデ	貼付突帯	灰黄褐	灰黄褐	○	○		白粒	
	38	C-3	Ⅲ	浅鉢?	胴部	黒川式	—	—	—	組織痕	ナデ	組織痕	橙	褐灰	○	○	○		組織痕土器
	39	一括	表土	—	頸部	精製土器	—	—	—	ナデ	ナデ	刻目突帯, 沈線	黒褐	にぶい褐	○	○		白粒	

第 9 表 縄文時代晩期以降石器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
23	40	E-6	Ⅲ	打製石斧の刃部	ホルンフェルス	6.7	5.3	1	29.7	基部欠損
	41	D-4	Ⅲ	剥片石器	ホルンフェルス	5.7	5.6	1	29.4	
	42	E-6	Ⅲ	剥片石器	ホルンフェルス	10.5	9.6	3.5	400	
	43	B-1	Ⅲ	磨石	安山岩	12.7	11	5	950	

第 10 表 縄文時代晩期以降石器組成表
(Ⅲ層出土)

番号	器種	石材			合計
		安山岩	砂岩	ホルンフェルス	
1	石核		1		1
2	剥片石器			2	2
3	打製石斧			1	1
4	磨石	1			1
5	石皿	2			2
6	磨面のある石	1			1
	合計	4	1	3	8

第5節 古墳時代の調査

古墳時代の包含層であるⅡ・Ⅲ層では、遺構は確認できなかった。しかし、遺物では最も多く924点の土器が出土している。その中から土器91点、及び表採品の土器12点、計103点を図化した。遺物の出土状況については、第24図に示した。出土した土器は小片が大部分である。

成川式土器の甕については、口縁部から胴部にかけての特徴から3類に分けられる。

I類(第25図 44～54)

口縁部が外反し胴部にかけての断面がなだらかなS字状になる。口唇部は平らで、全体に丁寧に仕上げられている。

44～54は、口縁部が外反する器形で、口唇部は平らで、水平もしくは外側に向いている。44～47は、口唇部が水平である。44は、ケズリと工具によるハケメ調整がなされている。他は主にナデ調整されている。

Ⅱ類(第26図 55～59)

口縁部はI類よりも立ち、やや開く程度になるか短く外反し、口唇部は丸みを帯びてくる。

55～59は、口縁部がやや開く程度になるか短く外反し、口唇部は丸みを帯びている。表面はナデ調整されており、56・59は、刻目突帯が施されている。また、59は、刻目に布目が観察できる。なお、57は、内面にアバタ状の剥落が、59は、アバタ状のシミが認められる。

Ⅲ類(第26図 60～66)

口縁部が直立もしくは内湾し、口唇部は尖り気味になる。調整は、やや荒くなりがちで、指跡が目立つようになる。

60・63・65は、断面が三角状の貼付突帯が施されている。また、63は、突帯貼付け前に、沈線で位置を示した状況が観察できるとともに、口唇部に粘土が貼り付けられているのも確認できる。なお、66については、口縁が大きく内側に向いており、調整も丁寧なことから高坏の可能性もある。

以下は、類別はできなかったが、甕の胴部から脚部にかけて記述する。

67～84は、甕の胴部である。67～71は、断面が三角状の貼付突帯が施されており、70は、交差するように貼り付けられている。また、72は、突帯上に連点状の凹みが施されている。73は、粘土を重ねた一部が剥がれている。74は、刻目突帯が施されている。なお、75・80・81は、内面にアバタ状の剥落が認められる。84は、底部と脚部の接合部に突帯が貼り付けられているが、破損が激しいため詳細は不明である。内外面にアバタ状の剥落が認められる。

85は、甕の胴部から脚部である。口縁部までは接合できなかったが、出土状況や胎土および焼成の状況から50と同一個体の可能性がある。脚部内面天井部が

ドーム状となり、端部は丸く収まる。

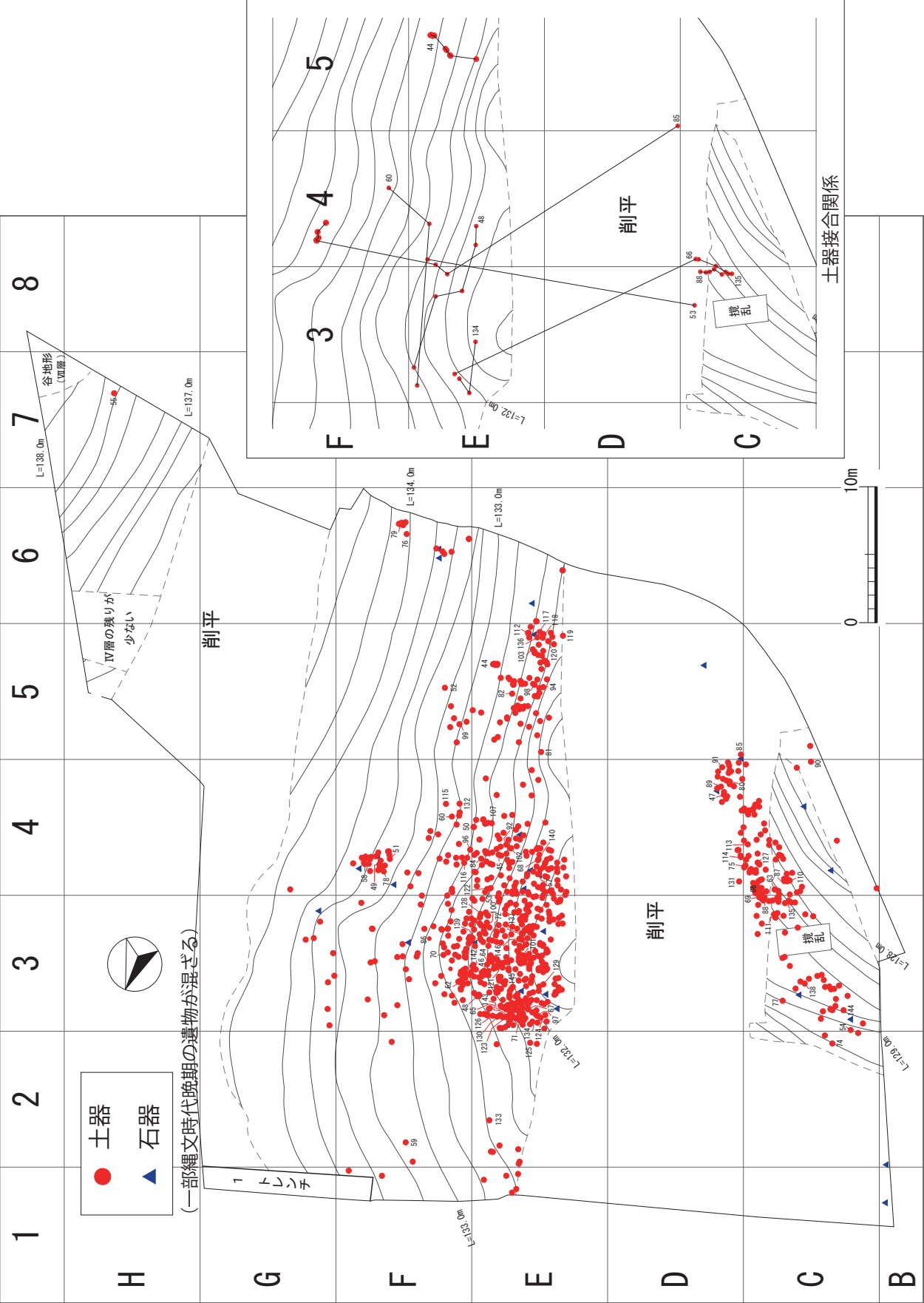
86～92は、甕の脚部である。86・87は、脚部内面天井部がドーム状となるが、86は、内部傾斜の度合いが強く、立ち上がりが低い。88は、脚部内面天井の中央部が膨らみ、内部傾斜の度合いが強い。89は、脚端部に向かい直線的に開き、端部は角張っている。90は、破損が激しいが、壁面が厚い。91は、脚端部に向かい直線的に開くが、端部は丸く収まる。92は、脚端部から急に立ち上がる。

ここからは、類別はできなかったが、壺について記述する。

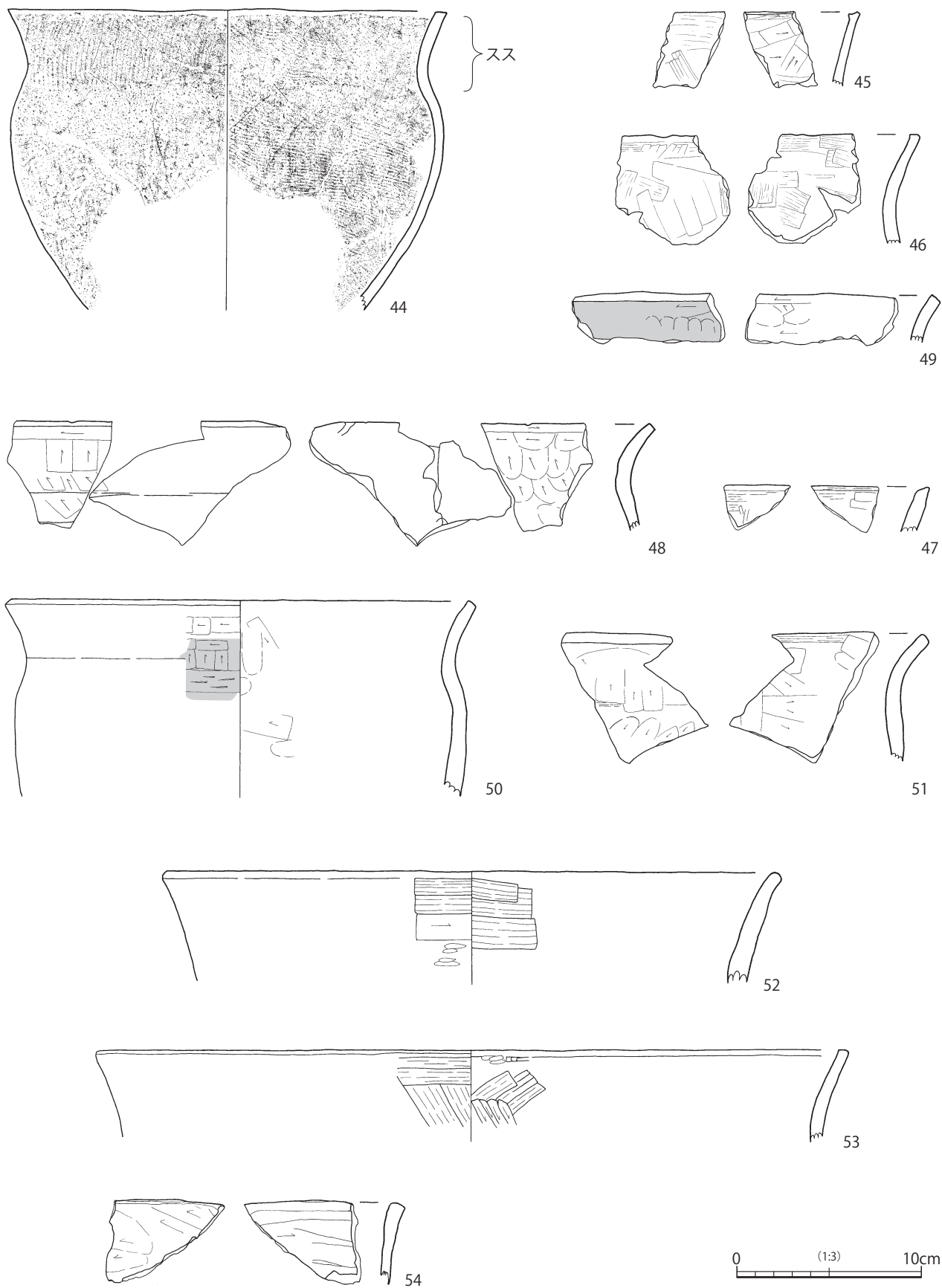
93～95は、壺の口縁部である。94は、外面にアバタ状の剥落が認められる。95は二重口縁で、頸部に刻目突帯を施しており、内外面にアバタ状の剥落が認められる。これは表採品ではあるが、96・97にも同様の刻目突帯があり、同一個体の可能性がある。98～102は、頸部から胴部にかけての部分で、刻目突帯が施されている。103～106は、胴部に施された刻目突帯の部分である。99・101・104は、刻目に布目が観察できる。また、105・106は、幅広の突帯に格子状刻目が施されている。107～109は、胴部である。107は、内面にアバタ状の剥落が認められる。109は、外面に工具によると思われる条痕が観察される。110～116は、底部である。110～112は、丸底だが、113・114は、平底の部分がある。なお、112は、内面のほぼ全域にアバタ状の剥落が認められる。115・116は内面に圧痕があり、116は、稲稈痕の可能性もある。

117～125は、埴の口縁部である。122は外面、他は内外に丁寧なミガキ調整を施している。その中でも123～125は、赤色顔料が施されている。また、アバタ状の剥落は、117・118・120は、内外面に、119は、内面のみ認められる。なお、口縁部の状態から119・120は、埴としたが、粘土の継ぎ目でかすかな段状を呈することから高坏の可能性もある。126～130は、埴の胴部と底部である。内外に丁寧なミガキ調整を施している。その中でも126・127・129は、赤色顔料が施されている。126は、球形に近い形状であるが、127は、ソロバン玉のような稜線をもつ。なお、127は、内面にアバタ状の剥落が認められる。また、丸底は、128・129だが、130は平底の部分がある。

131・132は、高坏の口縁部である。131は、口縁部と胴部との接合部に明確な段差が認められる。132は、口縁部と胴部との接合部に沈線が認められる。また、内面にアバタ状の剥落が認められる。133～138は、胴部から底部にかけての部分である。135は、内外、140～142は、外面に丁寧なミガキ調整を施し、赤色顔料が施されている。また、134・135は内面に、136は内外にアバタ状の剥落が認められる。なお、138は、円盤型土製品の可能性がある。



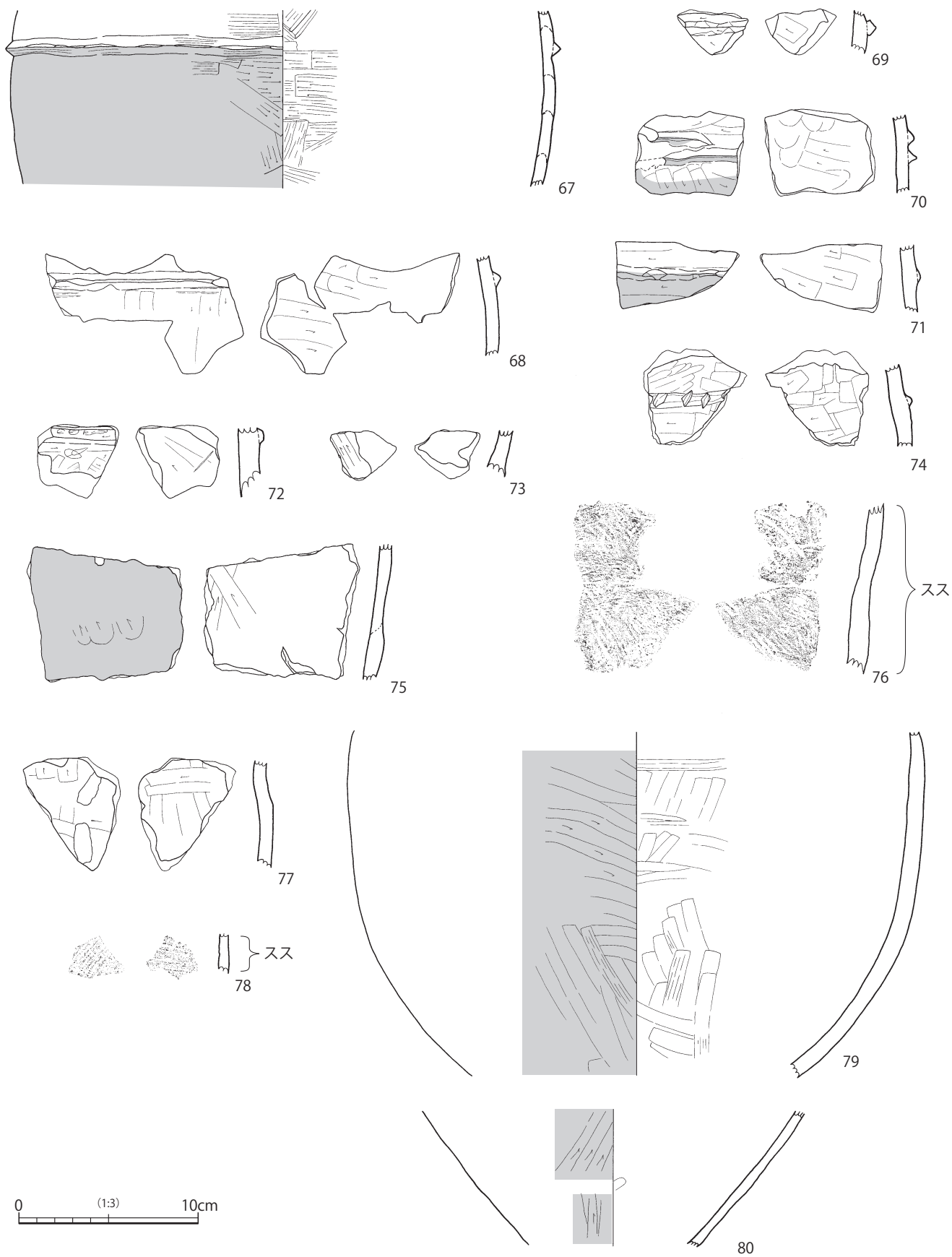
第 24 図 古墳時代の遺物出土状況図及び地形図 (Ⅳ層上面コンター)



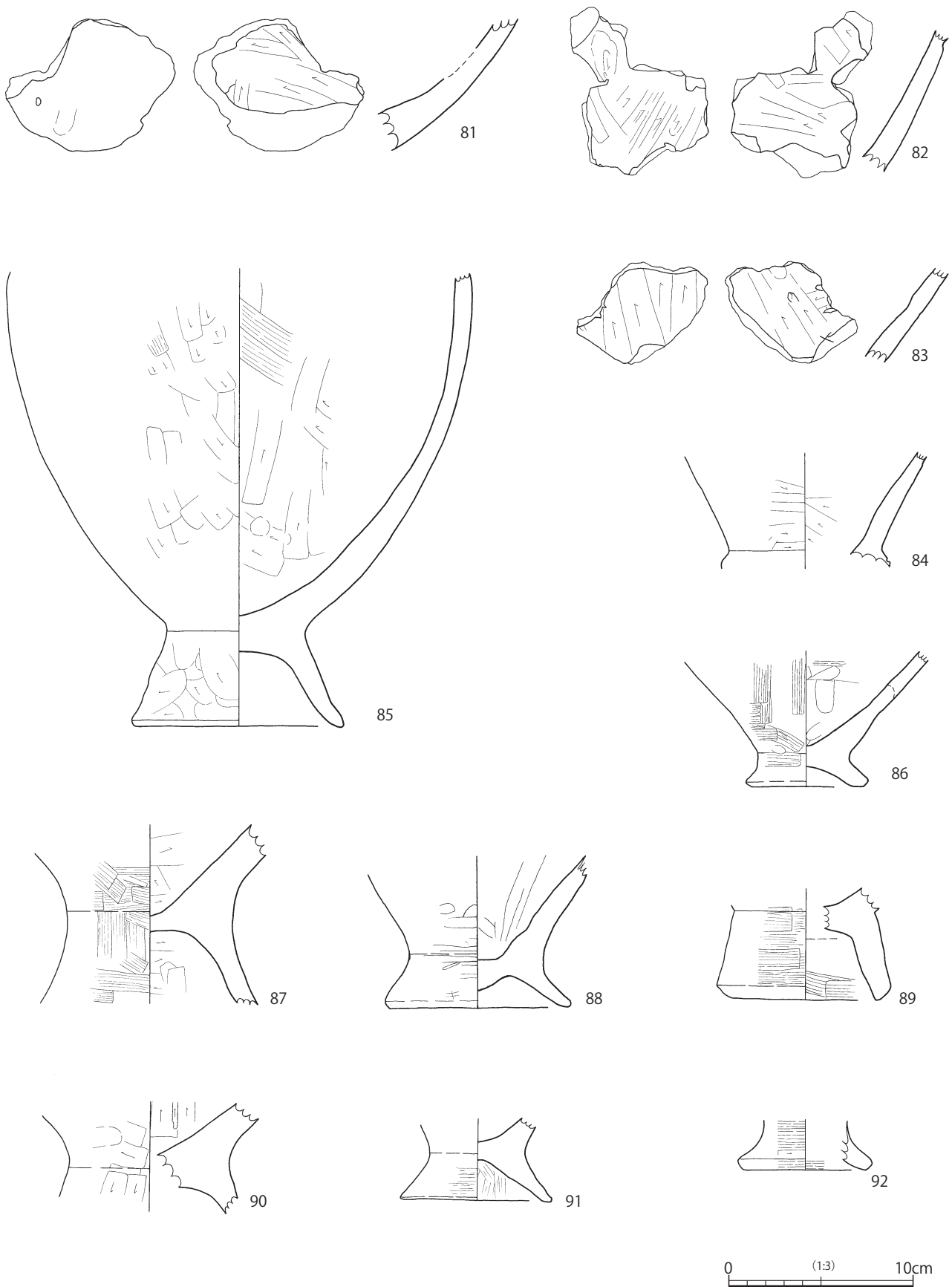
第 25 図 古墳時代の土器 (1)



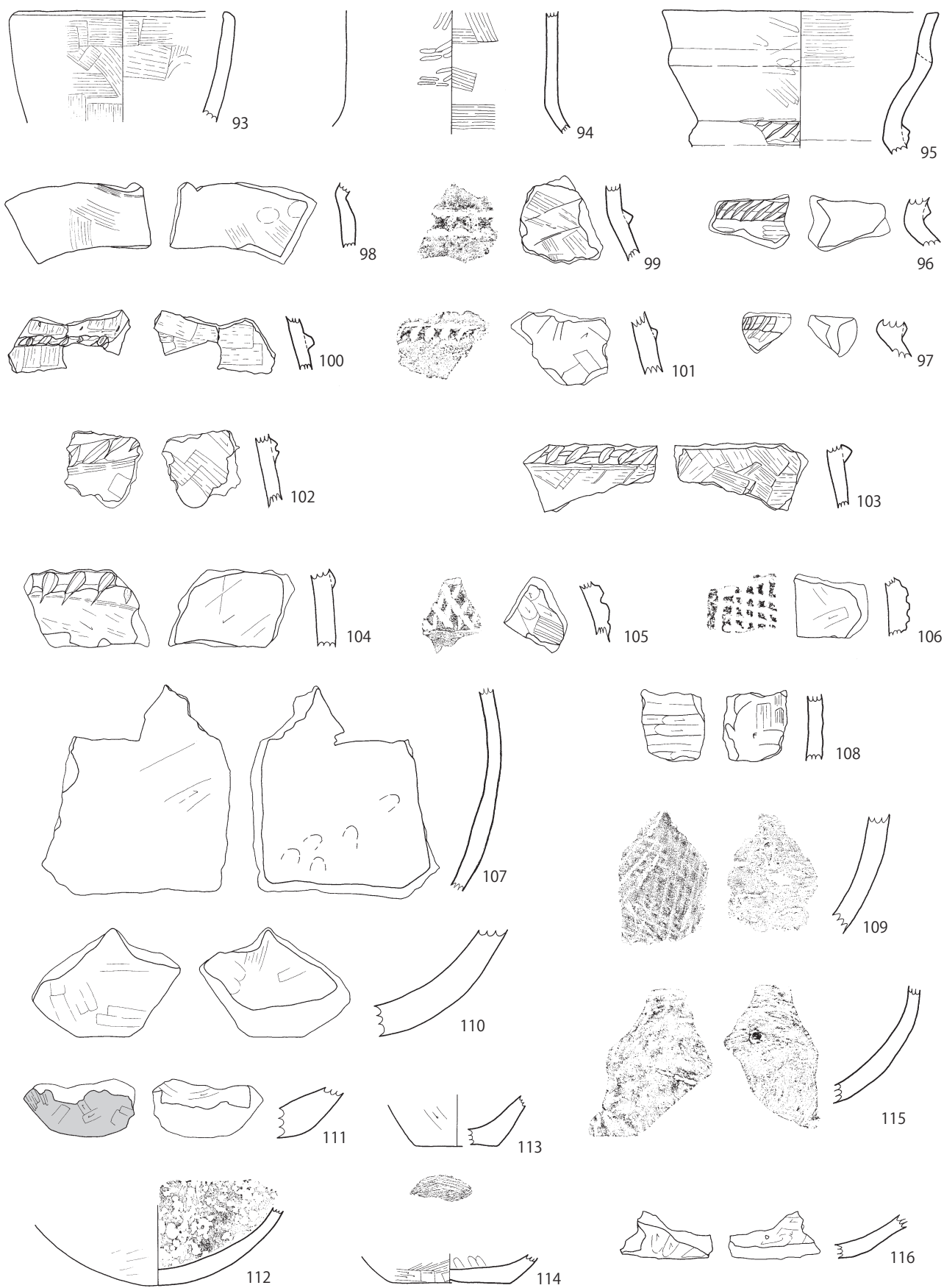
第 26 図 古墳時代の土器 (2)



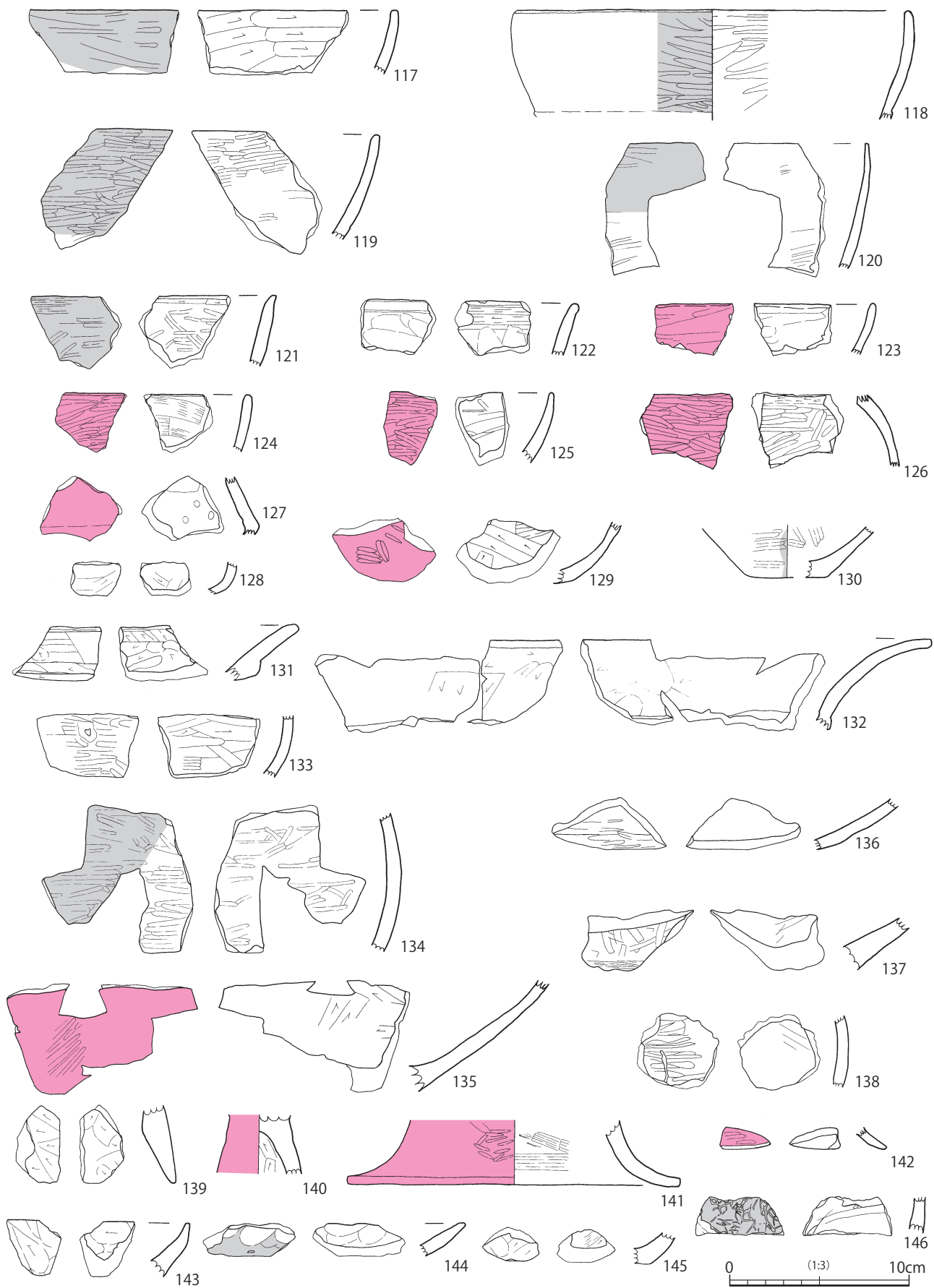
第 27 図 古墳時代の土器 (3)



第 28 図 古墳時代の土器 (4)



第 29 図 古墳時代の土器 (5)



第 30 図 古墳時代の土器 (6)

139～142は、脚部である。

その他の土器

上記以外に、以下の土器が出土した。143～145は、手づくね土器である。146は、スクラッチアートのよ

うにススのついた土器片に細い沈線がある。本遺跡では、他に類例がなく詳細は不明である。

第11表 古墳時代土器観察表(1)

挿 図 番 号	掲載 番号	出土区	層	器種	部位	分類	法量 (cm)			調整		文様	色調		胎土				備考
							口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面	石英	長石	角閃石	他	
25	44	E-5	Ⅲ	甕	□縁部 ～胴部	成川Ⅰ類	24	—	—	ケズリ、ハケメ (工具ナデ)	ケズリ、ハケメ (工具ナデ)	—	黄橙	明黄褐	○	○	○	小石 (灰、茶褐色等)	外面上部に少し スス
	45	E-4	Ⅲ	甕	□縁部	成川Ⅰ類	—	—	—	ナデ	ナデ	—	明赤褐	橙	○	○		灰色の小石	
	46	E-3	Ⅲ	甕	□縁部	成川Ⅰ類	—	—	—	ナデ	ナデ	—	明赤褐	明赤褐		○			
	47	D-4	Ⅲ	甕	□縁部	成川Ⅰ類	—	—	—	指オサエ、ナデ	ナデ	—	橙	橙	○	○		白粒	
	48	E-3・E-4	Ⅲ	甕	□縁部	成川Ⅰ類	—	—	—	工具オサエ、ナ デ	指オサエ、ナデ	—	明赤褐	にぶい黄橙		○	○	白粒	
	49	F-4	Ⅳ	甕	□縁部	成川Ⅰ類	—	—	—	ナデ	ナデ	—	褐	灰黄褐	○	○		白粒、赤粒	外面にスス
	50	E・F-4	Ⅲ Ⅳ Ⅳ	甕	□縁部 ～胴部	成川Ⅰ類	25.8	—	—	ケズリ、ナデ	ケズリ、ナデ	—	黄橙	にぶい黄褐	○	○		白粒、赤粒	外面に少しスス
	51	F-4	Ⅳ	甕	□縁部	成川Ⅰ類	—	—	—	ケズリ、ナデ	指オサエ、ナデ	—	にぶい赤褐	にぶい褐	○	○		白粒、赤粒	
	52	F-5	Ⅲ	甕	□縁部	成川Ⅰ類	33.2	—	—	ナデ、工具痕	ナデ	—	橙	にぶい黄橙	○	○		白粒、赤粒	
26	53	C-3・ E-4	Ⅲ	甕	□縁部	成川Ⅰ類	41	—	—	ヘラケズリ、ナデ	ナデ	—	明赤褐	明赤褐	○	○		白粒	
	54	C-2・ C-3	Ⅱ	甕	□縁部	成川Ⅰ類	—	—	—	ケズリ、ナデ	ケズリ	—	黒褐	黒褐	○			白粒、赤粒	
	55	H-7	V	甕	□縁部 ～胴部	成川Ⅱ類	28.8	—	—	工具ケズリ、 ナデ、指オサエ	ナデ	—	橙	橙		○		白粒、赤粒	
	56	一括	表	甕	□縁部	成川Ⅱ類	—	—	—	ナデ	ナデ	刻目突帯	橙	橙		○		白粒、赤粒	
	57	E-4	Ⅲ	甕	□縁部	成川Ⅱ類	—	—	—	ナデ	ナデ	—	橙	にぶい黄橙	○			白粒	外面にスス
	58	F-4	Ⅲ	甕	□縁部	成川Ⅱ類	—	—	—	ナデ	ナデ	—	橙	橙	○	○		小石(赤褐)	内面アバタ状の剥落
	59	F-2	Ⅲ	甕	□縁部	成川Ⅱ類	34.4	—	—	指オサエ、ナデ	指オサエ、ナデ	刻目突帯(布目)	にぶい赤褐	明赤褐	○	○		白粒	内面アバタ状のシミ
	60	E-3・ E・F-4	Ⅲ	甕	□縁部 ～胴部	成川Ⅲ類	—	—	—	指オサエ、ナデ	指オサエ、ナデ	貼付突帯	明黄褐～ 黒褐	明黄褐～ 黒褐	○	○			外面の突帯下よりスス付着、 内面下部にコゲあり
	61	一括	表	甕	□縁部 ～胴部	成川Ⅲ類	—	—	—	ケズリ、ナデ	指オサエ、ナデ	—	橙	橙	○	○		小石(灰)	
27	62	F-3	Ⅲ	甕	□縁部 ～胴部	成川Ⅲ類	17	—	—	ナデ	ケズリ、ナデ 指オサエ	—	黒褐	明赤褐	○	○	○	白粒、赤粒	外面にスス
	63	C-4	Ⅲ	甕	□縁部	成川Ⅲ類	20.4	—	—	ナデ	指オサエ、ナデ	貼付突帯	橙	明黄褐	○	○		白粒	□縁に粘土貼付
	64	E-3	Ⅲ	甕	□縁部	成川Ⅲ類	—	—	—	ナデ	ナデ	—	赤褐	明赤褐	○	○		赤粒	外面にスス
	65	E-3	Ⅲ	甕	□縁部	成川Ⅲ類	30.6	—	—	ナデ	ナデ	貼付突帯	橙	灰黄褐	○	○	○	白粒、赤粒	
	66	C-4・E-3	Ⅲ	甕	□縁部	成川Ⅲ類	32.8	—	—	ナデ	ナデ	—	橙	にぶい黄橙	○	○			
	67	E・F-3	Ⅲ	甕	胴部	成川	—	—	—	指オサエ、ナデ	指オサエ、ナデ	貼付突帯	橙	にぶい黄橙	○	○		赤粒	突帯から下にスス
	68	E-3・4	Ⅲ	甕	胴部	成川	—	—	—	ナデ	ナデ	貼付突帯	明赤褐	橙	○	○	○	赤粒	一部沈線
	69	C-3	Ⅲ	甕	胴部	成川	—	—	—	ナデ	ハケメ	貼付突帯	にぶい黄橙	橙	○	○		白粒	
	70	F-3	Ⅲ	甕	胴部	成川	—	—	—	ナデ	指オサエ、ナデ	貼付突帯 (交差)	明赤褐	明赤褐	○	○	○	白粒	突帯から下にスス
28	71	E-3	Ⅲ	甕	胴部	成川	—	—	—	ナデ	ナデ	貼付突帯	明赤褐	黒褐	○		○	赤粒	突帯から下にスス
	72	E-3	Ⅲ	甕	胴部	成川	—	—	—	ナデ	ナデ	貼付突帯	明赤褐	にぶい橙	○	○		白粒、赤粒	四角断面、 連点状の凹み
	73	一括	表	甕	胴部	成川	—	—	—	ナデ	ナデ	—	にぶい黄橙	灰黄褐	○	○		白粒	外面一部剥落
	74	C-2	Ⅲ	甕	胴部	成川	—	—	—	ナデ	ナデ	刻目突帯	明赤褐	にぶい褐	○	○		赤粒	
	75	C-4	Ⅲ	甕	胴部	成川	—	—	—	指オサエ、ナデ	ナデ	—	黒褐	明赤褐	○	○	○	白粒	外面にスス 内面アバタ状の剥落
	76	F-6	Ⅲ	甕	胴部	成川	—	—	—	貝殻条痕、ナデ	ケズリ、ナデ	貝殻条痕	灰褐	にぶい褐	○	○	○	白粒 小石(灰)	外面にスス
	77	C-3	Ⅲ	甕	胴部	成川	—	—	—	工具ケズリ、ナデ	ナデ	—	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○		白粒	
	78	F-4	Ⅲ	甕	胴部	成川	—	—	—	ナデ、条痕	ケズリ	クシ目条 痕	黒	黒褐色	○	○		赤粒	外面にスス
	79	F-6	Ⅲ	甕	胴部 ～底部	成川	—	—	—	条痕(指頭?)	ケズリ、ナデ	条痕	明赤褐	明赤褐	○	○	○		外面にスス
29	80	D-4	Ⅲ	甕	胴部	成川	—	—	—	ナデ、ミガキ	ナデ	—	暗褐	灰黄褐	○	○	○	白粒	内面アバタ状の剥落
	81	E-5	Ⅲ	甕	胴部	成川	—	—	—	ナデ	ケズリ、ナデ	—	橙	明赤褐	○	○	○	白粒、赤粒	内面アバタ状の剥落
	82	E-5	Ⅲ	甕	胴部	成川	—	—	—	ケズリ	ケズリ、ナデ	—	明黄褐	にぶい黄橙	○	○	○		
	83	一括	表	甕	胴部	成川	—	—	—	ハケメ(工具痕)	ケズリ	—	橙	にぶい橙	○	○		白粒	
	84	E-4	Ⅲ	甕	胴部	成川	—	—	—	ケズリ、ナデ	ケズリ、ナデ	刻目突帯	橙	灰黄褐	○	○			内外アバタ状の剥落
	85	D-5・F-4 E-3・4	Ⅲ Ⅳ	甕	胴部 ～脚部	成川	—	11.4	—	指オサエ、ナデ	ケズリ、ナデ	—	明赤褐	褐灰	○	○		白粒、赤粒	
	86	E・F-3	Ⅲ	甕	底部 (脚部)	成川	—	5.9	—	ケズリ、ナデ	ケズリ、ナデ	—	橙	橙	○	○		赤粒	
	87	C-4	Ⅲ	甕	脚部	成川	—	—	—	ケズリ、ナデ	ケズリ	—	橙	にぶい黄橙	○	○		白粒、赤粒	
	88	C-3・4	Ⅲ	甕	底部 (脚部)	成川	—	10	—	指オサエ、ナデ	ケズリ、ナデ	—	橙	にぶい橙	○	○		赤粒	
	89	D-4	Ⅲ	甕	底部 (脚部)	成川	—	8	—	ケズリ、ナデ	ケズリ、ナデ	—	橙	にぶい赤褐	○	○			
	90	C-4	Ⅲ	甕	脚部	成川	—	—	—	ケズリ、ナデ	ケズリ	—	橙	にぶい赤褐	○	○		小石	
	91	D-4	Ⅲ	甕	底部 (脚部)	成川	—	8.2	—	ケズリ、ナデ	ケズリ、ナデ	—	灰黄褐	褐灰	○	○		白粒、赤粒	
	92	E-4	Ⅲ	甕	脚部	成川	—	7.2	—	ナデ	—	—	明赤褐	にぶい赤褐	○	○		白粒、赤粒	

第 12 表 古墳時代土器観察表 (2)

挿 図 番 号	掲 載 番 号	出土区	層	器種	部位	分類	法量 (cm)			調整		文様	色調		胎土				備考
							口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面	石英	長石	角閃石	他	
29	93	一括	表	壺	口縁部	成川	11	—	—	ナデ	ナデ	—	明黄褐	にぶい黄	○	○		白粒, 赤粒	
	94	E-5	Ⅲ	壺	口縁部	成川	—	—	—	ミガキ	ナデ	—	明赤褐	赤褐		○	○	赤粒	外面アバタ状の剥落
	95	一括	表	壺	二重口縁	成川	15	—	—	ミガキ	ナデ	刻目突帯	橙	橙	○	○		白粒	内外アバタ状の剥落
	96	F-4	Ⅲ	壺	頸部	成川	—	—	—	ナデ, ミガキ	ナデ	刻目突帯	明赤褐	にぶい橙	○	○		白粒	
	97	E-3	Ⅲ	壺	頸部	成川	—	—	—	ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい黄	にぶい黄褐	○			白粒	
	98	E-5	Ⅲ	壺	胴部	成川	—	—	—	ナデ	指オサエ, ナデ	刻目突帯	明黄褐	にぶい黄橙	○	○			
	99	F-5	Ⅲ	壺	胴部	成川	—	—	—	ナデ	ナデ	刻目突帯 (布目)	橙	にぶい黄橙	○	○	○	赤粒 小石 (灰)	
	100	E-3	Ⅲ	壺	胴部	成川	—	—	—	ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい黄橙	にぶい黄橙				赤粒	
	101	E-3	Ⅲ	壺	胴部	成川	—	—	—	ナデ	ナデ	刻目突帯 (布目)	明赤褐	橙	○	○			
	102	E-4	Ⅲ	壺	胴部	成川	—	—	—	ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○		白粒	
	103	E-5	Ⅲ	壺	胴部	成川	—	—	—	ナデ	ナデ	刻目突帯	明赤褐	明赤褐	○	○		白粒	
	104	一括	表	壺	胴部	成川	—	—	—	ナデ	ナデ	刻目突帯 (布目)	橙	明赤褐	○	○		白粒, 赤粒	
	105	一括	表	壺	胴部	成川	—	—	—	ナデ	ナデ	刻目突帯 (格子状)	にぶい橙	にぶい橙	○	○		赤粒	
	106	一括	表	壺	胴部	成川	—	—	—	ナデ	ナデ	刻目突帯 (格子状)	橙	にぶい橙	○	○		白粒	
	107	E・F-4	Ⅲ	壺	胴部	成川	—	—	—	ナデ	指オサエ, ナデ	—	明赤褐	明褐	○	○	○	白粒, 赤粒 小石 (灰)	内面アバタ状の剥落
	108	一括	表	壺	胴部	成川	—	—	—	ナデ	ケズリ	指条痕	にぶい赤褐	赤褐	○	○	○	白粒	
	109	一括	表	壺	胴部	成川	—	—	—	工具痕, ナデ	荒いケズリ, ナデ	—	明赤褐	明赤褐	○	○		白粒 小石 (赤灰)	
30	110	C-4	Ⅲ	壺	底部	成川	—	—	—	ナデ	ケズリ, ナデ	—	明赤褐	にぶい黄橙	○	○		白粒 小石 (赤, 灰)	
	111	C-3	Ⅲ	壺	底部	成川	—	—	—	ナデ	ナデ	—	褐灰	赤褐	○	○		白粒 小石 (赤, 灰)	外面にスス
	112	E-5	Ⅲ	壺	底部	成川	—	—	—	ナデ	ナデ	—	橙	橙		○	○	白粒	内面アバタ状の剥落
	113	C-4	Ⅲ	壺	底部	成川	—	4.4	—	ナデ	ナデ, ケズリ (底)	—	明赤褐	黒褐	○	○		白粒	
	114	D-4	Ⅲ	壺	底部	成川	—	6.6	—	ナデ	ナデ	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○	白粒	
	115	F-4	Ⅲ	壺	底部	成川	—	—	—	ナデ	ケズリ, 圧痕 ナデ工具条痕	—	明赤褐	明赤褐	○	○	○		
	116	F-4	Ⅲ	壺	底部	成川	—	—	—	ナデ	ナデ (モミ痕)	—	橙	にぶい黄橙	○		○		
	117	E-5	Ⅲ	埴	口縁部	成川	—	—	—	ミガキ	ミガキ	—	にぶい赤褐	明赤褐		○		黒曜石	外面全体にスス 内外アバタ状の剥落
	118	E-5	Ⅲ	埴	口縁部	成川	21.6	—	—	ミガキ	ナデ, ミガキ	—	赤褐	明赤褐	○	○		白粒	外面にスス 内外アバタ状の剥落
	119	E-5	Ⅲ	埴	口縁部	成川	—	—	—	ミガキ	ミガキ	—	赤褐	明赤褐				白粒	外面上部にスス 内面アバタ状の剥落
	120	E-5	Ⅲ	埴	口縁部	成川	—	—	—	ミガキ	ミガキ	—	赤褐	橙				小石 (白, 灰, 赤)	外面上部にスス 内外アバタ状の剥落
	121	E-3	Ⅲ	埴	口縁部	成川	—	—	—	ハケメ, ミガキ	ハケメ, ミガキ	—	にぶい赤褐	明赤褐		○		赤粒, 白粒 小石 (灰)	外面全体にスス
	122	E-4	Ⅲ	埴	口縁部	成川	—	—	—	ミガキ	ナデ, ハケメ ミガキ	—	赤褐	明赤褐				白粒, 赤粒	
	123	E-3	Ⅲ	埴	口縁部	成川	—	—	—	ミガキ	ミガキ	—	赤褐	明赤褐				白粒 小石 (赤)	赤色顔料
	124	E-3	Ⅲ	埴	口縁部	成川	—	—	—	ミガキ	ケズリ, ナデ ミガキ	—	赤	明褐				白粒 小石 (赤)	赤色顔料
	125	E-2	Ⅲ	埴	口縁部	成川	—	—	—	ミガキ	ミガキ	—	赤	にぶい橙	○		○	白粒	赤色顔料
	126	E-3	Ⅲ	埴	胴部	成川	—	—	—	ミガキ	ミガキ	—	赤	赤褐	○	○		白粒 小石 (灰, 赤)	赤色顔料
	127	C-4	Ⅲ	埴	胴部	成川	—	—	—	ミガキ	ナデ, ミガキ	—	赤	明赤褐	○			赤粒	赤色顔料 内面アバタ状の剥落
	128	E-3	Ⅲ	埴	底部	成川	—	—	—	ナデ	ナデ, ミガキ	—	橙	橙	○	○		白粒	
	129	E-3	Ⅲ	埴	底部	成川	—	—	—	ミガキ	ハケメ, ミガキ	—	赤	明赤褐	○	○		白粒	赤色顔料
30	130	E-3	Ⅲ	埴	底部	成川	—	3.8	—	ミガキ	ケズリ, ナデ	—	赤褐	にぶい赤褐	○			黒曜石, 白粒 小石 (赤)	外面にスス
	131	D-4	Ⅲ	高埴	口縁部	成川	—	—	—	ナデ	ナデ	—	橙	にぶい橙		○		白粒, 赤粒	
	132	F-3・ E・F-4	Ⅲ	高埴	口縁部	成川	—	—	—	ケズリ, ナデ ハケメ	ナデ	内面沈線	明赤褐	明赤褐	○	○	○	白粒, 赤粒	内面アバタ状の剥落
	133	E-2	Ⅲ	高埴	胴部	成川	—	—	—	ミガキ	ミガキ	—	明赤褐	にぶい黄褐		○	○	白粒	
	134	E-3	Ⅲ	高埴	胴部	成川	—	—	—	ミガキ	ミガキ	—	明赤褐	明赤褐	○	○		白粒, 赤粒	外面にスス 内面アバタ状の剥落
	135	C-3・4	Ⅲ	高埴	胴部	成川	—	—	—	ミガキ	ミガキ	—	赤	橙	○	○	○	白粒	脚取付部, 赤色顔料 内面アバタ状の剥落
	136	E-5	Ⅲ	高埴	胴部	成川	—	—	—	ミガキ	ミガキ	—	赤	明赤褐	○	○		白粒 小石 (赤)	内外アバタ状の剥落
	137	E-3	Ⅲ	高埴	底部	成川	—	—	—	ナデ, ミガキ	ミガキ	—	明赤褐	明赤褐	○	○		白粒	脚の付け根
	138	C-3	Ⅲ	高埴	胴部	成川	—	—	—	ミガキ	ナデ	—	にぶい赤褐	明赤褐	○		○	赤粒	円盤型土製品, 内面スス
	139	E-3	Ⅲ	高埴	脚部	成川	—	—	—	ナデ	ナデ	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○	白粒	
	140	E-4	Ⅲ	高埴	脚部	成川	—	—	—	ミガキ	ケズリ	—	赤	にぶい黄褐	○	○		小石 (赤, 灰, 黒)	赤色顔料
	141	一括	表	高埴	脚部	成川	—	18.2	—	ミガキ	ナデ	—	赤	灰黄褐	○	○	○	白粒	赤色顔料
	142	E-3	Ⅲ	高埴	脚部	成川	—	—	—	ミガキ	ナデ	—	赤	にぶい褐	○		○	白粒	赤色顔料
	143	E-3	Ⅲ	—	口縁部	手づくね	—	—	—	指オサエ	指オサエ	—	にぶい橙	にぶい黄橙		○		赤粒	
	144	C-3	Ⅲ	—	口縁部	手づくね	—	—	—	指オサエ, ナデ	指オサエ, ナデ	—	灰黄褐	にぶい橙	○	○	○	白粒	外面にスス
	145	E-3	Ⅲ	—	底部	手づくね	—	—	—	指オサエ	ナデ	—	明褐	明赤褐		○		白粒	
	146	E-3	Ⅲ	—	胴部	成川	—	—	—	ミガキ, 沈線	ナデ	沈線刻	灰褐	橙	○	○	○	白粒	外面にスス, 線刻あり

第6節 古代以降の調査

古代の包含層であるⅡ層および表土から出土した遺物は、土師器や須恵器・陶磁器等である。表採品がほとんどであるが、時代の変遷がうかがえる31点を図化した。

147～149は、土師器坏で、底部は、ヘラ切りである。150は、土師器皿である。151・153は、土師器甕の口縁部で、152は、頸部である。内側は、口縁部近くまで荒々しいケズリが認められるが、口唇部や外側は、ナデ調整である。154は、土師器壺の口縁部である。155～158は、焼成の不十分な須恵器で、底部は、ヘラ切りである。159・160は、須恵器である。160は、甕で、外面が平行タタキ、内面が、同心円状の当て具痕が残されている。161は、須恵器壺である。

162・163は、黒色土器である。

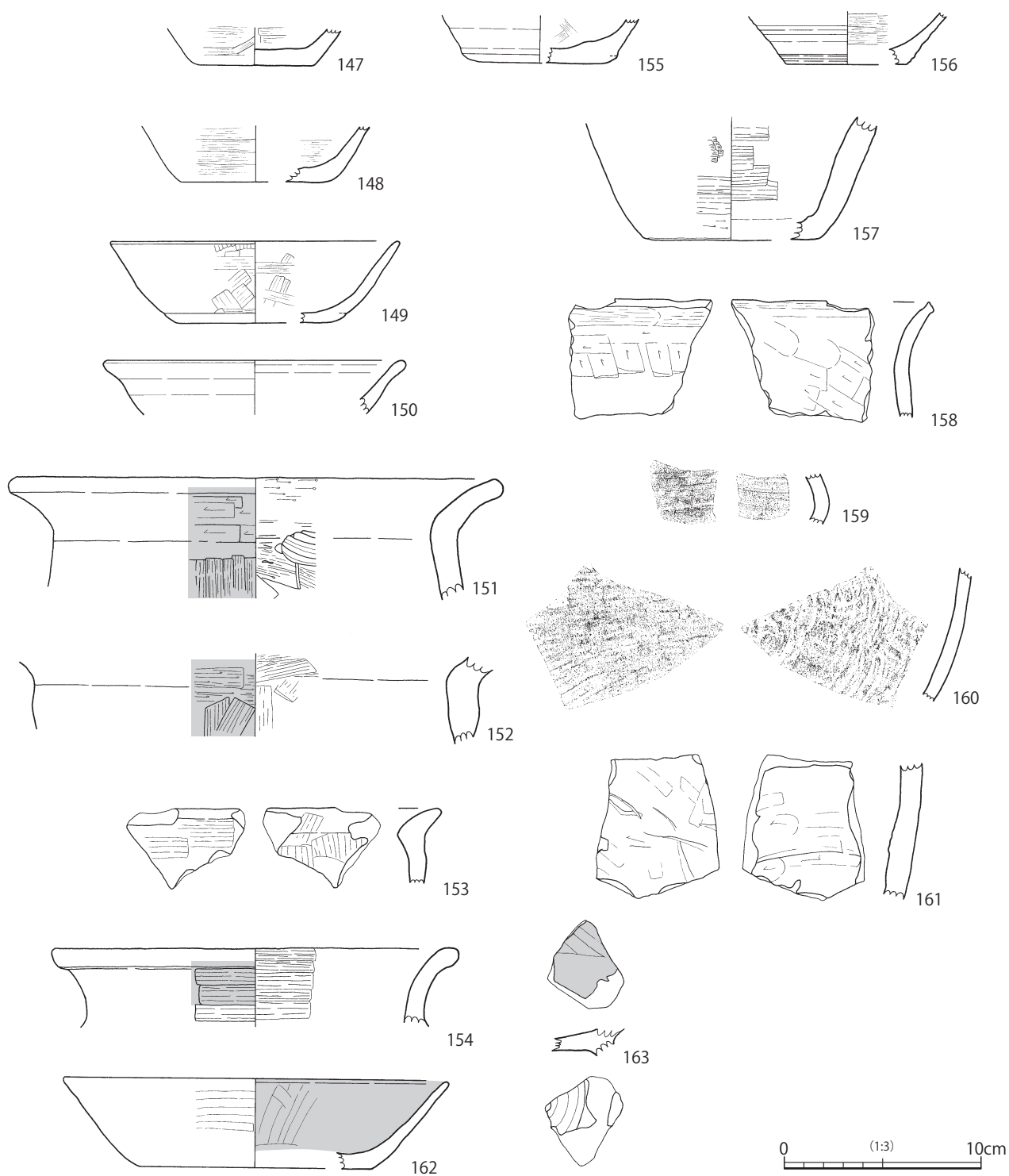
163は、破損が著しいが、高台の痕跡が認められる。164は、素焼きの焙烙である。胴部断面が逆くの字状を呈する。165は、龍門司焼の碗である。166は、龍門司焼の皿である。167は、陶器の壺と思われるが、産地は不明である。内面に回転ナデの指跡を残し、外面のみ釉を施している。168は、苗代川焼の鉢である。169・170は、苗代川焼の播鉢である。内面に薄く釉がかかり、カキメが施されている。171～174は、苗代川焼の土瓶である。175は、陶器の徳利で、琉球産の可能性ある。176・177は、染付の碗である。176は、口唇部が直立し、直線と円の幾何学紋様が描かれている。177は、口唇部が外反し、山水文が描かれている。

第13表 古代以降の土器観察表

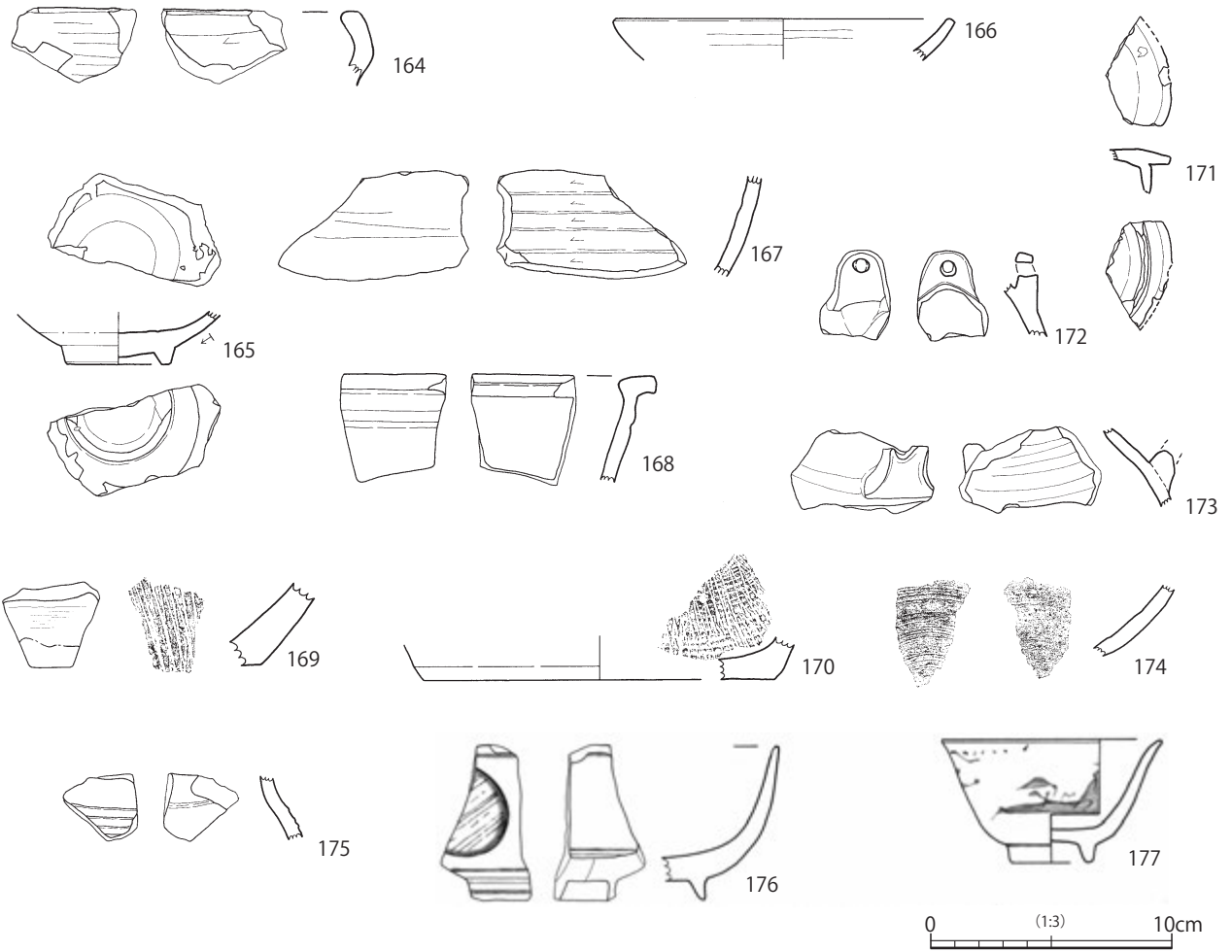
挿図番号	掲載番号	出土区	層	器種	部位	分類	法量 (cm)			調整		文様	色調		胎土				備考
							口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面	石英	長石	角閃石	他	
31	147	一括	表土	土師器 坏	底部	ヘラ切	—	5.8	—	回転ナデ、ケズリ	回転ナデ	—	にぶい橙	浅黄橙	○	○			
	148	一括	表土	土師器 坏	底部	ヘラ切	—	7.6	—	回転ナデ	回転ナデ	—	橙	橙		○	○	白粒	
	149	一括	表土	土師器 坏	口縁部～底部	ヘラ切	—	7.6	4.1	回転ナデ	回転ナデ	—	橙	橙	○	○		白粒、赤粒	
	150	一括	表土	土師器 皿	口縁部	—	15	—	—	回転ナデ	回転ナデ	—	橙	橙	○			白粒、小石(茶)	
	151	一括	表土	土師器 甕	口縁部	土師器	24.8	—	—	回転ナデ、ケズリ	回転ナデ、ケズリ	—	灰褐	橙	○			赤粒、小石(灰)	
	152	一括	表土	土師器 甕	頸部	土師器	—	—	—	回転ナデ、ケズリ	回転ナデ、ケズリ	—	灰褐	明赤褐	○			白粒、赤粒、小石(灰、茶)	
	153	一括	表土	土師器 甕	口縁部	土師器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ、ケズリ	—	にぶい橙	灰黄褐	○	○		白粒	
	154	一括	表土	土師器 壺	口縁部	土師器	20.2	—	—	回転ナデ	回転ナデ	—	明赤褐	明赤褐	○		○	白粒、赤粒	
	155	一括	表土	須恵器 坏	胴部～底部	ヘラ切	—	7.6	—	回転ナデ	回転ナデ	—	橙	にぶい橙	○	○		赤粒	焼成温度不足
	156	一括	表土	須恵器 坏	胴部～底部	須恵器	—	6	—	回転ナデ	回転ナデ	—	明赤褐	橙	○	○		小石(灰)	焼成温度不足
	157	一括	表土	須恵器 甕	底部	ヘラ切	—	8.8	—	回転ナデ、ケズリ	ケズリ	—	にぶい赤褐	にぶい橙		○		白粒	焼成温度不足
	158	F-3	Ⅲ	須恵器 壺	口縁部	須恵器	—	—	—	工具ケズリ、ナデ	工具ケズリ、ナデ	—	橙	灰黄褐	○			白粒、赤粒	焼成温度不足
	159	一括	表土	須恵器 壺	底部	須恵器	—	—	—	回転ケズリ	回転ナデ	—	暗灰	灰				白粒、黒粒	
	160	一括	表土	須恵器 甕	胴部	須恵器	—	—	—	平行タタキ	同心円	—	灰	暗灰				白粒	
	161	一括	表土	須恵器 壺	胴部	須恵器	—	—	—	ナデ、自然釉	指跡(荒々しい)	—	褐	にぶい黄橙		○		白粒、小石(灰)	
	162	一括	表土	黒色土器 A 碗	口縁部～底部	ヘラ切	19.2	11.4	4.4	回転ナデ	ミガキ	—	にぶい黄橙	黒	○	○		赤粒	
	163	一括	表土	黒色土器 A 碗	底部	高台付	—	—	—	回転ナデ	ミガキ	—	橙	黒		○		赤粒	

第14表 中世・近世の遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	器種	部位	分類	法量 (cm)			調整		胎土				釉薬色調		備考
							口径	底径	器高	外面	内面	石英	長石	角閃石	他	外面	内面	
32	164	一括	表土	焙烙	口縁部	焙烙	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ		○		白粒	—	—	胎土(にぶい橙)
	165	一括	表土	碗	底部	龍門司	—	4.2	—	回転ケズリ	回転ケズリ	○			白粒、精製土	暗オリーブ褐	暗オリーブ褐	高台下(明赤褐)
	166	一括	表土	皿	口縁部	龍門司	14	—	—	回転ナデ	回転ナデ				精製土	黒褐	黒褐	胎土(灰)
	167	一括	表土	壺	胴部	—	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	○			白粒	暗赤褐	—	胎土(にぶい赤褐)
	168	一括	表土	鉢	口縁部	苗代川	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	○			白粒、黒粒	灰オリ-ブ	灰オリ-ブ	胎土(にぶい赤褐)、沈線
	169	一括	表土	播鉢	底部	苗代川	—	—	—	回転ナデ、ケズリ	ナデ、カキメ	○		○	白粒	暗赤灰	暗赤灰	胎土(赤)
	170	一括	表土	播鉢	底部	苗代川	—	14.4	—	回転ナデ、ケズリ	ナデ、カキメ	○			白粒、小石(灰)	オリ-ブ黒	黒褐	底部(露胎)、内(櫛目文)
	171	一括	表土	土瓶	蓋	苗代川	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ、ヘラ調整				白粒	暗オリーブ	暗オリーブ	胎土(明赤褐)、内(露胎)
	172	一括	表土	土瓶	耳	苗代川	—	—	—	ナデ	回転ナデ	○	○		白粒	オリ-ブ黒、透明	オリ-ブ黒	胎土(にぶい赤褐)、内面の一部(露胎)
	173	一括	表土	土瓶	耳・胴	苗代川	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ、轆轤目		○		白粒、小石(灰)	オリ-ブ黒	オリ-ブ黒	胎土(にぶい赤褐)
	174	一括	表土	土瓶	底部	苗代川	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ、轆轤目		○		白粒、赤粒、黒粒	赤褐	暗赤褐	釉なし、胎土(明赤褐)
	175	一括	表土	徳利	頸部	琉球?	—	—	—	回転ナデ、段付け	回転ナデ	○			白粒	—	—	釉なし、胎土(暗赤褐)、露胎
	176	一括	表土	碗	口縁部～底部	染付	—	—	6.25	回転ナデ	回転ナデ				精製土、黒粒	透明	透明	胎土(灰白)、墨付釉剥ぎ
	177	一括	表土	碗	口縁部～底部	染付	9	3.4	5	回転ナデ	回転ナデ				精製土	透明	透明	釉(透明)、胎土(灰白)山水文、青色



第 31 図 古代以降の土器



第 32 図 中世・近世の遺物

第Ⅴ章 総 括

本遺跡は、標高約 150m の台地上にある鹿屋体育大学のグラウンド南東側に隣接した、標高差約 10m の傾斜地に形成されている。しかし、近年の土地改良事業により削平や攪乱を受けている場所もある。従って、遺物は原位置から動いているものが多いと考えられるが、地形を考慮すれば、ある程度、当時の状況を想定することは可能である。また、調査区の北西側に谷状の地形が延びているが、傾斜地を上り下りする道跡の可能性はある。なお、途切れる箇所や不定型は、浸食作用の影響が考えられる。

第 1 節 旧石器時代

遺構は検出されず、遺物も少量で、出土範囲も遺跡の南側のごく狭い範囲に限られる。ただし、黒曜石の剥片やチップが出土しており、石器補修程度のことは行われた可能性がある。一時的であっても人々が活動したことがうかがえる。

第 2 節 縄文時代早期

遺構は、集石が 4 基検出された。集石 1 号とやや離れて集石 2 号があり、さらに離れた位置に集石 3・4 号がある。主な構成石材は安山岩であるが、一個あたりの重量に大きな差があり、その他の石材との割合や形態にも違いが見られるため、若干の時期の違いや、設置した集団が別である可能性が考えられる。なお、これらの石材は、通常この土層内では産出しない物で、他の場所から搬入されたものである。

遺物は、遺跡の北西部に出土する傾向があり、C～H－3 区の谷状の地形との関連がうかがえ、台地上と海岸部との往来頻度が高かった可能性が考えられる。また、集石 1・2 号周辺の密度は高く、集石 3・4 号周辺は、密度が低い。なお、石器は、磨石や敲石、石皿や台石などの礫石器の割合が高いが、剥片や剥片石器は、比較的少なく、石鏃も破損した表採品が 1 点あるのみである。当時、このあたりの環境は、木の実などが豊富で、狩猟よりも採集が主だったのではないかと推測される。ただし、集石 3・4 号周辺では、52kg を超えるような重い石皿を運び込みながら、あまり使い込まれていない。これは、その集団が滞在した期間が短かったか、数回程度訪れるに止まったためと考えられる。少ない遺物出土状況も、それを裏付けていると思われる。

第 3 節 縄文時代晩期

遺構は検出されず、遺物も少量で、広い範囲に分散して出土している。ただし、土器は、複数の種類があるため、一時的にせよ、人々の生活が営まれたと考えられる。なお、隣接する石鉢谷 B 遺跡では、確認調査で、まとまった量の土器や石器が出土している。

第 4 節 古墳時代

遺構は検出できなかったが、遺物は、成川式土器がまとまって出土した。甕の口縁部等の特徴からⅠ類～Ⅲ類に分けられる。鹿児島大学の中村直子氏の分類に当てはめると、Ⅰ類は東原式段階、Ⅱ類は辻堂原式段階、Ⅲ類は笹貫式段階に該当するとみられる。従って、古墳時代に関しては、前期から後期にかけての遺跡ということになる。なお、Ⅰ類は、やや広範囲に分布し

ているものの、Ⅱ類～Ⅲ類と重なる範囲もあり、それぞれの分布状況には、特徴的な差異は認められない。

埴や高坏の出土状況では、E・F－3 区周辺に分布しており、丁寧な造形で赤色顔料が塗付けされているものも見られる。また、C－3 区では、手づくね土器も出土していることから、祭祀が行われた可能性がある。南さつま市の白糸原遺跡では、日常生活用具であった可能性が指摘されており、現段階では、詳細は不明である。

また、土器の中にはアバタ状の剥落があるものがある。その中で図化した土器 19 点中、9 割以上が内面に発生しており、内外面は 6 件、外面のみは 1 件にすぎない。原因は、内容物の影響もしくは埋土の影響によるものではないかと考えられるが、特に、112 の壺については、外面は通常の状態でありながら、内面は著しいアバタ状の剥落が認められることから、内容物の影響によるものであろう。ただし、84 の甕や 132 の高坏では、接合した一部の破片のみにアバタ状の剥落が認められるにも関わらず、他は通常の状態であることから、破損し遺棄されてから発生したと考えられ、その場合は埋土の影響など、他の原因が考えられる。

なお、遺物出土状況や土器の接合関係等を見ると、削平を受けた D・E－2～5 区をまたいで出土している物があり、ここにも遺物が集中していたと考えられ、何らかの遺構が存在していた可能性もある。また、主体となる集落は東側の台地上にあった可能性があるが、後述のように造成されているので、残存の可能性は低いと思われる。

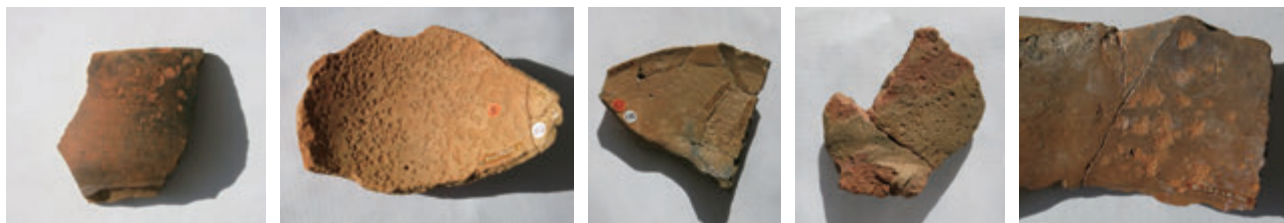
第 5 節 古代以降

山ノ上 B 遺跡と同様に、以下にあるように大規模な土地改良が行われている。(大隅地区埋蔵文化財分布調査概報「国立鹿屋体育大学の確認調査」より 一部抜粋)「国立鹿屋体育大学の新設に伴い、昭和 56 年 12 月 21 日～25 日までの 5 日間、確認調査を行った。対象となる敷地は、鹿屋市と垂水市を結ぶ国道 220 号線に沿った古里町と白水町の間部部の台地で、鹿屋市白水町の 36ha に及ぶ広大な面積をもつ畑地である。この畑地一帯は、昭和 47 年度までに県営の畑地かんがい事業が実施され、整備が進み、階段状の畑地が作られている。旧地形を復元すると小高い丘陵地で、敷地内の中央部が最も高くなっていたと思われる。」

以上の状況により、古墳時代以降に該当するⅡ層は削平され縁辺部にわずかに残存する程度であるため、この層からの遺物はほとんどない。しかし、Ⅰ（表土）層とⅡ層上面からは、古墳時代以降の遺物も散見される様相から、古墳時代以降も継続して人々の生活が営まれてきたものと考えられる。

遺跡の残存状況等

石鉢谷 A 遺跡の発掘調査は終了したが、令和 3 年度は、隣接する石鉢谷 B 遺跡の調査が行われた。縄文時代晩期と古墳時代の包含層からは、本遺跡と類似する遺物が出土しているので、関連がうかがえるとともに、その成果が待たれる。



118 外面の剥落

112 内面の剥落

135 内面の剥落

84 片方のみの剥落

132 片方のみの剥落

第 15 表 土器剥落状況観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	器種	部位	分類	調整 (剥落度 %)		文様	色調		胎土				備考
							外面	内面		外面	内面	石英	長石	角閃石	他	
26	57	E-4	Ⅲ	甕	口縁部	成川Ⅱ類	ナデ	ナデ (2)	—	橙	にぶい黄橙	○			白粒 小石 (赤褐)	外面下部にスス
	59	F-2	Ⅲ	甕	口縁部	成川Ⅱ類	指オサエ, ナデ	指オサエ, ナデ (シミ 5)	刻目突帯 (布目)	にぶい赤褐	明赤褐	○	○		白粒	外面上部にスス
27	75	C-4	Ⅲ	甕	胴部	成川	指オサエ, ナデ	ナデ (20)	—	黒褐	明赤褐	○	○	○	白粒	外面全体にスス
	80	D-4	Ⅲ	甕	底部	成川	ナデ, ミガキ	ナデ (80)	—	暗褐	灰黄褐	○	○	○	白粒	外面上部にスス
28	81	E-5	Ⅲ	甕	胴部	成川	ナデ	ケズリ, ナデ (60)	—	橙	明赤褐	○	○	○	白粒, 赤粒	風化か?
	84	E-4	Ⅲ	甕	底部	成川	ケズリ, ナデ (45)	ケズリ, ナデ (100)	刻目突帯	橙	灰黄褐	○	○			接合の片方のみ剥落
29	94	E-5	Ⅲ	壺	口縁部	成川	ミガキ (50)	ナデ	—	明赤褐	赤褐		○	○	赤粒	外面アバタ状の剥落
	95	一括	表土	壺	二重口縁	成川	ミガキ (10)	ナデ (40)	刻目突帯	橙	橙	○	○		白粒	内外アバタ状の剥落
	107	E・F-4	Ⅲ	壺	胴部	成川	ナデ	指オサエ, ナデ (80)	—	明赤褐	明褐	○	○	○	白粒, 赤粒 小石 (灰)	内面アバタ状の剥落
	112	F-5	Ⅲ	壺	底部	成川	ナデ	ナデ (90)	—	橙	橙		○	○	白粒	内面アバタ状の剥落
	117	E-6	Ⅲ	埴	口縁部	成川	ミガキ (5)	ミガキ (15)	—	にぶい赤褐	明赤褐		○		黒曜石	外面全体にスス
	118	E-6	Ⅲ	埴	口縁部	成川	ミガキ (20)	ナデ, ミガキ (35)	—	赤褐	明赤褐	○	○		白粒	外面にスス
	119	E-6	Ⅲ	埴	口縁部	成川	ミガキ	ミガキ (35)	—	赤褐	明赤褐				白粒 小石 (赤)	外面上部にスス
	120	E-6	Ⅲ	埴	口縁部	成川	ミガキ (40)	ミガキ (60)	—	赤褐	橙				小石 (白, 灰, 赤)	外面上部にスス
30	127	C-4	Ⅲ	埴	胴部	成川	ミガキ	ナデ (5)	—	赤	明赤褐	○	○		赤粒	赤色顔料
	132	F-3・ E・F-4	Ⅲ	高坏	口縁部	成川	ケズリ, ナデ, ハゲム	ナデ (10)	内面沈線	明赤褐	明赤褐	○	○	○	白粒 赤粒	接合の片方のみ剥落
	134	E-3	Ⅲ	高坏	胴部	成川	ミガキ	ミガキ (30)	—	明赤褐	明赤褐	○	○		白粒, 赤粒	外面にスス
	135	C-3・4	Ⅲ	高坏	胴部	成川	ミガキ	ミガキ (35)	—	赤	橙	○	○	○	白粒	脚取付部, 赤色顔料
	136	E-6	Ⅲ	高坏	胴部	成川	ミガキ (5)	ミガキ (80)	—	赤	明赤褐	○	○		白粒 小石 (赤)	

参考・引用文献

鹿児島県教育委員会 1982 『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (23)

鹿児島県教育委員会 1984 『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (29)

鹿児島県教育委員会 1992 『榎崎 A 遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (63)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003 『垂水・宮之城島津屋敷跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (48)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005 『白糸原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (86)

(公財) 埋蔵文化財調査センター 2020 『春日堀遺跡』(公財) 埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (32)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2021 『鹿児島城跡(犬追物馬場・火除地)』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (211)

(公財) 埋蔵文化財調査センター 2022 『山ノ上 B 遺跡・白水 A 遺跡』(公財) 埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (41)

写真図版



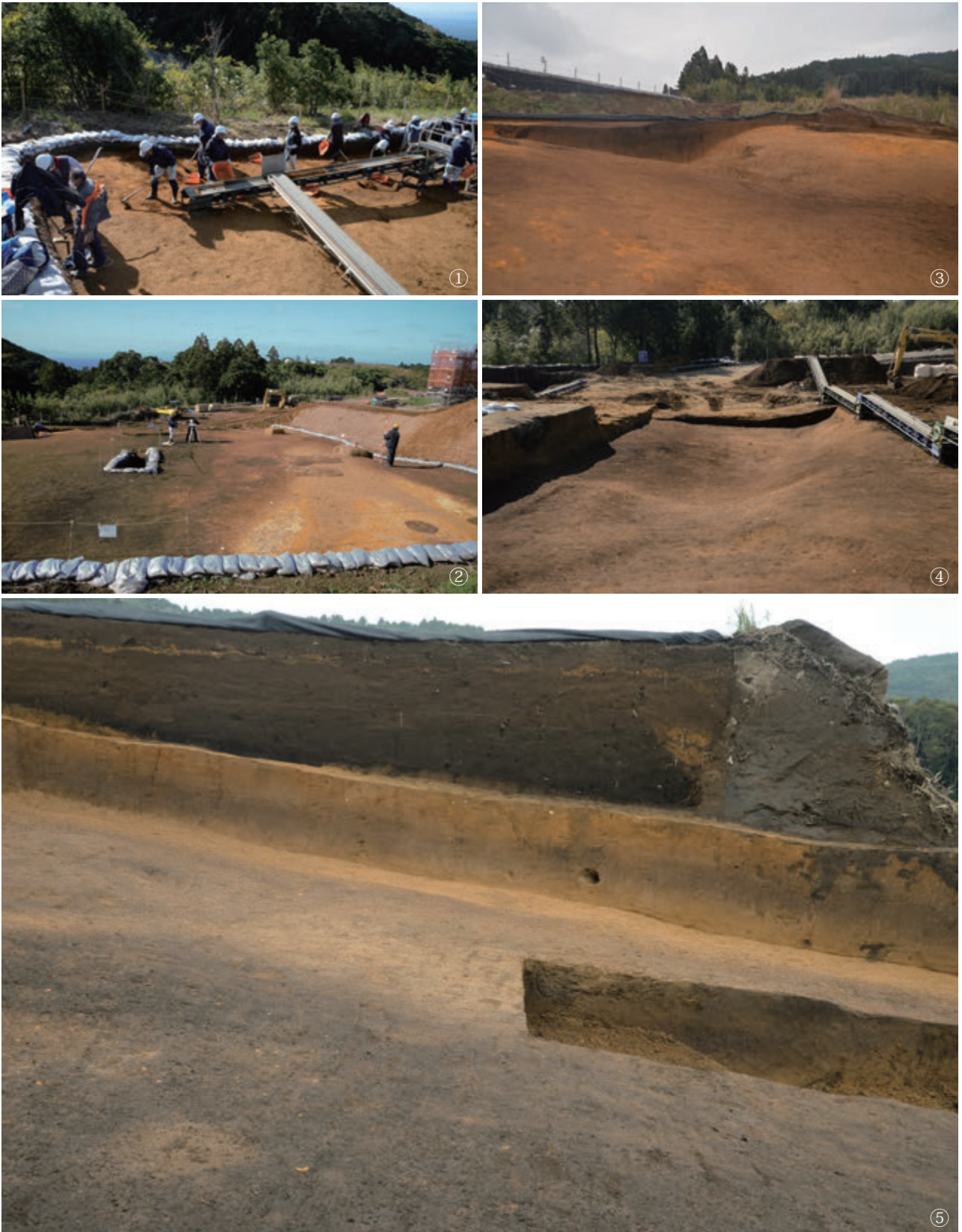
①遺跡全景（西から肝属山系方面を望む）



①遺跡全景（南から高隈山方面を望む）



②遺跡全景（北から開間岳方面を望む）



①調査風景（I-8区Ⅴ層） ②地形測量と造成による地形改変状況 ③谷状の地形（F・G-5区Ⅸ・Ⅹ層上面）
④谷状の地形（E～G-3区Ⅶ層上面） ⑤東西土層断面（G・H-4区南壁）



①



②



③



④

①南北土層断面（H・I-5～7区東壁） ②集石1号検出状況（B・C-1区） ③集石2号の埋土と検出状況（C-5区）
④集石2号検出状況



①集石 3 号検出と石皿出土状況（H-8 区） ②集石 4 号検出状況（H-8 区） ③集石 3・4 号周辺の調査状況
④流れ込みと判断した礫集中部分



①



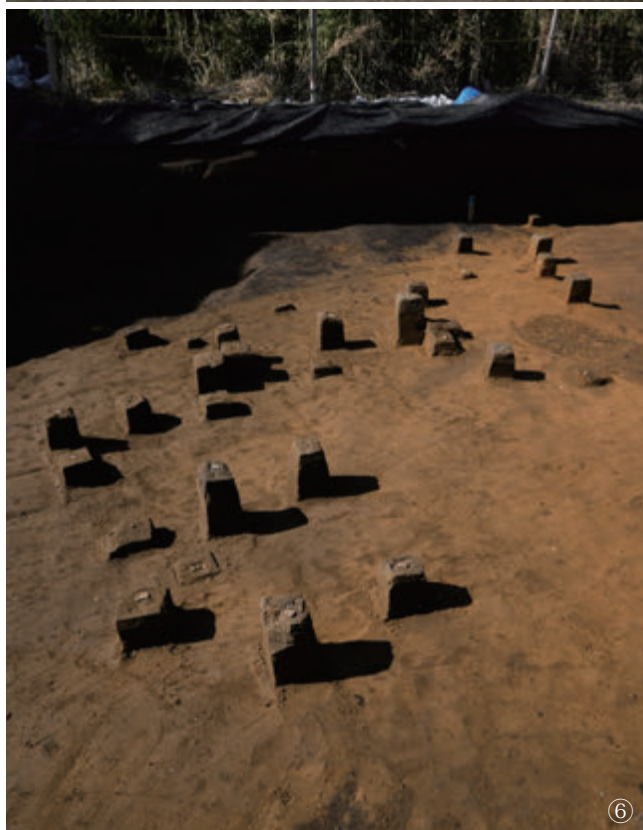
②



③



④



⑥

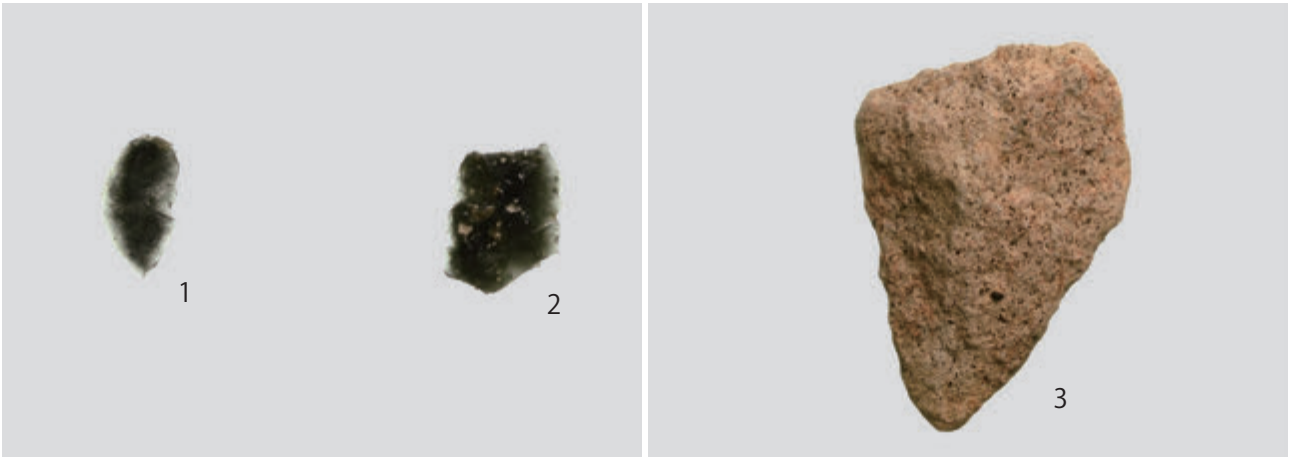


⑤



⑦

①磨石出土状況 ②剥片石器出土状況 ③凹石皿出土状況 ④土器出土状況 ⑤土器出土状況
⑥遺物出土状況 ⑦遺物出土状況



旧石器時代の遺物



縄文時代早期の遺構内出土石器



縄文時代早期の土器



縄文時代早期の石器 (1)



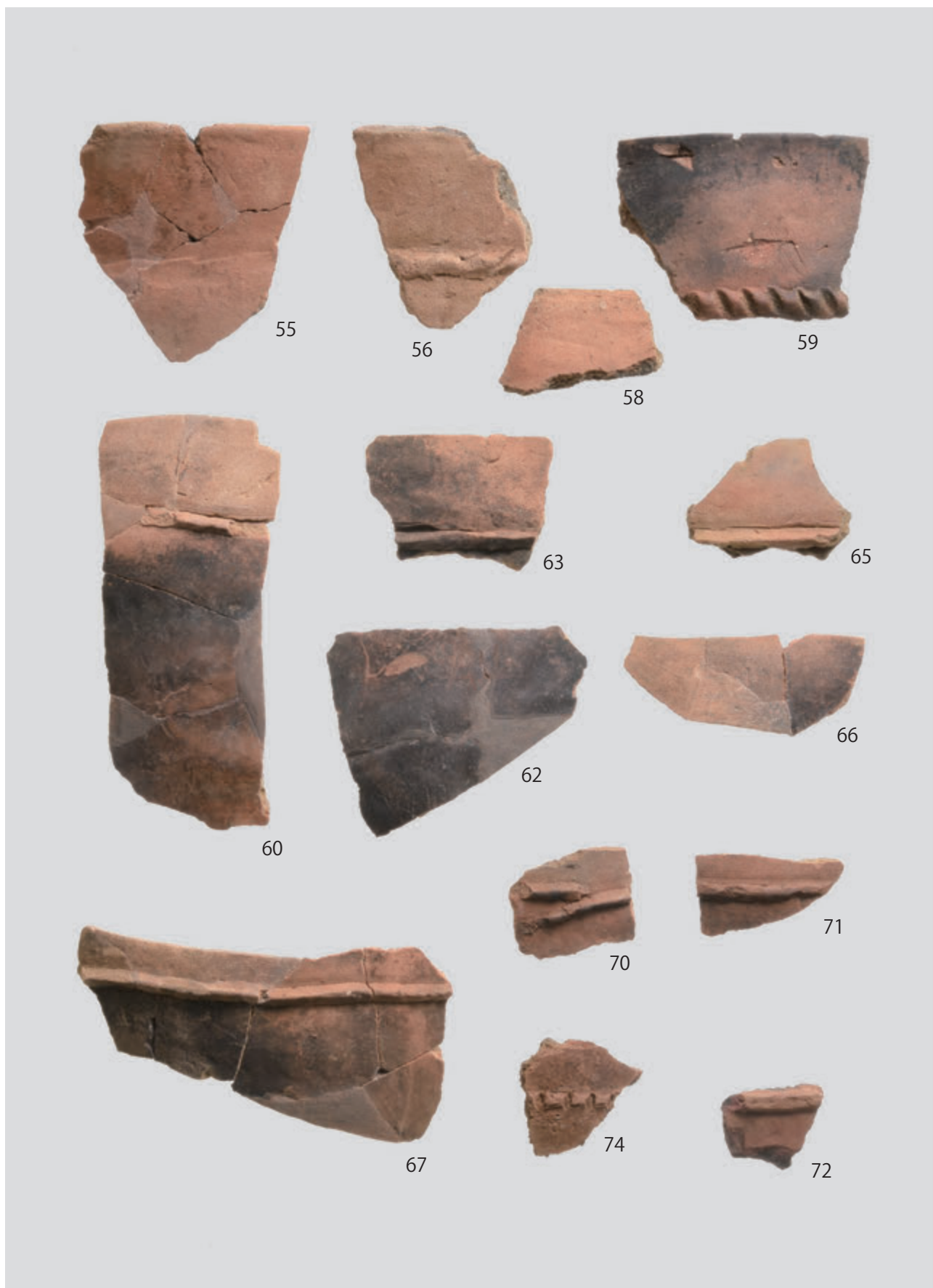
縄文時代早期の石器 (2)



縄文時代晩期の土器・石器



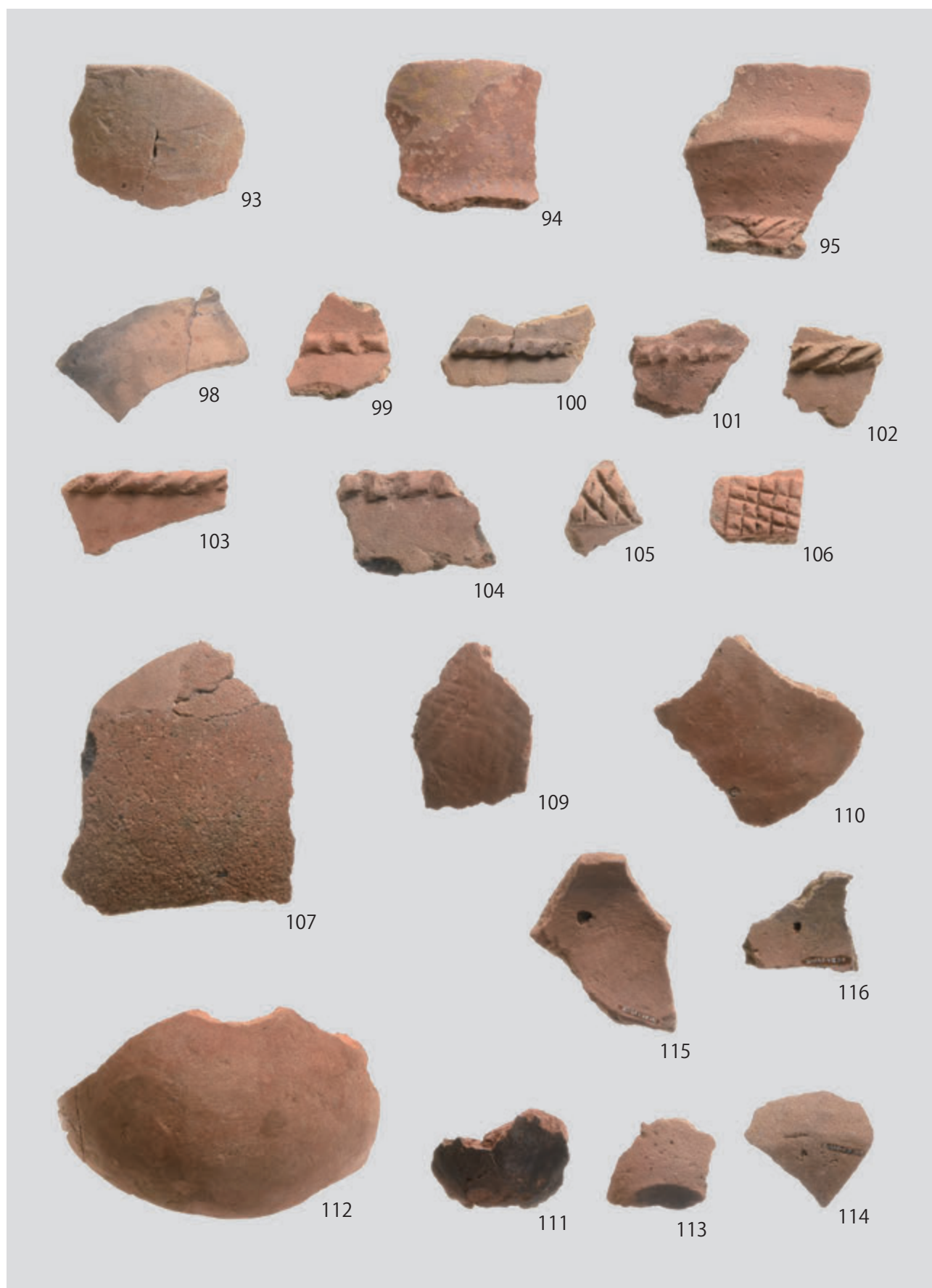
古墳時代の土器 (1)



古墳時代の土器 (2)



古墳時代の土器 (3)



古墳時代の土器 (4)



古墳時代の土器 (5)



古代以降の遺物

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（49）
一般国道 220 号古江バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅲ）

石鉢谷 A 遺跡

発 行 年	2 0 2 2 年 3 月
編集・発行	鹿児島県教育委員会 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 〒 899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森 2 番 1 号 TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576
印 刷	株式会社トライ社 〒 892-0834 鹿児島県鹿児島市南林寺町 12-6 TEL 099-226-0815 FAX 099-225-7933